

# 一撃男の異世界旅行記

鉤なんか

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

サイタマが他の世界に行ってしまったらというのを想像してみた。

やりたかったからやった、後悔はしていない。

# 目次

コードギアス	
その男正義の味方	1
圧倒的正義	21
アカメが斬る	
殴る	72
もう一発殴る 前	100
拳を握る	134
拳をひく	156
拳をひねる	186
拳を放つ	203
砕く	245
壊滅	304
護国機神	347
龍と魔神	385
帝都	448
ご注文はうさぎですか？	
兔小屋	503



## コードギアス

## その男正義の味方

## とある公園

草だらけの入口

ガラスの破片が散らばっている砂場  
鎖が外れて使えなくなったブランコ

ペンキが剥がれて茶色くなっているシーソー

鳥の糞だらけの滑り台

もはや誰一人として使っていないであろうその公園には2人の男がいた  
半袖短パンの濃い男

上下ともに青ジャージ姿の髪のない男

いや正確には1人と1体

「ゲヒヒヒヒ、こんな誰もいない公園でも暴れていれば人が来るんだなあ」

猪のような顔、黒く濃い毛の生えた腕、全身が体毛で覆われている。

そう、この世界に偶に出現する人に害をなす異形の存在

怪人と呼ばれている存在。

怪人と呼ばれる生物の大きな発生理由としては

人間以外の生物が環境汚染などを引き金に身体が変化し怪人となったり

科学の力で人間からかけ離れた存在となったり

逆に人間に近い存在となったりである。

また

元来人間とは異なった姿形で進化をしてきた生物が、何かしらの理由で人間と敵対した時に怪人と呼ばれる時もある

これらの怪人による被害は甚大で、一度出現すると死者は数百、数千人規模に及び下手をすれば都市がいくつも消滅する

しかし、それらの怪人が出現するのは稀である

最も多い怪人は人間の悪癖の偏重へんちゆうによる発生である。

この怪人の特長としてはどこにでも出現する確率があるということと、尚且つ初期の段階ではあまり被害が出ないという事である。

被害があまり出ないというのは近年増えている強い怪人の災害により弱い怪人が後回しにされているという事である。

弱いといっても怪人は怪人である

大の男10人がかりでも手に負えない

人に化けたまま移動が可能

体も小さく目立たない

しかしこの怪人の1番の特長は

放置すればするほど強くなるということである

「ゲヒ、ゲヒヒヒヒ 冥土の土産に教えてやるよ、俺様はなアダルトビデオの見過ぎで豚の怪人となった変態紳士様だ」

元人間であるこのタイプの怪人は知能が高い個体が多く。

また自分の偏重を重ねることで強くなる。

「だがなあ怪人として外に出歩いたら直ぐにヒーローに殺されちゃうからなあ、怪人になってからもアダルトビデオを見続けたんだよ」

また強くなると姿形が変わり明らか凶悪な姿になる。例えば、筋肉が膨張し、牙の並び、体毛が濃くなり、血管が浮き出るなどがその例だ。

「そしたら全身の毛という毛が濃くなつたないつのまにか猪になつちまつたんだよ」

現にこの猪型の怪人は体が10メートルほどにまで膨れ上がり着ていた服はビリビリに破れ、口に生えていた短い牙はもはや象の5倍ほどの長さで太さで、鼻は某国民的映画の白毛の猪ほどの大きさだ

猪の怪人も元は人間だった

高校を虐めのせいで中退した

家でする事もなく独り寂しく過ごしていた

何度もあいつらに復讐してやろうと思った



力があればそう思い泣きながらアダルトビデオを見続けた

いつのまにか体が変わっていた、だが今の自分じや復讐は成し遂げられない  
ネットで調べた、どうやったら怪人は強くなれるのか

『自分が怪人になった行動を続けるそうする事で怪人は強くなる』

それを信じアダルトビデオを見続けた、そして強くなった

自分でもわかる自らが強いことを

さようなら人間の自分

さあ、共に行こう怪人の俺

これからもっと、もっと強くなる

まず俺を虐めたあいつらを殺す前にこのジャージのハゲで予行練習をしておこう。

「そう、進化した俺様の名前は、ゴボロラア：

「はなしが長い」

その言葉と同時に彼の視界は黒く染まった

「つたく、『ちよつとそこのカツコイイお兄さん僕の話聞いてくれませんか』て、言われたと思つたら、怪人だったのかよ、しかも襲いかかつてくるし」

『ぐちゃ　　べちゃ　　どちゃ』といういやな音と共に辺りに怪人の肉が散らばる

「つたく、ほんと最近変なのに絡まれるよな」

「そう思いながら男は手に持っていたビニール袋の中身を確認する

夕暮れの時の寂れた公園

推定レベル鬼はあつたであろう猪の怪人を一撃で屠るこの男

そう彼の名はサイタマ

現在B級23位の男である



その日サイタマはすごく上機嫌だった

天気も良く気持ちのいい朝を迎えられる事もできた、普段はピッタリと後をついてくるジェノスも今日は協会に呼び出されており気が楽でいい。C市のスーパー コヨミンで行われた、閉店全品70%オフセールでも欲しいものを殆ど手に入れることができた。

途中怪人に出くわしたが買った商品は珍しく無傷のまままでビニール袋すら破れていない、尚且つ服には返り血一滴すら浴びることはなかった。

「さてと、早く帰って今日は寝るか」

そう言つてサイタマは公園を後にしようとする

しかしあるものが目に付いた

「ん?」

公園の入口、先ほどまで何も無かつたはずのその場所には自動販売機があつた

点灯するネオン、見た事もない不思議な色の自販機

どんな飲み物があるのか非常に気になってしまう。ただ早くしないと買ったものが全てダメになってしまう。

急いで帰ろう。

そう思いつつもサイタマはつついっつい自動販売機の前に立ってしまふ。

自販機の誘惑には勝てないサイタマであつた。

自販機のラインナップはどれもサイタマの見たことのないものだった、ほとんどが一本120円という自販機定番の値段、しかもどれもデザインが面白い。

「ヤシの実サイダーは美味そうだな、イチゴおでん流石にこれはないか。メロウコーラ、これも美味そうって、9万円はぼったくりだろ。それにストライカーユニット、ノイズ、

チャクラ、ISはデザインはいいけど中身が想像がつかないぞ、KAHに至っては真つ赤だし」

やっぱりやめよう、そう思い後ろに一步下がった時、サイタマは自分の喉の渇きに気がつく。

思えば朝から何も飲んでない、この雲ひとつない晴天の中、C市まで走って行った。C市に着いてすぐバーゲンセールでおぼちゃん達との死闘となった、どっかで休もうと思っただら目の前のバス停にZ市行きのバスが丁度着いて2時間くらい乗っていた

あれ？俺一滴も水飲んでなくね？

そう思うと乾ききったこの喉をどうにかして潤したいという気持ちが強くなる。

よし、買おうと決める

そしてサイタマは財布の中身を確して驚愕することとなる

そう、財布の中には0が4つあるお札しか無かった。

そう普段なら決して起こらない嫌な奇跡

たまたま財布の中に入っていた小銭をちようど使い切ってしまったのだ

仕方ないそう思い、断腸の想いでお札を自販機に入れ1番美味しそうなヤシの実サイダーのボタンを押す

ガシヤ　　コンという音と共にジュースの落ちる音が聞こえる

そして本日2度目の嫌な奇跡が起こった

『テツテレレレ　　テレーレレ　　テレーレレツレレ』

明るい陽気な音楽が自販機から流れる

そう当たりを引いたしまったのだ

ただの当たりではない大当たりである

ガシャコン

ガシャコン

ガシャコン

ガシャコン

ガシャコン

ガシャコン

ガシャコン

ガシャコン

ガ

シャコン

ガシャコン

普段では絶対に引くことはないであろう、大当たりを引いたことに驚きを隠せないサイタマ、しかし引いたかどうかやっただけのジュースを持ち帰ろうか。

「とりあえずジャージのポケットに4本入ったぞ……後2本はよし、入るな」

ズボンのポケットが少し深いのに気づきもう2本入れる

「ビニール袋にこれ以上入れると破けそうだしな」

そこでサイタマは名案<sup>迷案</sup>を思い浮かぶ

そう待ちきれないのなら飲んでしまえばいい

ポケットに6本目の前に4本

そしてサイタマは1本目のジュースに手を取り、そのプルタブを開ける



一台のトラクターが地下鉄内を走っている。

電気の着いていない薄暗いこの空間を決してうまい運転とは言えないが狭い線路の壁にぶつかる事無く走っている。

しかし、そのトラクターの窓ガラスは割れており帽子を深くかぶった運転手の男は肩から大量の血を流して自らの長い髪を赤く染めている。

男の傷は銃で撃たれたもので運転席は男の血がたまっている。男はいつ気絶してもおかしく無い状況だ、にも関わらず片腕でずっと運転を続けている。

男の運んでいるものは男にとっていや、男の仲間にとつてとても重要なものであるから。



しかし大量出血のせいかそれとも帽子を深く被りすぎたせいか、目の前の大穴に気がつかず、トラクターは前のタイヤが大穴にハマり動けなくなってしまう。

「くっ、頼む、扇見つけてくれ」

男は最後、リーダーに一縷の希望を残し、ボタンで荷台を開け、気を失った。荷台に無関係の1人の少年がいるとも気がつかずに



サイタマは走る

力のかぎり走る

左手にはビニール袋、ジャージポケットには6本の飲み物、胃のなかには4本分の飲み物

目の前には今もなお、現在進行形で自ら遠ざかる自販機のお釣り500円

そう目の前を転がる5000円

普段なら絶対に落とさないその大金

サイタマは珍しく落としてしまったのである

5000円位仕方がない普通の人だったらそう思うだろう

しかしよく考えて欲しい5000円である

先ほどの自販機ではジュース4本、週刊誌が最低でも1冊、某ハンバーガーショップでドリンクとポテト付きの昼食、半額弁当3つ、牛丼並盛り、たこ焼き一皿

たかが5000円

サイタマはそうは思えなかった

今まで何度も経験したことがある

あと5000円あれば、あと1000円あれば、あと50円あれば20円、10円5円1

円……

あの日、ジェノスから大金を貰ってもこの貧乏根性だけはどうしても治らなかつた。

だから走る

例えばビニール袋が破れていて買った商品がなくなっているのに気がつき足が止まりそうになっても

胃袋がたぶんだぶんで気持ち悪く今にも吐きそうでも

途中ぶつかかった壁のせいでポケットに入っているジュースの缶が破裂していてジャージを濡らし嫌な感じになっけていても

目の前の500円を決して逃してはいけない

そう、視界の端で緑色の髪の少女に銃口が向いていても



「なあ、俺は夢でも見ているのか？」

「いや、これは夢ではないだろう。現に私はほつぺたをつねっているが痛みを感じるぞ」  
「…俺のほつぺもつねってくれ」

緑の髪の少女C。Cは自分のほつぺをつねっていた手をはなし隣の黒髪の少年、ル  
ルーシユに向け、その頬をつねる。

ああ痛い

「やはりこれは夢ではないのか」

「ああ」

「まったく、どんな悪夢だ」

夢であって欲しい

どれだけ思っても現実には変わらない  
そう、痛いほど知っている

しかし目の前で起こっている光景はまさに悪夢だった

ブリタニアの飛行機が我先にと墜落し

気絶した兵士達が縛られ一箇所に集まり

瓦礫に埋もれていた人々が助けられ

ブリタニアの新型ナイトメア、サザーランドがサザーランドにぶつかり

脱出用のポットが空中で消え

数々はあるナイトメアが一箇所に運ばれて集められ山となり

人間がナイトメアより速く走り

：人間がナイトメアの攻撃を受け平気な顔をして

人間が？逃げようとするナイトメアを引っ張って：

「なあ、あの捕まったやつ、ブリタニア皇族の近衛兵じゃあ」

「ああ、多分な」

「あつちでナイトメアが飛んだと思つたら今度はこつちでナイトメアが飛んだぞ、それにそつちではナイトメア同士がぶつかったぞ」

「これがほんとのナイトメア悪だな」

「ハハハハハ」

2人分の乾いた笑いが辺りに響く

少年は信じられない現実の中、一息つくど勇気を振り絞つて少女に尋ねる

「なあ、ブリタニアは今いつたい、何と戦っているんだ？」

「そうだなあ、私たちの命を救ってくれた、正義のヒーローじゃないか？」

正義のヒーロー

誰しも一度は憧れる完全無欠のヒーロー



## 数分後

エリアー1の総督クロヴィス殿下の命により

戦いは終結した

最も、戦いに参加したナイトメア、新型旧型含めすべて破壊し尽くされ、銃は弾丸1発に至るまで破壊尽くされ、戦える兵士既にゼロ。最後の最後に逃げようとしたクロヴィス殿下は乗り物ごと持ち上げられ、湖に沈められ、出てきたところをサイタマによつてとつちめられた。

ちなみに、緊張のあまりサイタマの頭を笑ったクロヴィス殿下（笑）は死ぬことはな

かったが、頬が漫画のように腫れ上がったという。



## 圧倒的正義

私は夢でも見ているのか？

「いったい、どうなっている!?？」

地図の上を青く光る矢印が次々と消え

赤く染まる

「包囲網、ほぼ全壊です」「歩兵部隊、連絡とれません」「戦車部隊通信がとれません」「飛行部隊、消息不明」「ダニエル卿、スパロー卿、反応消えました」「ラズロー隊、反応消

えました』『近くにいた、オイゲン卿、バレリー卿共にロスト』『報告は、報告はまだか？』『ダメです、ほとんどのナイトメアと通信がとれません』『帰ってきたものは？』『ただいま確認中、ですが今のところ帰ってきた者は確認されておりません』『上空からの偵察は？』『すでにI5機、全て撃ち落とされています』『敵の兵力は？』『確認はまだなのか？』『最初にいたグラスゴアの反応が消えてから敵の姿は確認されておりません』『ギルフオード卿からの通信が入りました、繋がます』『陛下、…お逃げください』『ギルフオード卿？』『どうしたというのだ？』『ギルフオード卿、反応消えました』『陛下、御決断を』『陣形、崩壊、維持できません』

いったい何が起こっている？

「一時撤退だ、戦線を下げる」「しつ、しかし」「今は陛下の命が優先だ、ここには陛下の命すら危うくするぞ」「クインシー部隊、反応消えました!!?」「防衛網がつ?」「守

備兵隊、反応いつのまにか消えています」「なっ、早くしろ!!? 急げ」「敵影確認、モニターに映します」

モニターに何かが映る

「サザーランド!!?」「新型か!!?」「テロリストか!!?」「いや、それはないだろ」「どここの部隊のものだ!!?」「それどころではないだろ」「いや、さて、あのサザーランド動いてないぞ」「そんな、馬鹿な!!?」「確かにあのサザーランドは機能を停止しています」「敵サザーランド方向を変えていきます」「おい、何だあれは、まるで投げ捨てられたようじゃないか」「何かがこちらに向かって来ます」「さっさと退避しろ!!?」

私は見逃さなかった

サザールランドが飛んだ時、確かにその足元に1人の人間がいたことを

その人間が鬼のような形相でこちらに向かっていることを

そして感じる浮遊感。何かに持ち上げられる感じ

そうだ、これは悪い夢だ

今ごろ現実ではシンジユクゲットーは壊滅していて

今ごろアレも回収できているはず。

「おい…どうした？なぜ下がらない」「そつ、操縦が効きません」「なんだと!!?」「陛下、このままでは湖に飛び込むことになります」

「おいおい、人の眠りを覚まそうとするなんて、随分無粋じゃないか」

「陛下あ!!?お気を確かに待ってください!!?」「もつ、もうだめだあ!!?」「おちりゆう

うううう」「直ぐに戻れはやくっはやくだあああゴホラボラボラブロ…

口の中に水が入り込んでくる

景色は変わらない

ああそうか、これは現実だったのか



「……、ん？ここはどこだ？」

見知らぬ天井 真つ白な世界

「えっ？うそっ？ほんとに？！先生っ、先生！！？」

知らない女性の声が遠ざかり、重いまぶたをさらに開け辺りを見回す。

装飾は全く施されていない、決して自分の様なものが寝るのには相応しくないベット

高級感の全くない、自分の頭を置くにはおこがましい枕

安っぽい、ただ単純に温かくするためだけのタオルケット

薄い、どこで売っているのかすらわからない真つ白なカーテン

古臭い、いつの時代に作られたのかもわからない異様に厚いテレビ

自分がどこにいるのか分からないがとりあえず起き上がろうとする。しかしなぜか体言うことを聞かない、まるで自分の体ではないかの様にまたは何年かもの間寝ていたかの様に

手すりを掴み、両手を使いなんとかして起き上がる

体を起き上げるといふ動作だけでひたいには汗が滲み手が震え、体が軋む

よく見てみると服は普段着ているような貴族に相応しい服ではなく病人が着るような薄い袖の短いものだった。

起き上がり一息つくと扉の方から大勢の人が入ってきた。

全員が全員白衣を着ていていかにも医者だという格好であった。一番最初に入ってきた医者は自分のことをこの病院の医院長だと語り私がどうしてこの病院に来たのかを語った。

そして思い出した

とぎれとぎれではあるが自分がなぜここにいるのか



あの日、私は深い湖の中からなんとか躡きながら陸に上がった

その時だ不意に誰かに襟首を掴まれて

「自分がなにをしたかわかっているのか？」

そう言われた

その後引きずり回されるような形で見て回った



今まで自分が命令していたことを

兵士は銃を幼おさないこども子に向ける。母親が子供を守ろうと子供に覆い被さる、それを笑いな  
から撃ち殺そうとする 醜い

ナイトメアはわざと銃での狙いを外し人々を一か所に集めてから撃ち殺す、コック  
ピットから聞こえる楽しげな笑い  
耳障り

イレブンの子供が血を流しながらも倒れそうになりながらも自分の親を遠くへ逃が  
そうと一緒に逃げようとする それを無駄な努力だと言わんばかりに兵士が銃を  
向ける

辺りは阿鼻叫喚の地獄絵図となっていた

私は自分の地位の為だけにこんなにも人を殺そうとしていたのか

そう思っただけで胃の中から酸っぱいものがこみ上げてきた

「うわああああん」「おかあさんおかあさん」

子供の叫び声が聞こえる

やめてくれ

「イレブンを死にやがれ」「ヒヤッハー」

兵士の持つ銃の撃つ音が聞こえる

やめてくれ

「だっ、だれかたすけてえ」「せめて子供だけでも、子供だけでも助けてあげてください」「イレブン風情を助ける義理はない」「イレブんに生まれたことを後悔しな」「ヒヤッハー」

弱いものの力ない悲鳴が響く

兵士達の愉悦に満ちた声が聞こえる



私が皇帝の座を手に入れようとすれば  
もっと大勢の人の命が失われる

何がエリアーの総督だ、これじゃあただの人殺しのまとめ役だ

今、誰かが気づき止めることができたなら

目の前の命は救えるのに

「なあ、お前が一番偉いんだろ？ だったらお前の一言でこれは止められるんじゃないか  
？」

そうだ、確かにそうだ

そう思い私は立ち上がった

そして声を張り上げて喉が枯れても叫び続けたんだ

「全軍に告ぐ、ただちに戦いをやめよ」

銃声が未だ響く中私は今までに出したことのなくらいに声を張り上げて言った。

これじゃあダメだ全員に聞こえない

もつと広範囲に停戦命令を伝えないと

私は直ぐに先ほどと同じように引きずられる形となる。しかし声を張り上げスピーカーを使い言葉を告げる

『全軍に告ぐ、ただちに停戦せよ!!? エリアーの総督にして第三皇子であるこのクロ  
ヴィス・ラ・ブリタニアの名の下に命じる即刻に停戦せよ!!?』

そうだ、その後だ

私は大勢の兵士を連れてビルの隙間に挟まったイレブンを救い。お腹を空かせた子供達に食糧を与え、石を投げられながらも人を何人も救ったんだ。

「ブリタニアのクソが死にやがれ」「あんたなんかの助けなんていらぬ」「いいこぶるんじやねえ」「殿下はいつたいうなされたんだ!!? あれじやまるできちがいじやないか」「殿下おやめ下さい、体が持ちません!!?」「お前のせいで、お前のせいでうちの子は!!?」「クソ貴族がツ!!?」「とつとと帰れこのクソ野郎」「ヒヤッハー」「ブリタニアの豚のくせに」「今更何をしているのよ、そんなことしたつてうちの子は戻つてこない」「おかあさんを返せ、この人殺し」「ヒヤッハー」「帰れ!!?」「ブリタニアのクズが」「くたばりやがれ」「殿下を止めろ」「まあなんて汚らしい格好」「あれじやあ威厳も何も無い」「殿下は皇帝の座を諦めたのか!!?」

いろんなことを言われた

悪口、陰口、嫌味、罵詈雑言それでも私が人を助けたのは

「お兄ちゃん、助けてくれてありがとう」

瓦礫の下敷きになっていた少女を助けた時  
その言葉を受けて電撃が走ったからだろう

今まで受けたどんな賞賛の声よりも嬉しく

今まで受けてきたどんな罵詈雑言もかき消してくれる

胸が熱くなる言葉

皇帝の座を争っていたことが馬鹿みたいに思えてきて、陰口叩いているやつや悪口を言う奴らのことがなんとも思わなくなつて、腕が棒になろうとも足が笑つていても、何度と倒れても何度とくじけそうになつたとしても、あの言葉があつたから私はあの時あの行動にうつれたのだ。

その後何日もかけて、シンジユクゲッターの人々を救い出したんだ。

ナイトメアがほぼ使えなくなり人命救助にかなりの時間がかかると予想されていたが、彼のおかげで比較的早く終わり、多くの人の命を救うことができた。

名誉ブリタニア人の兵士は進んで協力してくれた。ブリタニアの軍人も少しずつだが手を貸してくれた。ロイドの開発したランスロットでビルに取り残された人たちを多く救えた。

シンジユクゲットーの瓦礫を人のいない場所に一か所に纏められ、簡易ではあるがイレブンの住む居住区を作り  
全てが終わって

心から喜ぶ人の顔を見て

涙が出てきて



誰かに呼ばれて

乾いた音が響いて  
頭に衝撃が走って

空が遠くなつて

暗い穴に落ちて

遠くで笑うルルーシユの顔が見えたんだ



私は気がつくともまたベットの上で横になっていた。今度はスムーズに起きられるが体の節々がまだ痛む

室内には誰一人としていない、小さな机の上には赤いボタンと手紙が置いてあり、手紙には『何かご用がありましたらこのボタンを押して下さいと書かれていた』

今でも思い出すあの惨劇

幾度となく繰り返される銃声

銃声の数だけ辺りに悲鳴が響き

その悲鳴を覆い尽くすほどの銃声が聞こえてくる

私があの時停戦命令を出していなかったらと思うとゾツとする

いや、あの戦いは終わっていたのだろう

彼があの場合にいた時点で

ナイトメアよりも早く走り抜け

ナイトメアを使ってですら持ち上げられないような巨大な瓦礫を軽々と持ち上げ

ブリタニアの軍人に向けて発砲するテロリストの弾丸を全て受け止める

理不尽な力

絶対の力

不意に窓の方から風が入ってきた

「あっ」

私が窓の方を向くとちようど入ってきた人物と目があつた

あの時、私を引きずり回した彼と



エリアー11あらため日本上空

ここでは今までにないほどの規模の戦争が起きようとしていた。

シュナイゼル・エル・ブリタニア率いる黒の騎士団  
ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア率いるブリタニア軍

世界の命運をかけた戦いが今始まろうとしていた

それをつまらなそうに眺める2人の男

1人は、白いマントを風にたなびかせながら、ぼーとした顔で空に浮かぶナイトメア群を眺めていた。男は黒く輝く靴と赤く光るグローブの付け心地を確認しながらもナイトメア群からは目を離さない。

もう1人はどこかで拾ってきたのかわからないようなひびが入った目の部分が黒いヘルメットを被りところどころ破れ少し黒ずんでいるの白いTシャツとなぜか真っ赤なジーパンを履いていた。

1人が不意に呟いた

「すみませんね、手伝わせてしまって」

「まあいいよ、兄弟喧嘩を止めるのもヒーローの仕事だしよ」

もう1人もどこか呆れながら答える、その後、暇だったし という言葉を小声で言ったが声をかけた方には聞こえなかったようだ

その後も彼らは談笑しながら、ストレッチを始めた

目の前で繰り広げられている陣形合戦を無視して、たった2人で世界の命運をかけた戦いに割って入るといふのだ

「それじゃ私がああ船をやるんで、先生はああ縦長のやつお願いします」

ストレッチを終えた2人は立ち上がり歩み始める

ヘルメットの男は多数のフレイヤを搭載し、無数のフロートシステムを搭載したナイトメアに囲まれた天空要塞ダモクレスにいる自らの命に執着しない男に向かって

白いマントの男は「絶対遵守の力」を持ち、その力を使いブリタニアを支配し、そして自らを完全な「悪」となろうとする1人の少年に向かって

世界をかけた戦いも、彼らの視点で見ればただの兄弟喧嘩としか見えなかった



「!?前線部隊、何者かに砲撃を受けています!!?」「陣形に大きく穴が!!?」「右翼にも被害が」「浮遊航空艦、被弾しました」「地上部隊、攻撃されています」「前線部隊、残り半数!?」「敵砲撃速度確認」「速度、マツハ3!?」「うそっ?いくらなんでも、早過ぎない」「左翼、右翼共に未だ攻撃を受けています!!?」「砲撃部隊9割壊滅!?」「地上部隊全て連絡が途絶えました」「浮遊航空艦、4機撃墜されました」

「前線部隊全て壊滅!」「ほう、ルルーシユの隠し玉かな?なら「右翼、左翼共に攻められつつあります」「黒の騎士団 小型可翔艦3機との連絡が途絶えました」「イカルガ搭載ハドロン砲破壊されました」「ピンポイントだど!?」「黒の騎士団、暁34機撃ち落

とされました!!?」「ガレス7割破壊されました」「イカルガ未だ砲撃を受けています」「小型可翔艦また3機撃墜!!?」「モルドレット被弾、右腕損傷」「総戦力の4割がこんな早くもつ!!?」

地図上に表示されている青い印と赤い印の上に次々とLOSTという文字が表示される、しかも異常なほど早い。

いち早く危険だと判断した2人は同じ決断を下す。

「一時戦線をさげる」

「戦線を下げよう」

両軍ともに一時的にはあるが戦線を下げることにした。ルルーシュは富士山に少



しの部隊を配置し、残りを全て大きく下がらせた

シユナイゼルはダモクレスの要塞を敵の砲撃が届かなくて、部隊には散らばるようにして一人一人の被弾率を低下させる

その判断が正しかったのかどうかは直ぐに分かることとなる。



富士の樹海から飛んでくる謎の砲撃により、ルルーシユ率いるブリタニア軍もシユナイゼル率いる黒の騎士団も被害は拡大の一途辿っていた

誰かが樹海の上空を飛行すれば落とされ

樹海のどこかで黒煙が上がる

次々と落とされていくナイトメア、しかし二機のナイトメアだけは数十分ほど樹海の

上を飛行していた。

赤と白

赤は未だ何もできていない状況をなんとか脱出しようとして

白はゼロ・レクイエムを成し遂げるため、自らの罪を償うため

「スザク 敵影確認できるか？」

「紅月、敵の姿を捉えられるか」

富士の樹海から飛んでくる砲撃はたまに止むことがある、しかし直ぐにそれは再開する。数分に一回、数十秒に一回と規則性は無いが止む。

『君がやれと言うのなら』

『ああわかった』

これで何回目になるだろうか、かれこれ数時間は避け続けている気がする、何度も何度も樹海に近づいては砲撃を回避し敵の姿を確認しようとする。しかしなかなか見つからない。見つかるのといえ、えぐられた大地、山のようにつまれたナイトメアか真つ二つに折れた大木くらいだ。

「オール・ハイル・ルルー」不意に後ろで声がした、振り向くと一人の男がナイトメアのワイヤーを引っこ抜き何人かの人をぐるぐる巻きに縛りあげていた。男は縛りあげた人間を担ぐとどこかに走り去っていった。

赤と白はお互いがお互いがあることは認識していた、だが今は情報が先だそう思い映像を送る

『敵影確認そつちに情報を送る』

『見つけた！そつちに情報を送る』

赤はなんとなくだが分かっていた。あの日あの時もこの人は戦っていた。こんなことができるのはこの人しかいない。あの時思った、この人なら世界を変えることができる。この人なら私たちを救ってくれると、しかしこの人はその後現れなかった。どれだけ探してもどれだけ待っても現れなかった。

「なのに今さら現れて…」

白は納得した。あの日あの場所でこの人のおかげで多くの人命が助かった。あの時、突然の命令で人命救助に駆り出され、なぜかクロヴィス殿下と一緒に瓦礫をどかしたのを覚えている。その時となりで巨大な瓦礫を1人で運んでいた。ギアスよりもある意味タチの悪い力。

「だけど、今は!!？」

再び砲撃が始まる前に情報を伝える

ルルーシユはスザクが持ってきた情報を元に策を練る

シユナイゼルは藤堂を通じて紅蓮から送られてきた映像を見て、ナナリーにフレイヤを使うように言う

そう、数年ぶりに現れたヒーローは  
今や彼らの敵である



2人の男は別々の方向に走っていた

2人からしてみれば軽い速度だったのだが周りからしてみればそれには目にも止まらぬ早さだ。

まず目の前の機械おもちゃを没収する。こんな危ないものを喧嘩に持ち出すなんてよろしくない。次に空を飛んでいるもの、軽く石を投げつける、当たりどころが悪いと爆発してしまうので気を使わなければならない、第一に石を当てたぐらいで落ちるなんて人が乗るための安全基準がなっていないと思うがしか立たない事だ。1番めんどくさいのが喧嘩を売ってくるやつだ、しかも何かを叫びながら突っ込んでくる。おでこに軽くデコピョンをして気絶させてそこら辺に落ちていた機械からワイヤーを伸ばして縛って動けないようにして安全な所に運ぶ、集めた機械は危ないから一か所にまとめて置いておく。

「あつー!」「よお」

気絶させた人を一か所に集めていると2人は同じ場所で行くわした

「つたく、ほんと良い迷惑だな」

「すみませんね、私の弟と兄が迷惑をかけて」

重いため息をはく。彼らが行動したのはたった数分、それなのに数だけで言えば両陣営の半分は以上の兵力を排除した、しかしそれでもまだ残っている。

ドオおおあああんと巨大な爆発音が辺りを包みこんだ

「おいおい、まじかよ」

音がした方向を見ると富士山が轟々と煙を噴き出していた

火山が噴火したのだ

「すみません、あれ頼めますか?」

「つたく、隕石の次は噴火か、ヒーローも楽じゃないな」

そう言っ彼らは再び動き出す。



「全く流石だよヒーロー、あの時と同じように絶対的な力で無理やり戦いを終わらせようとするとは、だがしかし、噴火という意志の無い脅威に対しどう立ち向かうのかな？」  
ルルーシユはそう呟きながらも指示を出す。

あえて噴火している富士山の近くにギアスで操った兵士を置く、敵である筈の人間ですら救うのならそれに付け入る隙が生まれる。流石のヒーローも大勢の人間を救うには時間がかかるだろう。たとえ少ししか時間が稼げなかったとしても、火山灰が肺を侵し、体には深いダメージが蓄積され弱体化はするだろう。

「今回ばかりはヒーローはお呼びではないのだよ」  
ルルーシユはそう言って高らかに笑う



「必殺　マジシリーズ」

不意に何処かから声があった気がした

「へ、陛下、まつ、まえ」

ロイドが何かに気がついたのか声が震えている

「なっ!?？」

その時ルルーシユは見た

目の前に広がる巨大な

高く高くそびえ立つ黒い壁を

同時刻 シュナイゼルは珍しく戦慄していた  
目の前にそびえ立つ黒い壁に

ではなく、目の前で起きているあり得ない現象に

アップで映し出される映像

シュナイゼルは黒の騎士団の残りの戦力全てを持って、目の前の男一人を消すことに決めた。

フレイヤの数はまだある。後に敵になるであろう黒の騎士団を一掃し、尚且つこちら

が本気である事をルルーシユに見せつける。そのはずだった。

### フレイヤ

それは空間を完全消失させる新型核兵器。爆発、熱反応、放射能がまったく発生しない、究極のグリーン兵器。第一段階でサクラダイトが起爆。第二段階で、核分裂。第三段階でフォールヴァング領域を生成。第四段階でセスルームニル球体拡大。第五段階でセスルームニル球体縮小および消失・空間転移。空気すら消失し第五段階終了後には圏内は真空になる。範囲と起爆に制限をつけていても半径10キロは消失する。

それなのに目の前の男はそれを抱きかかえるようにして押さえ込んだ

男はボロボロになって落下していく、ナイトメアですら影も形もなくなるフレイヤを自ら受け、周囲に被害を出さないように押さえ込み自らの命を犠牲に周りの、敵であるはずの人命を救った。

1人の男の自己犠牲が大勢の命を一時的にはあるが救ったのだ。

そこで終わってくれれば良いものを男は今度は勢いよく飛んで来たのだ。

誰が想像できるだろうか。フレイヤを抱き爆発し生き残り、高度数千メートルの高さまでジャンプをし、尚且つ全長3キロメートルもあるダモクレスの要塞をブライス・ルミナスという鉄壁の防御ごとぶち抜いたのだ。

数秒の浮遊感の後に誰かに抱えられた

あたりが爆風に包まれる

シュナイゼル・エル・ブリタニアは意識を手放した

黒い壁は後退していたブリタニアの兵士たちを誰一人巻き込まずに富士山の噴火を押しえ込んだ。辺りに漂っていたすべての火山灰や火山噴出物は爆風により海の方へ

と勢いよく飛ばされた。そしてその場に残る浮遊航空艦は最早アヴァロンだけとなっていた。

## 5分前

『左翼、右翼ともに壊滅!!?』『陣形維持できません』

「残存兵力をこのアヴァロンに集結させる、この艦だけは何としても守るのだ!!?」

## 3分前

『ヴィセント・ウオード残機13』『10機は砲撃に注意しつつアヴァロンを守らせろ残りの3機は私の護衛にまわせ』『第一フロート損傷率64%第二フロート損傷率93%、バランス取れませんかこのままでは墜落します』『第一フロートの出力を下げそのまま高度を下げろ、墜落時の被害を最小限に抑えろ』

## 1分前

『紅蓮、トリスタン、モルドレッド、シエン神虎、斬月ともに急接近中』

「ジエレミア、時間を稼げ!!?」『イエス・ユア・マジエステイ』『私もでる』「C・C、頼む」

そして今

『ルルーシユ今の内に早くそこから脱出を』

「ああ、わかっている」

神聖ブリタニア軍の敗色は濃厚であった。空を覆い尽くすほどであったブリタニア軍は今や無く、煙を上げながら海に着水仕様としているアヴァロンとそれを守護するように戦う3機のナイトメアだけだった。

ジエレミアはトリスタンとモルドレットを相手にトリッキーな動きで翻弄しつつ戦況を有利に運んでいた。

スザクも神虎と斬月の2機を相手にかなり有利に戦っている。しかしその戦況は一瞬でも油断しようものならすぐさま覆されてしまうだろう。

C. Cは機体性能を活かし、致命傷を避けながら紅蓮に食らいついていた。

ルルーシユは海に落ちていくアヴァロンからギリギリのところまで脱出する。海上にいたはずの竜胆は既に陸に運ばれており、今も主砲が使い物にならない竜胆が陸に上げられた。

陸にいるヒーローが戻ってくる前に蜃気楼を水中潜航モードに切り替え、潜航する

コンコン

(幸い陸とこの距離はかなり離れている、いくら人間離れしたヒーローと言えどもこの広大な海、尚且つ火山灰で濁りきった海水の中、私を見つけたことはできるまい) コンコンコン



（くそツまた計画を1から練り直さなければ、スザクもジェレミアもC。Cもおそらくは捕虜になってしまっただろう）　　ゴンゴン

（いや、まだ諦めるのは早い。ゼロ・レクイエムを完成させるため。どんな犠牲を払ってでも俺は成し遂げなければならない、ギアスだって）　　ガンガン　　ビシイッ  
「ビシイッ？」

ルルーシユは目の前が真っ暗になった。



「まったく、バカな事を考えやがって」

「よう、そっちは終わったか？」

「あつ、はい終わりました」

「まったく服がボロボロになっちゃったぜ」

「今回はなんかすいませんでした、その兄弟喧嘩止めるのに力借りてしまって」

「まあいいよ、気にすんな、じゃあ俺は帰るから」

「それじゃあ服返しますね、先生」

「おう」



強大な力の前に人は無力である

子供は大人に従い

農夫は兵士に逆らえず

兵隊は上官に服従し

官僚は国の手足である

そして

小国は大国の奴隷だ

弱いものは強いものに従うしかない

横暴でも理不尽でもそれに従うしか方法はないのだ

『早く眠れ』と言われれば眠り

『食糧を提供しろ』と言われれば提供し

『前線に行け』と伝えられれば前線に行き

『その罪、命をもって償え』と言われれば自害し

『全てを寄越せ』と言われれば全てを差し出す

どこかの国の王の言葉にもある

『弱者が強者に奪われるのはごく当たり前のことだ』

史実、神聖ブリタニア帝国はその軍事力をもって他国を侵略し、自由と名前と権利を奪っていった。

強大な力を振るい

しかし我々は忘れてはならない

人は力を求める存在であることを

あの日、ルルーシユは私と契約をし、力を求め

絶対遵守ギラスの力を得た

ルルーシユはその力を振るい、人を騙し、殺し、欺き、操り、貶め、裏切り、殺め、利

用し、壊し、従わせ、辱め、虐殺し、脅し、踏み躪り、蹂躪し、苦しめ、狂わせ、共謀し、いたぶり、破壊し

ゼロという仮面を使い人々の心を奪った。

ゼロの行いは正義の味方の行いだった

奇跡を起こす力を使い、強者から弱者を救い

多くの人の命を救い

絶望に苛まれた人々の未来を明るく照らしていた

だがルルーシユも、奴の前では無力な一人の人間でしか無かったのだ。



何かを得た代償はいつか必ず払う日が来る

それが前払いなのか

後払いなのか

大きすぎる代償か

些細な代償か

髪の毛一本、腕一本、血を一滴、足一本、爪一欠片、目玉一つ、指一本、体一つ、寿命一年、余命全て、友人1人、赤の他人100万人、愛しい人、憎むべき敵、己の名誉、

己の命

死か永遠の命か

誰にもわからないだろうし、わかるわけもない

一括払いかもしれない

分割払いかもしれない

あの日、ルルーシユは自らの命で

その代償を払う未来を作る予定だった

世界の悪意を一任し、全ての憎しみの象徴となったその体で対価を支払う予定だった

だがそれは今となつては叶わぬこと

ルルーシユは今生きている



とある農村

温かい風が辺りを包み、森の木は所々緑に包まれ始めもう直ぐ春が来ることを予期させる、村の近くの小川では魚が釣れ、森ではキノコや山菜が取れる自然豊かな田舎だ



そんな中、道沿いの畑からザックザックという不規則な音が聞こえてくる

音の主は2人で、2人とも麦わら帽子で長靴でいかにも農家が履いてそうな白いズボンを履き一生懸命、鍬を使って畑を耕していた。実に険悪なムードを醸し出しながら「まったく、なんで俺がこんな事を」

「おら、ルルーシユしつかり鍬を握れ」

ルルーシユと呼ばれる少年はふらふらの手足で畑を耕す。鍬を高く振り上げて真っ直ぐ振り下ろそうとしても彼の細腕ではどうしても曲がってしまう、最初の頃はまったくもって使えなかったが今では幾らかマシである、そういくらか……。もう一人の方はルルーシユが頑張っているのを横目に呑気にラジオを聴きながら休んでいる、まあ彼の担当する畑は既に苗植えまで終わらせているから後はルルーシユ頑張りを見ることに仕事がないのだ

「くっ、俺はかれこれ3時間も畑を耕しているんだ、お前やスザクみたいな筋肉バカと一緒にするな、今日はシユナイゼルもやるはずじゃ無かったのか」

「あいつは家で編み物してるよ、なんか最近趣味で始めたらしい」

「ふざけつ　るなあ、はあはあ　くっ　なら、スザクは？ナナリーは？」

「スザクは家の裏で薪割り、ナナリーはあの緑髪の女と釣り、って手を休めるな!!？」

「まったく、何で全部手作業なんだ!!？非効率過ぎる!!？」

ルルーシュが怒りを使い畑に向かって鍬を振り下ろす

それをもう1人がニヤニヤしながら眺める、いつものありふれた光景だ

『りっ、臨時ニュースをお伝えします。〇〇〇にてテロリストが暴れています。繰り返します——』

ラジオからその放送が流れた途端

ニヤニヤしていた男の顔は一瞬で真面目そのものになった

「行くのか？」

「まあな、ヒーローだし」

「昔のあんたじゃ想像できないがな」

ルルーシュがその言葉を言い終わる前に男はルルーシュの前から消えていた

本当に理不尽だ ルルーシュは心の底から思った

あの後ヒーローが自分の兄である事を知り「たまには兄を信じろ」と言い見事に世界をまとめて見せた

その後あの戦争は兄弟喧嘩扱いを受け幕を閉じ、誰も命を失わなかったそのため、俺とシユナイゼルの罪は軽くなったらしい…。

その先を考えようとしたがルルーシュは大切なことに気がついてしまった。

先程まで耕していた3時間の努力がクレーターとなっていたことに

春の空に一人の絶叫が響いた



とある農村

そこではヒーローが家族と中むつましく暮らしていた

アカメが斬る

殴る

千年という長き月日に渡り栄華を誇る国がある

しかし、その大国は

近い日、滅びの時を告げる

あゝり らゝりらゝん

海を愛し 正義を愛す

だれが呼んだか ポセイドン

タンスに入れるはタンスにゴン

そんな言葉があるように、この世の悪は裁かれる

その未来はかつて2000年以上の歴史を持ち

世界の3分の1をその手に収めた

帝国の最期よりも呆気なかつたという

ニ \ (●) / ツ \ (●) / ポン \ (●) / ポン

### 帝具

それは数千年前に、自分の死後も帝国を守りたいという、始皇帝の国を思い民を思う気持ちの下、製造させた48の兵器。始皇帝の莫大な財と権力、そして叡智を集結させて作られた現在では製造不可能な高性能な兵器である。

その力が互いにぶつかれば必ずどちらかが死ぬと言われる程だ

そんな帝具の中にインクルシオというものがある

悪鬼纏身の名の下で装備者のあらゆる能力を増幅させ、進化を続ける強力な帝具だ。

そして奥の手として透明化が可能だ

もちろん並の人間が扱えるものではないし、常人が身につけたら発狂して死に至るだろう。

### 閑話休題

そんな、危険な帝具なのだが材料は龍型の危険種タイラントというものだ

帝具の素材となっているようにとても凶暴な生物だ

常に獲物を見つげるために徘徊し

生物と出くわせば根こそぎ食らう

常に環境に合わせ体を進化させており

砂漠でも凍土でも水中でも適合できる

そんなタイラントだが彼は今とてつもなくお腹が空いていた

理由としては、ここ数百年ばかり水中で獲物を漁っていたのだが、とうとう獲物が全滅してしまったのだ

自分と同レベルである海流を操る水龍も食べてしまったし自分の腹の足しになりそうなのは一切残っていないかった

なら仕方ないと陸に上がって見たものの

久しぶりの陸に少し体を合わせなくてはいけない

はてさて何を食べようか

そう思っていると遠くの方から足音を聞こえてきた  
久しぶりの陸のエサ、いったい何だろう。

そう思い身を伏せ久しぶりのステルス機能を使う

うむ、体が透明になった。ステルス機能は未だ健在、ワシやはり凄い

足音の主は人間だった、しかしその姿は訝かしかった。

昔見た人間とはあまりにも服装が違い過ぎる、それになんだか不味そうだ、顔からして不味そうだ。生き生きしてない、今までいろいろな動物を鳥を魚を同族を人間を食べてきた自分だからわかるアレは不味い、と

しかしならどうするか、今は見逃して次が来るのを待つべきか、いやそれは無理だ、いかせん腹が減りすぎている。しかし、不味いものは味わいたくない。むむむむむ、そう



だいい事思いついた、ワシ頭いい!!?

目の前の獲物は少しずつつ近づいて来る、早く食べたいという気持ちと、不味いから食べたくない気持ちがあうねりにうねる。

息を潜め確実に食べる。

バグッ

大口を開けて一息で呑み込む、丸呑みだったため味はあまりわからないが、確かにまじかかった。例えるならロウセイモンキーとガムラニムラを足して二で割ったような感じだ。想像しただけで吐いてしまう。いや吐かないよワシはでも何だろう他の味もする、なんだったつけ?

いつも食べてる時に味わうどろつとしたもの「ドチャドチャ」?

その時タイラントは初めて気がついた自分の体に穴が空いていること  
そして自分の口から血が漏れていることを

数千年生きた生物は死んだ

相手にはならないものを

敵としてしまった

彼の死因はそれだけだ

パチ　　パチ　　パチイ

「そろそろ焼けたか？じゃ食べるか」

そう言つてサイタマは肉を切り取る

「むっしやむっしや、むっしやむっしや」まっずう

とある晴天の日サイタマはQ市の大型デパートへ買い物に行った

新しく増えた弟子のために食器やその他諸々を求めてデパートに買いに行った。ついでに切れ味の悪くなった包丁も新しいのに買い換えようとしたのである。

清算を終えて帰路につくと、晴れていた空は突如曇り自分の周りだけに濃霧が立ち込めた、足元さえ見えなくなり方向感覚がつかめなくなり、どっちに行けばいいのかもわ

からなかったため、適当に歩き続けた。

2、3時間すると霧が晴れて道が見えたので道沿いに歩くと、何かに食われた。

食われるということはサイタマの人生2度目の(あまり経験したくない)経験である。

とりあえず前回と同じように脱出をした。

うまいのかな?と思い、たまたま買っておいたキャンプ道具一式を使って焼いてみたがあまり美味しくない。

そうだ醤油をかけてみよう

!!? !!? !!? !!? !!?

醤油をかけたら案外美味かった。

醤油をかけるとかなり味が変わった、かけないと生魚を腐らせてその上に蛆虫と蠅を生きたまま食べるみたいな味だったが、醤油をかけただけでこの前フブキに奢ってもらったステーキほどの味わいの肉となった、少し魚のような臭みもあるがそれもまたいい。

食後のお茶を飲み干し食事を終える。残った肉は未だ元気にビツクンビツクン動いていて、うわぁ という言葉をついつい漏らしてしまう、それに血がこっちに飛んで来るため非常に気持ち悪い。

とりあえず大穴を開けて残りをそこに埋めておこう。

しっかしこんな場所あったか？

Z市でもこんな場所ないし、さっきいたのはQ市だったはず。都会であるQ市から2時間でこんな所に来れるのか？まあいいかそろそろ日が暮れてきたし寝よう。

あとこの血を洗い流そう

とりあえず野宿でもするか



転生生活388日

ハロー、ハロー、エブリバデイ  
マイネームイズ田中

はあ、はつきり言っつてじぶんでも馬鹿らしい

俺の精神がおかしいのか、俺自身がおかしいのか、それとも俺をこの体にした天に  
いる神様とやらがおかしいのか。

そう忘れもしない389日前

俺は幼馴染で同級生の手利蘭と遊園地遊びに行つて全身黒タイツの男の怪しげな  
取り引き現場を目撃した。

取引を見るのに夢中になっていた俺は背後から近づいて来るもう一人の仲間に気づかなかった。

俺はその男に毒薬を飲まされ、目が覚めたら。

体が縮んでしまっていた。

〈以下中略〉

たった一つの真実見抜く

見た目は子供 頭脳は大人

その名も 名探偵タナン

嘘です、やってみただけです。

後悔？ はっ、そんなもん、この体になってからほぼ1年間、毎日欠かさずして



るわ

まったくおかしいだろ？

親が死んで、遺産と保険金で一生遊んで暮らせるワツホオーイ。で？アニメのDVD買つて？初回限定版、プレミア版、スペシャル復興版、数量限定版、店舗限定版？フィギュアにゲーム、漫画に小説、買つて集めたら死んだってどういふことだよ？天井が抜けた？抜けるな天井!!？根性見せろ!!？

ふざけんなよ、あの時、2億3123万4256円しか使つてねえんだよ。ほんとまじネエは、あと135億くらいあつたのに

しかも死んで俺を異世界に転生させてくれるはずの女神さは、志○けんの某コントに出てくるような耳が遠い神様で、とりあえずアニメの世界でハーレム無双できるようにつて願つたら、アカメが斬るの世界つてふざけんな!!？

なんでそんな鬱展開のグロブラック鬱な鬱アニメの世界に行かなきゃなんねえんだよふざけんな!!？俺グロいの苦手なんだよお

あつてもメインや姐さん可愛いからいいや

って思ってた時期がありました、確かにありました。

よし目を覚まそうと思つたら私はドラゴン？ why？

なんで？ どうして？ ドラゴティック、ハイツ！！？ つてハイツじゃねえよ、どうやってドラゴンでハーレム無双しろってんだよまじねえは。

でもなあ、実際同種のメスにはモテてるんだよな。しかも周りのオスは片っ端から殺してきたから、俺に逆らえる奴（同種）なんていないんだよ

まあ俺を操ってる帝具には逆らえないんだよな。

ん？ なんだね、きみわってか？

そうです私がフライングデスです。

確か公式ガイドブックには、大型の鳥のような危険種で二級と書かれているはずだけ

ど俺は強すぎて、もはや特級らしい。この前俺の飼い主とエスデス将軍が話してるのを聞いた。

エスデス将軍？アニメと全然違うマジで、アニメだったらヘラヘラ笑いながらみれるけどマジ無理本物怖い、何日か前？だったけど俺見てたら睨まれた、そんな時鳥肌立ちやっただもん。まあ鳥じゃなくてドラゴン肌なんですけど。

そんなこんなで、俺は今日も帝国の宮殿上空を警備中

やることと言ったら変な奴が来ないかチェック、変な鳥とか危険種とかきたらおやつ代わりに食べてよし、三食ついて女はべらかしてもある程度怒られない、とつても優しい職場です。

そういえば、昨日おやつを頂きました。

お昼がなんか少なくてあたりが暗くなってからだっけ？

お腹空いたなーっておもっていると、街の方から男が1人錐揉みしながら飛んできたんだよな。

ラッキーって思いながら口開けてたから、よく見えなかったけど、どこかで見た顔だった。

まあ多分、アニメで見たサブキャラ、モブキャラの1人がどこぞの貴族のおもちやにされたんだろう。

確か、黒髪で目にぼつ印があって、思い出しそう、確か名前がオ『ウー——ウー——ウー——』ん？侵入しやか？ああ、やばい、いしきがもって

かれ

グワアルラルルル

壁壁壁壁壁壁壁壁壁壁

サイタマは久し振りにキレていた

普段は決して怒ることのない彼だがこれほどまで怒ったのはジエノスや彼の親族ですら見たことはないだろう。

そんな彼の目の前に広がるのは一際巨大な壁。

帝都の周辺を覆う壁が長さを重んじる壁なら、サイタマの目の前に広がる壁は高さと同様に厚さを重んじる壁だ。

某巨人が進んでくるアニメの壁は30メートルと言われているがその数十倍はあるだろう。

しかし

ドゴオン

深夜、誰もが寝静まった帝都にその爆音は広がった。

音音音音音音音

鳴り響く警報に、宮殿の近くに住む人々は目を覚ます

宮殿の壁は壊れた慌ててふためく人々

そして音の原因を探ろうと即座に動いた兵士達

最初に気がついたのは、帝都宮殿の周囲を警戒する帝都警備隊だろう。昨日帝都警備隊隊長であるオーガ隊長が行方不明になって土気が低下しつつあったときに生まれた油断のせいで壁に人が近づいているのに気がつかなかったのだ

そして爆音

気がつけば巨大な、穴

一瞬、間が生まれてしまったがすぐさま応援を呼ぶ笛を鳴らす。目の前で起きたこと、それは自分たちではどうしようもない出来事だ。

ならせめて帝具を使うことのできる彼女がくるのを待つだけだ。

次に気がついたのは、宮殿を守る近衛兵だ。

彼らは一人一人が精鋭で、選り抜かれた戦士である。

日々鍛錬を積み重ね、血と汗と涙をその身に纏う鎧に染み込ませ、皇帝と国に永遠の忠誠を誓う勇者のみがなれるのだ。

しかしそんな精鋭もバケモノ相手にはなすすべもナシ。

「グハッ」「ガハッ」「怯むなっ！陣形を崩さず隙を見て攻撃だ!!？」

近衛兵になるには最低でも一人で一級危険種を倒せなければならない。

「ゴホッ」「グウ」「うっ、撃ち方始め!!？」

賄賂で近衛兵になったとしても、ブドー大將軍のもとで行われる訓練についていけな

ければ即刻クビだ

ババババババババ

目の前の男に何人もの仲間がやられた、本来ならば殴りかかりたいところだが、それを我慢する。真夜中に侵入者、しかも壁をぶち破ってきた。体系はそれほど筋肉質ではないが何人もの仲間がやられたことからあの服が帝具であると推測できる。帝具使いが相手なら手加減はできない

このまま奴を蜂の巣にしてやろうと銃撃を続ける

シユン シユン シユン

いくつかの空気を切り裂くような音が辺りに響いた。幾多もの爆発音と共に銃撃が止んだ。銃を持っていたはずの手は、銃をもっておらずその手は黒く焦げていた。持っていた銃が暴発したのだ、全員同時に

一人の銃が暴発したならそれは偶然だけ、しかしこれだけの人数の銃が一度に暴発し



たとなるとそれは目の前のオトコが何かしたとしか考えられないだろう。

いったいどうやって？ いったい目の前の男は何をした？ 銃撃の嵐を受けていたはずなのになぜ無傷のまま!!？ いったいなにながっ!!？

そんな疑問が彼らの頭をよぎるが

マジシリーズ

その言葉を全て聞き終わる前にその場に倒れふした。

撃撃撃撃撃撃撃

サイタマは歩みを止めない

邪魔をするものは全て無視を決め込むつもりだったが、流石にしつこいので気絶させ

た。ソニックの時と同じ用法でやった、別に本気ではない。

そのまま歩み続けちよいちよい邪魔してくる奴らを現代アートのよろしく壁にめり込ませる。もちろん手加減はしてる、むしろ自ら壁にめり込んでるんじゃないかと疑わしいくらいだ。

そして現代アートを数百作ったサイタマがたどり着いたのは、宮殿中庭だった。

まあそれはサイタマには関係ない

例え弓が降ろうが矢が降ろうが

龍が降ろうが竜が降ろうが

肉が降ろうが血の雨が降ろうが

目の前に帝具使いが三人いようが

歩みを続けるサイタマには

関係のないことだ

パンチ パンチ パンチ

宮殿

謁見の間

まったく、使えない無能どもが

大臣は密かにそんなことを思っていた

こんな夜中に侵入者を入れてまだ捕まえることさえできないとは、まったくもってけしからん

と

巨大な肉を大きな口で食いちぎる

近衛兵も何人もやられているというし、これが終わったら近衛兵の粛

「なあ大臣?」

「なんでしよう陛下?」

考え事をしながらも周囲には気を配る、まあ彼の周囲には一人しかいないが、声の主は年端もいかない少年だ

「ここに座っていて大丈夫なのか?近衛兵が一人もいないぞ」

「大丈夫です陛下、ブドー大將軍とその他、帝具使いが族を打ちに出向いております。陛下が狼狽えてはその影響は臣下たちに不安をもたらしかねません、なので陛下はここで

堂々と座つてさえいければ良いのです」

「つたく、これだからガキの面倒は困る。まあガキだから扱いやすくして楽なんだけどなあ」

大臣はあの手この手を使ってこの少年を国のトップ、皇帝にした。そうすることで実質この国のトップは自分の言うことを素直に聞く傀儡なのだから、多少めんどくさいところもあるがそこは我慢するしかない、たつたそれだけで自分はこの国でやりたい放題できるのだから

「う、うむ。昔からお前の言うことに間違いはないもn『ドガアアアアアアン』なp?」

謁見の間の扉が吹き飛ばされ、なにかがこちらに吹っ飛んできた、しかし辺りに立ち込める砂埃の所為でよくは見えない

へっ?

「なっ何事だp?」

突然の出来事にぼけつとする大臣、そして大臣に言われた通りに堂々と座り続ける皇帝

砂埃が止み始め、音の主の声が響いた

「よお、大臣と皇帝ってお前らでいいのか?」

まあ!!?まさか侵入者がここまでできたあつ!!??

大臣は内心大いに焦っていた

帝具使いの三人がまさか負けるわけが無い。例えほかの2人を倒せたとしてもあれだけの近衛兵とブドー大將軍を相手に勝てるわけがっ!!??

そう、それはありえないことだ、ブドー大將軍は帝国最強の一对、例え負けたとしてもこんな短時間で負けるはずはない

まつ!!?まさかブドー大將軍をこんな短時間で倒して!!?いやありえない、ありえない!!?まつ、まさか!!?!

砂埃が未だ立ち込めるが大臣は扉の方から飛んできたものに目を向け驚愕する。

帝国最強の男　ブドー大將軍

その人が力なく倒れていた

大臣はその大きな口をあんどりと開けたままその場に立ち尽くしてしまった



翌日

人々は戦慄した

帝国に仕える帝具使い全員の緊急招集

と

とある人間の指名手配書の金額

と

異常なくらいに強化された警備網

と

宮殿と外とを繋ぐ一本の道に

もう一発殴る 前

崩壊の足音が聞こえる

逃げられない、逃れるすべはない

立ち向かえ、立ち向かえ

最期の時まで立ち向かえ

逃れる事は許されない

自分の行い、善行 悪行

黒白

闇に惑いし哀れな影よ

欲に溺るる、悪しき者



人を傷つけ貶めて

人の痛みも分からない

罪に溺るる業の魂

対価を支払う時がきた

イ  
ツ  
ペ  
ン  
シ  
ン  
デ  
ミ  
ル  
？



宮殿を囲む巨大な壁が壊されてから一夜が明けた。

人々は驚愕した、数千年という長い時間に渡り宮殿を守り続けていた強固で絶対の壁が物の見事に破壊されていたのだから

皇帝は『壁の修理のために壊した、民たちは気にせずいつものように過ごせ』と触れ回った、しかしそうは思えないのが民衆だ。

帝国内で変わったのは宮殿の壁だけではなかった

まず帝都警備隊だ

以前は特に何事もなければ決まった道を各自でパトロールというのが常だった。

壁が壊れた翌日から宮殿の近衛兵を含めた10人規模のチームを作つてのパトロールとなった

警備隊の面々は近衛兵がいる為、賄賂がもらえず、市民への嫌がらせが出来ずにストレスがたまり。市民同士のいざこざへの仲裁や手配書の印刷と配布で仕事量がいつも以上となった。

次に町を行く人々の顔だろう

以前は不景気と恐怖政治により顔色の悪いものばかりだったが、先ほどもいったピラを見た人の顔を見れば判る通り。

「さがせえ、なんと少しでも探し出せ!!？」

「金え金え金え金え金え金え金え金え金え金え金え」

「お？そんなやつおれつちが見つけて縛り付けてやるぜな、相棒」

「ふふふ、この封印されし右腕が悪しきものを捕らえるのも近いだろう」

「(とりあえず、帰るぞバカども)」

「貴族の地位かあ、おらそんなもんさよりも牛の方がいいだつぺかな」

「賊を捕まえればヒーロー扱い間違いなし!!？やっぱ帝都に来てよかった、待ってる出

世街道!!？」

不景気なんてどこ吹く風で、むしろ活気だっていた。

警備隊がばら撒き張っている手配書

普段はナイトレイドやシリアルキラーなどの手配書の常だったが、何処を見てもスキンヘッドだらけだ。

右を見れば手配書、左を見ても手配書、下には地面に貼り付けられた手配書、上を見れば空からばら撒かれる手配書、後ろを振り返れば警備隊が背負っている手配書である。帝都の人々はいったいどんな事をやったらこれ程までに手配書をばら撒かれるのかと呆れてしまうほどだ

そしてその褒賞が人々を駆り立てる

◇

上記の咎人を生死問わず捕らえたものは褒美として下記のいずれかを与える

黄金十万

最上位の貴族の地位

一部除く法改正の権限



黄金十万に目が絡む傭兵や貴族の地位を望む地方出身者は血眼になって探し

この国のことを心から思う將軍や文官は自分が持つ精鋭たちを極秘裏に町へ向かわせ下手人の行方を追わせていた

そして一番大きく変わったのは町の治安だ

大臣の顔が普段の4、5倍に膨れ上がりそれでいて寝込んでいる為ここぞとばかりに良識派の文官たちが一齐に皇帝へ警備隊によるパトロール強化を要請したのである。

もちろん名目上手配書の男の早急な逮捕だが、匿っているものがあるかもしれないと

いう1人の文官の発言により全家屋の強制家宅搜索が皇帝の名の下強制決行された。

民間人の家から商店、貸本屋とは名ばかりのナイトレイドの隠れ家や腐った貴族たちの屋敷、娼館、ヤクザの事務所、財政官の私室、某マツサージ師の店、革命軍の工作員の隠れ家、 and more :

何という事でしょう

大臣の恐怖政治により、常に表情の暗い人々——…

警備隊の汚職や冤罪、裏取引などの犯罪のはびこる町並み——…

地方出身の者や貧民街の弱者を狙い道具として扱う腐った貴族の邸宅——…

そんな末期癌を抱えた80過ぎの高血圧のお爺ちゃんのような帝国が——…

今 匠達の手によって、生まれ変わる…!!?

このため警備隊の仕事が増えたのは言うまでもない

帝具帝具帝具帝具帝具

s i d e 三 獣 士

北方の異民族の地

酷い吹雪の夜の中、我々のもとに帝都からの急使が来た。

吹雪の中、長時間無理矢理飛んで来たのか全身が雪だらけで手足は酷い凍傷状態で酷く衰弱していた。

私は急使の持っていた手紙を受け取りすぐさま將軍に差し出した

手紙を受け取った將軍は訝しげな顔で手紙を読み始めた。

それもそうだろう、普段は数十枚はあるはずの手紙がたった一枚しかなく、それも急使が死にかけてまでして持ってきたものだ。

將軍は最初、片手に手紙を持ち目を通す程度の読み方だったか、ある一文からその態度を一変させ、食いつくように手紙を読んでいた。その時の將軍の顔は私が今まで見た事がないほど驚愕していた

そして帝都

「しかし、信じられんな。実戦から疎遠となったとはいえ、ブドー大將軍が負けるとは」



「あ？それってブドー大將軍も歳には勝てなかったってことだろ」（魚、か？、この臭い？）

「いや、ブドー大將軍が宮殿の中だったから本気を出せなかったのかもしれないよ？」  
（なんかこの辺、生臭くない？）

「普通に考えればそれが妥当だろう」（少し生臭いな）

辺りに漂う生臭さを感じながらも三人は後ろにある筈の壁を見る

そこには断崖絶壁を思わせるような宮殿を囲む巨大な壁はなく、壊れた壁をはじめの方によせる女装筋肉集団と外を警戒する近衛兵しかいなかった

「だが、この破壊された壁を見て考えると」（やはり、生臭い）

「それこそ、誰がやったんだって話だろ!?!」（魚、？魚、？）

「流石にこれを一人でやったとは考えにくいよね」（ああ早くここから離れたいなあ、2人はこの臭い気づいてるよね？）

「しかし侵入した賊は1人、しかも近衛兵を壁にめり込ませ動けなくし、ブドー大將軍含める帝具使い三人をまとめて相手どり倒し生きて宮殿から脱出する…。」

普通に考えて無理だ、ブドー大將軍率いる帝国近衛兵はエスデス將軍の軍と同レベル

だ。それが敗れるというのはにわかには信じられない。

「まず一人でこの壁を破壊するのは無理だ、必ず協力者がいる筈、とりあえずその事は置いておくとしよう。宮殿に侵入したならば、まず近衛兵を倒すとする。ダイダラ、ニヤウお前ならどうするの?」

「とりあえず帝具使つてぶつ壊す、つても近衛兵だからよくて数人殺せばいい、銃とか使われると厄介だしスタミナとか考えて無理だ」

「多分無理、長時間笛を吹いたらある程度効くかもしれないけど近衛兵がそんな暇をくれるわけないし、奥の手を最初に使つたとしても多分囲まれて潰されちゃうと思う」

「そうか、私の帝具だったとしても水があればある程度は倒せるかもしれないが…水のない状況ではどうにもならないだろう、となると相手は肉体強化系の帝具使いとなる訳か」

「エスデス様ならできるんじゃないの?」

ニヤウの発言にダイダラは確かにと思う、しかしリヴァの顔は暗いままだ

「確かにエスデス様が楽しめますまずに近衛兵を倒しに行けば、一瞬で方がつくだろう、しかしブドー大將軍率いる帝具使いを三人相手にするととなると、臣下としては失礼にあたるが敗色が強いだろう」

「え?でもエスデス様ならばくたち三人相手でも倒せるでしょ?」

「なんで負けちまうんだ？」

「我々がときが三人束になつてもエスデス様に勝てないの言うまでもないが、ブドー大將軍を含める二人の帝具使いを相手に勝利するのは不可能だろう」

二人は確かにそうだと頷く

帝具といつてもそれぞれ、強い弱いはあるし、それに相性だつてあるのだ。

リヴァはそれに、と続ける

「尚且つ、近衛兵含め誰一人として死んでいない。なら侵入者の手加減していた、だとすると目的は偵察」

「もしくは力の誇示」

「それか帝国に真つ向から喧嘩をふっかけに来たバカ」

將軍エスデス直轄の帝具使い三獣士

彼らは例え相手がどんなであろうと命令があれば行動を起こす、例えそれがどんなにこの国の不利益になる事でも。

「ねえ2人共、とりあえずここから離れない？」  
生臭くて仕方がないよ、とニヤウは言った。

2人の男もそれに賛成した



s i d e  
ス タ イ リ ッ シ ュ

まったく失礼しちゃう、こんな夜遅くに私を叩き起こすなんて、  
いったいどここのどい

イ!!?こつ、近衛兵!!?

あ、あらそうわつ分かつたは、直ぐに支度するから待っていて頂戴、え?私兵を全員連れて来い?まあ、いいけどちよつと時間かかるわよ?

なあにこれは?宮殿のか、なまぐさつ!!、壁が!!?

え?この瓦礫を片付けさせるために私の強化兵を連れて来たの!!?誰の命令よ!!?

大臣!!?うつそ、マジで!!?…んっん

本当なの?

これからしばらくは宮殿で過ごせですつて!!?

はあ、もういいは、どうせ大臣の命令でしょ。

なに?この資料を見ておけ?

ちよつ、何よこれ!!?

耳、鼻、目ちよつと来なさい。

いい?あんた達は情報収集担当よ。私が大臣にもつと詳しい資料を請求する手紙を

書くからあんた達はそれを大臣の所まで持つて行きなさい、その間にあんた達は近衛兵の会話や宮殿の内部の様子をとにかく調べなさい。もちろん不審な動きをしたら殺されちやうから貴方達の特技を生かして調べるのよ、分かった？

ならこの手紙を大臣の所へもつて行きなさい!!？

さてと、私は続きでも読むとするかしらア!!？

え？何これ、本当なの？なんてスタイリッシュなのかしら♡

だれか、アロマ持つてきなさい!!？生臭いつたらありやしないわ



s i d e u e i b

拝啓

母ちゃん元気ですか？俺は都会の荒波にのみ込まれそうになりながらも元気にやっています。

三日前、帝都から急使が来た時には驚いたけど、これからくる帝国の危機のために俺は戦います。

なんでも帝国に仕えている帝具：俺の持つてる鎧のやつ、みたいのを持つている人全員で帝国の危機に立ち向かうそうです。

国の機密保護のためこれ以上は書けないけど、これから生きるか死ぬかの戦いになるそうです。

国の存亡をかけた戦いで命を落とすかもしれないというので手紙を書きましたが、俺は絶対に生きて帰ります。

その時はまた母ちゃんの飯を腹一杯食べたいです。

敬具

ウエイブより

「ふうー、こんなんでいいのかな？」

少年はそう言つて筆を置き慣れない手紙を書き終えた。

少年がなぜ慣れない手紙を書いたかというと、数日のうちに帝国存亡の危機が起きるためせめて家族のいるものたちには手紙を書かせてやれ、という皇帝の考えだ。

「出来上がりしましたか？」

「あつ、はいできました」

「では私はみなさんの手紙を係の人に渡して来ますね」

そう言つて金髪の好青年——ラン——はウエイブの手紙を持つて部屋を後にした

「あつ、そういうえばボルスさんは家族に手紙を書かなくつてよかつたんですか？」

「うん、いいのいつもの事だから。それにここに来る時もちゃんとあいさつしてきたし」

——ボルス——さん、同じ理由でここに集められた帝具使いの1人、そして数少ない



少年が気軽に話しかけられる人である。

この前、今回の件で共に戦う帝具使い全員と皇帝に面会に行ったが、そろいもそろって個性的であった。

金髪イケメンのランと覆面と拘束具のボルスさんに引け劣らない面々ばかりだ。

皇帝の謁見最中も諸事情によりお菓子を食べ続けていたクロメ、帝都警備隊から来た茶髪で長いポニーテールのセリユ（この子は常に子犬を引きずり回している）、オーバーアクションをしょっちゅう繰り出すオカマスタイリツシユ、両目が潰れて使えないのにも関わらず周囲の状況を完璧に捉えているトラフジさん。

この人達とは同じ部屋での待ち合わせだったため少しは話をした中なのだが

他にもいる

足まで伸びるほど長い青髪をした帝国最強と呼ばれているエスデス將軍

その周囲に常にいる三人、背が低めの少年ニヤウ。常に白目で周りが見えているのか気になる巨漢の男ダイダラ。ナイスミドルなりヴァ。

エスデス將軍と話をした時少し会話をしたがアレばダメだ常軌を逸している。

後数人のいたけどさっきの人よりもやばそうな人ばかりだった

まともなのは俺だけか。

そう呟きながら深いため息を吐く

かくいう、ウェイブも

彼の放つ体にこべりついた生臭さにより名前を覚えられていた



## 宮殿内

## 大臣の私室

そこには顔にガーゼを当て今までに無いほどの量の書類仕事に明け暮れている大臣がいた

「まったくもって不愉快です!!? 何ですか一体!!? あのハゲは!!? え? あろうかとか宮殿に真正面から突っ込んで来て!!? 死ねばいいもの。近衛兵は何をしていた、ええ、全員死ぬ気で戦った。じゃあ何でだれも死んでないんですか!!? ブドー大將軍は!!? ええ、真つ正面から戦つてましたよ!!? 他の帝具使いと一緒に、死ぬ気で戦つていましたよ。お陰で唯せさえボロボロの地下道が崩れて使えなくなり、秘密の抜け道も作動しなくなつてしまつた。それで!!? 指名手配して、帝都の警備体制を強化したと思つたら、まさかの陛下が、近衛兵も警備にまわせ、とおっしゃつた。そして!!? 捕まるのはバカな貴族や荒くれ者、唯一の救いは革命軍の密偵を数人捕まえた事だけ。バカ達と私へ繋がる証拠を隠滅していなければ私も危うかつた!!? それに手配書に今までにないほどの懸賞金をかけて、まったく嘆かわしい!!? しかも未だあのハゲは捕まらない」

一息ついて肉にかぶりつく、勿論マンガ肉だ

「それに宮殿内は穴だらけ、雨が降った日には雨漏りです。壁には穴が空き、天井には穴が空き、内部の罨はほぼ全て使い切ってしまった!?? まったくもって嘆かわしい、それであのハゲはまた来る、とぬかしやがった。ふざけるなもう来るな。しかもハゲのせいで皇帝からの信頼が少し落ちてしまった、この前なんか、本当にそれだけでいいのか? もっと厳しくした方がいいな、それ以上厳しくしたらわたしに繋がる証拠が見つかってしまう、そう思い何とか説得したものの次回に持ち越し、きつと明日には決定に移行されるでしょう!!? それにしても、遅い、まったく何をやっているのですか!!?」

「オネスト様、キヨロクから5人の使者がやって参りましたが、いかがいたしましょう?」

「連れて来なさい」

「オネスト様、シユラ様がお帰りになりましたが、いかがいたしましょう?」

「連れて来なさい」

「オネスト様、スタイリツシユ様もつと詳しい資料が欲しいとのことですが、いかがいたしましょう?」

「ここにあるこれを持って渡しなさい」

「オネスト様、首切りザンクを捕縛しましたが、いかがいたしましょう?」

「帝国に仕えるのであれば、死刑は免除すると伝えなさい」

「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」  
 「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」  
 「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」  
 「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」「オネスト様」  
 「オネスト様」「オネスト様」

「はあ、こんなに忙しいのは陛下を皇帝にさせた時以来ですかね。忙しすぎて拒食症になつてしまいそうですよ、久しぶりに本気を出しますか」

まずはこの山のような書類を片付けますか

そう言つて手元にあつた食べかけの肉にかぶりつく

オネスト大臣はそんな男である



s i d e  
???

死んだ、みんな死んだ。

アシユリー

彼女は俺が始めて好きになった女だ

よく一緒に訓練をし、よく一緒にパトロールをした  
元氣ハツラツでボーイツシユで凄くいいやつだった

今は首から上が無い

アンジエリカ

始めて俺に突つかかって来た奴だ

男勝りで強くて、それでいて可憐だった

俺が本気を出して倒してからは俺にゾツコンだったけど

お腹に大きな風穴が開いている

アンナ

当時のリーダーの娘

「控えめでおしとやかで、やや小柄で守ってやりたくなくなるような存在  
父の仇である俺に惚れ献身的に俺に尽くしてくれた

ズタズタのひき肉になっている

アマンサ

色白で俺を除くみんなの中で一番早くて、スタイルの良かった女  
少し力という面では劣るけれど気前のいい奴だった

潰された蠅のように壁に張り付いていた



アウラ

はつきり言つて彼女のことは今でもよくわからない

群のリーダーになる前は俺に興味を示してはいなかったけど俺が群のリーダーになつてから、俺に襲いかかるようになった、倒してからはよく俺と戦い（本気に近い）をやつたものだ

涎を垂らし排泄物を漏らす、障害を負つてしまった

他にも多くの命が失われた

アイリス、アナ、アキコ、アマナヒ、アマリリスにアタナカ、アンシーにアカリ、ア  
リーナ、アリアナ

みんな死んだ、一撃だ

俺より弱いとはいえ、危険種だ  
捕獲レベル5は軽くある

だが相手は前世の漫画に登場するサイタマだ、勝てるわけがない  
倒すにはグルメ界で通用するレベルの力がないとダメだろう

俺はどうすればいい

やつはまた来る

だが絶対に俺じゃあ勝てない  
ならどうすればいい？

ならこれを使え、どこかでそんな声がした



数日前、サイタマとはある酒場で久しぶりにお酒を飲んでいた

店の雰囲気も悪くなかった。全体的に木でできていて落ち着いた雰囲気っていて、照明もいい感じの明かりだった。

この後どうするかなあ、そう思いながら、この店で一番安い（なぜか少しお酢の味がある）酒をちびちび飲んでいった。

「食い逃げだぁー!!? だれか捕まえてくれえ!!?」

酒? を飲みいい気分になっていると店の店主が大声で叫んでいた、後ろ振り返ると金髪のスタイルのいい女がダッシュで店を出て行く姿が見えた

「食い逃げか、ヒーローらしく捕まえてやるか」

そう言つて、サイタマは店を後にした

### 10時間後

サイタマは町中をくまなく探した。探しに探して探しまくつた、端から端まで隅々に至るまで探した、しかしあの金髪のスタイルのいい食い逃げ犯が見つかることは無かつた。



はあるかもしれないが、戻ったら食い逃げ扱いを受けてしまう

なら

サイタマは深いため息を吐く

「来た道をまたたどるか」

土地勘の無いサイタマにそんな事できるわけもなく、また数時間もの間、（迷子になりつつ）町中を隅々まで探すこととなった

深夜から翌日の深夜まで探したが彼の財布が見つかることは無かった

「空はこんなに青いのに、お先はこんなに真つ暗よ〜」

そんな歌を口ずさんでしまうほどサイタマの心境は沈んでいた。買ったばかりのキャンプ道具は盗まれるし、醤油は全部こぼしてしまった、しかも財布もどこかに落としてしまったようだ。

時刻は深夜を回っているので空は真つ暗であるがそう歌うしか無かった。

町中を駆け回っているとしょっちゅう不良に絡まれたイジメをしているやつや馬で子供を引こうとする、果てには変な因縁をつけて来るやつそのせいで探すのに時間がかかった、結局見つからなかつたけれど

「おお、今夜は満月か」

一時の現実逃避のために満天の夜空を見上げる

一日中走り続けて疲れがたまっていたが、その光景に目を奪われ疲れを忘れてしまう

雲ひとつない空に満月

満天に輝く星々

そして屋根を飛ぶ金髪スタイルのいい女

そう昨日の食い逃げの女である

なんか知らんが少年を抱きかかえている、しかもポケットに俺の財布を入れている

え？なに、俺が苦勞して町中を駆け回って探していたのは？全て意味が無かったの、



そう思うとフツフツと何処からともなく怒りが湧いて出た

ブチッ

サイタマの中の何かが切れた

## 拳を握る

戦争が始まる

戦いが始まる

この国の根源が集まる

強力な力が集う

巨大な個

集い立ち向かう精鋭

拳 手刀 蹴り 小石 眼光 体当たり

子犬、斧、リコーダー、指輪、手袋、剣、刀、羽、ライター、鎌、時計、マイク、お  
手玉、歯、髪飾り、仮面、杖、物干し竿、香水、電気、冷たい血、オモチャ

100万の兵

1人の勇者

身体1つ

と

国1つ

理不尽な正義が

今、振り翳される



## I

帝国の首都である、帝都。

総面積20万平方キロに及ぶ広大な面積をほこる帝都は周囲を囲む万里の城壁から登る太陽と共に朝を迎える。

帝都の中心にある宮殿では夜担当の警備と午前担当の警備が交代し、宮殿内部にある飼育場で飼っている龍型の危険種たちの肉の奪い合うの声が聞こえてくる。しかしそれは宮殿を囲む巨大な壁の中の話であり外には漏れない。

宮殿の外でも店の準備をする露天商や食パンをくわえて出勤する若い女性などがちらほら見えてくる。ここ最近ずっと見かける警備隊の集団はいつもどおりだ。

日が完全に登り切ると帝都は賑わいを見せる。

宮殿の近くにあるメインストリートは特に賑やかで、雑多な人ごみの中、各店の店主

が威勢の良い声で呼び込みをし、道行く人々に声をかける。

川の近くには比較的豊かな市民の家や劇場、商店などが立ち並び井戸端会議をするご婦人や劇場に足を運ぶ家族連れの貴族の姿などがほのぼのとしている。

貧民街では子供たちが道で追いかけてつこや、ふぎけ合いをしてその様子をその子たちの両親が微笑みながら眺めている。

数週間前にはあり得なかった、人々の笑顔  
ここ数日で衝撃的な変化をもたらした帝都

そんな帝都から外に繋がる道はいくつかある。

その内、主となる道は東西南北に4つある

比較的安全な東の道

帝都からロマリー街道まで一直線で人通りも多く、賊も少ない。

少し危険ではあるが南の道

地方出身の者の多くが帝都にやって来る際この道を使う。あまり強くはない危険種が稀に出現する、ある程度武の心得があるものならば苦は無いが商人や腕に自信のないものは命を落とす可能性がある。

危険な西の道

帝都近郊の採掘場まではある程度の整備されているがジフノラ樹海よりも西となるとあまり整備されていない。そして比較的強い危険種がよく目撃される。それに加えて西の異民族の者や集団で行動する賊による被害がたびたび報告されている。

そして最も危険な北の道

フェイクマウンテンに生息する石獣、木獣などの二級に値する危険種が最低ランクである。基本的に北にいる危険種は数が少ないが凶暴かつ頭がいい。大勢の武装した人間などは襲わず少数かつ武装をしていない人間を狙う。そのため北の道は人通りが少ない。

しかし、今日は違っていた。

まだ日ののぼりきらない早朝に大勢の武装した人間が北の道の外に集まっていた。その数はおよそ一萬、そして現在進行形でその数を増やしている。

地方出身の者や帝都で名を馳せている者、皇拳寺を破門にされた強者など自分の腕に自信がある者たちが老若男女問わず集まり、誰しもが自分の手に持つ手配書と目の前の男の顔が同じである事を確かめる。

「いたぞつ!!?」「やつを捕まえろ!」「やっちなまえ!!?」「帝国に差し出せば懸賞金が貰えるぞおお!!?」「黄金一〇万は俺のものダア!」「2ー4ー1ー1」「絶対に逃がすなああ!!?」「金エ!!?」「囲めえ!!?」「叩きのめせえ」

それらの言葉を合図に集まっていたものは一斉に走り出します。数百メートルの距離が一気に縮み、そして目と鼻の先の距離となり一萬を超える人の波が男に襲いかかった。

劍―打刀、大刀、クレイモア、青龍刀、ナイフ、バスタードソード、バゼラード  
長柄―槍、ランス、ハルバード、バルディッシュ、サイズ、アックス、ウォーハンマー  
打撃―金棒、棍棒、鉞、錘、メイス  
拳―正拳突き、手刀、回し蹴り、後ろ蹴り、ボディープレス、アツパーカット

それら全てを食らった男は一瞬何が起こったのか理解することも出来ずにただただ、その圧倒的な数の元、練り出される理不尽な暴力を受けるだけだった。

攻撃が止む頃には、男は虫の息となり体は傷だらけで無事な箇所など一つも無い  
斬られ、貫かれ、潰されて、殴られ

手配書の顔と一致しているか確認するのが難しい程だ。

どんなに強い個も圧倒する

それが数の暴力である



はずだった、

剣をふるった少年は一瞬理解できなかつた。

自分の持っている剣の刀身が砕かれたのだ

今まで幾多の苦難を共に乗り越えてきた人生の相棒とも呼べる存在が、パリンという音ともに砕け散った。その衝撃は強く、少年を含む剣をふるった者の多くが自分の足が地面についていないことに数十秒間もの間気付かなかつたのだから。

長柄を持つて貫こうとした少女は驚愕した。

気がついたら自分の持つているはずの獲物が手にはなく空に浮いているのだ。何があつても離さない、その思いを胸に獲物をしかと握り目の前の男を貫いた。しかし気付いた時には獲物は自分の手には無い。そして長柄の練習で厚くなっている手の皮が破れそこから流れ出る血が自分とともに宙を舞っていたのだから。

叩き潰すという理念の元、打撃武器を使った老人は勢いよく男の後ろに飛んでい

た。

男の脳天に自分の武器を叩きつけてやったと思つたら瞬間、男の姿が急にブレたかと思ふと背中を勢いよく、トン と押された。とっきの出来事に受け身をとることもままならず、数十秒間地面を転がり続け、バウンドしながら何度も地面に叩きつけられる。その勢いが止まる頃には全身打撲や頭を強く打つなどして立ち上がれるものはいなかったのだから。

拳を振るつた武道家は自分が何を殴り蹴つたのか理解できなかつた。

自分の拳を食らつた者が無事なわけがない、なのに何故？そして遅れてやって来る痛み、巨大な岩や頑丈な鎧を殴つた時に来るジーンとした痛み、それが自分の殴つた者が本当に人間なのかという疑問と恐怖を覚える。しかしその恐怖も一瞬だった、お返しである拳が入り、その威力により自分の意識が持つていかれるのだから。

A M 06:00

サイタマ、帝都に入る



通常の鉄砲隊は数十人から多くて数百人だが

今回は桁が違った

門から下を覗くように撃つもの 500

弾切れの際、代わりに前に出るもの 500

さらに弾切れの際、代わりに前に出るもの 500

周囲の建物に上がり撃つもの 1000

弾切れの際、代わりに前に出るもの1000

さらに弾切れの際、代わりに前に出るもの1000

正面から立ったまま撃つもの

右翼、中央、左翼 計 2500

膝を曲げた状態で撃つもの

右翼、中央、左翼 計 2500

弾切れの際、代わりに前出るものそれぞれ	5 0 0 0
さらに弾切れの際、代わりに前に出るもの	5 0 0 0
狙撃手	5 0 0

計 2 0 0 0 0

通常の鉄砲隊の 2 0 0 0 倍から 2 0 0 0 倍の数である。

帝国の一般兵が携行する武器は基本的には剣と銃の二種類である。例外として階級が上のものにはそれぞれ使いやすい武器を持つことが許可される。

それらの武器は帝具の技術がある程度流用されている。剣は自己修復機能を持ち、銃にはアサルトライフルやスナイパーライフルなどの多様に渡る。

全ての銃が止まる1秒の間  
そして再び始まる銃撃の雨

宮殿がサイタマに襲撃されて3日後

皇帝はサイタマが帝都の中で見つからないことから、もう既に帝都にはいない、という判断を下した。

それと同時にサイタマをもう2度と帝都内に侵入させないため東西南北の各主要門に3人の將軍を常に配備することになった。

その内の北門担当の將軍の一人であるダレイオは安堵した。

ダレイオは自分が將軍になれたのは今まで失敗をしなかつたからだと思っている。

一兵卒時代は上司に媚を売り出世をうながしてもらい、戦いでは常に前線で多くの戦

果を挙げ、陣形作りでは天候や地形、兵士の士気を含めて慎重に行い、大臣が変わった際には誰よりも早く賄賂を送った。

今では大臣がある程度、地位を認める將軍だ

しかしそれは今までして来た自分の行動が全て成功して来たからである。

媚びを売る相手が厳格な性格の人間だったら自分は今でも一兵卒だったろうし、戦いで殺して来た相手が自分よりも格上の相手なら自分は今まここに立っていなかっただろうし、陣形に関する知識や地形、天候、兵士たちの指揮の高揚に関する知識がなければ自分は將軍にはなれなかっただろう。

新しく大臣になった人物についてもどのような人物であるかある程度知っていた、だから賄賂をいち早く送った。

努力をして強くなり。勉強をして知識を得て。情報をもって將軍になった。

今まで行って来た自分の血と汗と涙と努力の結晶が今の將軍の地位であることをダレイオスは十分に理解していた。

そして大臣の機嫌を損ねるような失敗をいつかはしてしまうのではないかと思うと気が気でなかった。

だからダレイオは努力を惜しまなかった。

失敗をしないように絶対に成功するように

今回も入念に準備をした

北の道から奴が来た時、欲に目が眩んだ馬鹿どもに奴の体力を削らせようという作戦を立て即座に実行した。

「北のほうから、指名手配犯に似たやつが来てる」

それがダレイオの作戦であるのにも関わらず馬鹿どもは突っ込み吹き飛ばされ、男の体力を削った。

男が馬鹿どもを吹き飛ばしている間に隊列を組む、付近の住民への避難命令はとつて出した。

どんな生物でも疲れは出る。ましてや1万人規模の人数を相手にしたとなると歩くことだけで精一杯になる。

現に奴は疲れのせいで銃撃を回避できないでいる。

だがしかし油断はできない、相手はあのブドー大將軍に打ち勝ったのだ、もしかしたらまだ生きているかもしれない。

2回目の銃撃が終わりると、すぐに3回目の銃撃の合図を出す



それほど命中率の高くないライフルでもこれだけの人数が撃てば当たる、例えば相手がどんな危険種だろうとバケモノだろうとこの波状攻撃で死なない奴はいない

3度目の銃撃が終わる頃には北の門周辺は土煙で覆われていた。少しずつだが晴れてくる辺りに先ほどの銃撃がどれほどのものかを物語っていた。整備された道の象徴たるタイルは粉々に砕けタイルはえぐられ大地までもが見えている。建物の壁は至る所で穴が空きポロポロとカケラやガラスの破片が落ちる音が聞こえてくる。

少しやり過ぎたか？

ダレイオはそう思いつつも自分を納得させる、あの位やらなければブドー大將軍は倒せないだろう。

そう自分に言い聞かせ今回も失敗しなかった事に安堵する。

しかし現実是非情である

「なんだかな、フブキのやつの方がまだ強かったかもしれないな」

北の門周辺を覆っていた土煙が晴れ、男が無事である事を告げる

服は所々汚れはあるがどこも破れていなかった

声の主はそう言ってこちらに近づいて来る、確実に一歩、また一歩と

兵士達の多くはその場で立ち尽くすことしかできなかつた。

あれだけの銃撃を受けながらも無傷のままにいる目の前の男にどう対処すれば良いのかわからないからだ。

それもそのはずである、なぜなら彼らは最初から銃撃で目の前の男を殺すことしか言われてないのである。

むしろ人間一人相手にこの人数は多すぎるから手を抜いていたものが殆どだ。

自分がちやんとやらなくても大丈夫だろう。

どうせ死んでる。

朝っぱらからメンドクセー。

中には真面目に引き金を引いて狙いを定めていた者もいたが、これは流石に想定外であつた。

ありえない。信じたくない。

嘘だつ!!?      Х о р о ш и й

そんな感情が兵士達の中に蔓延している。

一歩ずつ確実に近づいて来る男の存在を前に、現実を認めなくなつたのだ。

彼らと男の間にあつた距離は約50メートル

武器を持ち隊列を組んでいた彼らならば、その距離は恐るるに足らない距離だ銃を構えて引き金を引く、それだけで相手と自分との距離は絶大なものとなる。

しかし、50メートルという距離は今の彼らからしてみれば絶大でもなんでもない。弾薬は既に空っぽ、たとえ弾薬があつたとしても撃つたところで目の前の男には傷一つ

つけられない、下手すれば一番最初に自分が殺される。

一歩

一歩

一歩

一歩

目の前の男が一步步ごとに自分が断頭台に歩みを進めている姿を想像してしまう。もしこれがただの危険種ならば兵士たちは即座に剣を取っただろう。自分たちの剣は危険種の肉を容易に断ち切ることができているからだ。

しかしあれだけの銃撃の中かすり傷一つない男が、自分たちの剣でその体を断ち切れ

ることができはるはずがない。

逃げたい、ここにいる兵士の誰しもが思った。

目の前の死は一步ずつ確実に近づいている。逃げなければ死ぬ、本能がそう告げている。

しかし恐怖のあまり誰も動けずにいた。

20000にも及ぶ帝国兵士たちは目の前に迫り来る恐怖を前に一步も動けずただただ立ち尽くすしかなかった。

そんな中、目の前に迫り来る恐怖に対し走り出したものが現れた。

若い一般兵だった。

彼自身どうして走り出したのかわからないでいた、本当なら今すぐ武器を捨て逃げ出したかったが恐怖が彼の思考を異常にした。

もし、仮にこの一般兵が最初に逃げ出したとしよう。限界まで注ぎ込まれた恐怖は波紋を起こし兵士達は立ち向かうという選択肢を捨て一心不乱に逃げ出しただろう。

この極限状態で逃げ出すことは決して恥ではないだろう。

寧ろ立ち向かうということは自分の命を無駄にする愚行でしかない。

「うおおおおおおお!!?」

一般兵は目の前の男めがけて全力で剣を振るう。極限の状況下からか彼の体は限界を超えた。振るった本人でさえ驚愕するほどの最高の一撃

しかしその一撃は男に届くことはなかった。彼は男に殴られ、数十秒間の空の旅をしたのち、近くの木に引つかかることとなった。

無駄に終わってしまった最高の一撃、しかし彼の一撃は決して無駄にはならなかった。



# 拳をひく

## III

ダレイオ将軍は理解できずにいた  
目の前の一般兵が銃を捨て男の元に走り出したのだ。

なぜだ、なぜ逃げない



なぜ自ら火の中に身を投じる

なぜ一歩前に踏み出すことができる

將軍である私ですら恐怖のあまり体が震えて動けないのに、なぜ

命を投げ出したとしても、奴の攻撃を一撃受け、吹き飛ばされるだけなのに、なぜ

名も知らぬ一般兵は剣を抜き、大きく振りかぶる

決して届く事のないその剣をなぜ振りかぶる、將軍である私ですら男にかすり傷一つ負わせられないのに、なぜ

「お前だけ、カッコつけさせてたまるか!!?」「おおおおおおお」「帝国、万歳ツ!!?」「ああああああ」「やってやるぜエ」「死なば諸共ダア!!」「いけえ」「たのしー」「おりやああああ」「なのです!!?」

先ほどの一般兵のとなりで銃を構えていたものが銃を捨てて走り出す。それを見て隣りにいたもの、後ろにいたもの、少し離れた所にいるものが走り出す。

獣のように声を荒げ

口々に雄叫びをあげ

銃を捨て剣をとる

なぜお前らは、立ち向かうことができるのだ

飛び出した兵士は次々と空を舞い、その数を増やす。

しかしその倍の数の兵士が今もなお走り出している。

その光景にダレイオ將軍は今がチャンスとばかりに逃げようと思った。

しかし

ダレイオ将軍の足は  
一歩だけ前に進んでいた

そして理解する、自分の心を

私は失敗を出来るだけ避けて来た

そうすることが最も正しい判断であり

それが間違いであるとも思っていない。

だがしかし

名も知らぬ一兵卒が命をかけて立ち向かい、歴戦の猛者であるはずの将軍が尻尾を巻いて逃げるということは決してあつてはならない!!?

腰にある剣に自然と手が回る

自分が一兵卒だった時、帝国から貰った思い出の品  
その剣を抜き、勢いよく突き上げる。

「皆の者お！我に続けエ!!?」

「「うおおおおおおおおお!!?」」

将軍の盛大な雄叫びに釣られ、北の門にいた全ての兵が銃を捨て剣をとった。

最初に飛び出した兵士の無謀とも言える行動は恐怖に縛り付けられた大多数の人間の心を突き動かし

1人では到底不可能であつた事を成し遂げた

A  
M  
0  
7  
:  
0  
0  
サイタマ北門を突破



## IV

早朝、北門周辺で人が打ち上がる姿を多くの人々が目撃した。その数十秒後に緊急警報が発令され帝都警備隊の面々は非番のものも含めて北門周辺の市民の避難誘導を行っていた。

警備隊が北門周辺の市民を避難し終えた頃、サイタマは北門を後にし、帝都住民街にて集団暴徒化した学生の集団を相手にしていた。

頭に龍をイメージしたようなヘルメットをつけ、剣や弓、斧、槍などを血走った目で振るってくる危険な暴徒である。

もちろん彼らはサイタマが思っている凶暴な学生集団などではない。帝国の繁栄を脅かす反乱の芽を摘み取るために設立された暗殺部隊。



言うなれば帝国の刺客である。

暗殺者として純粹培養された彼らは、帝国に仇なす者を殺す事を正義と信じ、死すら恐れない戦士でもある。

国のために仲間を犠牲にし、自分の身体を犠牲にし、どんな強大な敵をも打ち倒してきた彼らだが、今回は相手が悪かった。

1人の少年の剣がまたサイタマの首があつた所を横切る。

「くそつ、なんであたらない」

十代であるはずの少年の髪は年老いた老人のように白く細い。顔の至る所にシワや

シミが見受けられ縁側で日向ぼっこをしながらお茶をすすっている方が絵になるだろう。

しかし、片手に持っている剣があまりにもしっくりきすぎているせいか、まったくもって違和感を感じさせない。

暗殺部隊の現隊長であるカイリは何度目かの悪態を漏らす。

「帝国の未来を脅かす凶悪な賊が帝都に潜伏している可能性がある、帝国の栄えある未来のために全力で殺せ」

いつものと同じような命令をいつもと同じように受け

いつもと同じように命をかけて始末する

しかし、いなかった。

代わりに出てきたのは帝国の腐った貴族たち

帝国が可笑しくなっているのはうすうす感づいていた。

しかし帝国を裏切れることは悪いことだ。きっと誰かが何とかしてくれる。

だから俺は帝国の敵を殺す。

誰かが帝国を何とかしてくれるその日まで

北門付近にいるという対象に向かい走りだす。

始末する対象を見つけ、投薬し

毒を武器の刃に塗る。

屋根から飛び降り、腰にある刀を鞘から抜く。空気すらを断ち切る速度をもって、刀を標的の首に伸ばす。

投薬し異常なまでに強化されたその一撃は今まで数多くの命を奪ってきた。背後からの不意打ち、それでいてこの距離。

(取った)

その時はそう確信した。

斬撃が硬い何かにあたる。

自らの絶対の一撃が塞がれる。

たびたびあつた自分よりも格上の存在との戦い。

今回は標的は一味違うのだと納得がいく。

しかし

目の前の標的はそれを摘んだのである。

左手の親指と人差し指で軽くポテチを摘むかのように

一瞬目をそのあつけない動作に目を奪われてしまう。

しかしそのままじつとしてい

るカイリではない。すぐさま体制を立て直そうと剣を力いっぱい引く。

しかしその剣はピクリとも動かない。

投擲して極限まで強化されたカイリの力を持ってしても標的の指から剣をとり戻せる事は出来ないでいた

カイリはすぐに持っていた剣を手離し距離をとる。そして部隊の皆に命令を下す

「超強化薬服用!!？」

彼らは一瞬その言葉に驚いたはものの直ぐに懐からラムネのような粒状の薬を取り出し、のみこむ

先ほど飲んだ薬よりも強力な力を得る代わりに

寿命を大幅に縮め、脳に異常なほどの負担をかけ

体の臓器があちらこちらで悲鳴をあげ

精神すらを崩壊させる。

そんなことは彼らも知っている  
しかし、彼らに迷いなどない  
帝国こそ彼らの全てなのだから。

A M 07:30 サイタマ帝都 住民街を移動中

V

サイタマも先程は相手が子供だけあって、手が出しにくかった。それに子供は生意気であまり好きではない。





現在サイタマが歩いているのは帝都 貴族街

帝都の貴族はこの1週間でその数を半分以下に減らしていた。皇帝の命令で、強制家宅捜索が行われ自分たちの人に見せられないような趣味が露見しその多くが捕まったからだ。

捕まった者たちの多くは貴族位を剥奪され牢獄にぶち込まれた、そのため多くの貴族たちが同じ部屋で鮫詰め状態の生活を今もお送っている。

主人が居なくなつた屋敷は住処のない者たちが住み着き、荒れ果てしまった。今は避難警報が発令されているため住処のない者たちも強制的に追い出されてしまったため荒れ果てた屋敷はもはや廃墟と化していた。

そんな廃墟とした貴族街をガムを噛みながら悠々と歩くサイタマの姿を遠目で見ているものが4人いた。

覆面に拘束具、長身で筋肉質という明らかに不気味な出で立ちのもの。先ほどサイタマが倒した暗殺部隊の者たちと同じような服の少女。建物に背中を預け葉巻を吸うサングラスをかけたおっさん。羽の髪飾りをつけた中性的な顔立ちをした青年。

4人は事前に打ち合わせをした通りに行動をする。

彼らの打ち合わせはこうだ

まず青年、ランが男の目の前に行き話しかけ、男を青年に集中させる。男が青年に集中している間に少女、クロメの帝具とおっさん、ホリマカの帝具で召喚した者たちを近くに寄せ、男が召喚した者たちに気付く前に覆面拘束具、ボルスの帝具で近くの建物ごと男の周囲を燃やす。ランは炎が男の周囲を隙間なく燃やすのを確認したら空に飛び上がり空中から様子を見て指示を出す。

最終的には少女のとおっさんを使いトドメを刺す。

4人の内の1人であるボルスは緊張のあまり自分の帝具を握る手が汗でにじむのがわかる。

帝国の軍人であるボルスは今まで焼却部隊として数えきれないほど焼き払ってきた。しかし、1人の人間を相手にするのは今回が初めてだった。

ボルスの帝具、煉獄招致“ルビカンテ”は文字通り地獄の業火を放つ火炎放射器の帝具だ。

銃型のノズルから噴出される業火は水で鎮火することもできず、放った対象を焼き尽くすまで決して消えることはない。

1対多の状況下でこそ、これは有用性を発揮する。

今回の仕事は、囹役であるランを燃やさないように気を遣い尚且1人の人間を逃げられないようにする環境作りである。小心者であるボルスはそれが成し遂げられるか心配で心配で仕方がなかった。

(いや、ダメ、くよくよしてたら囹役を引き受けてくれたラン君を心配させちゃう。ここは1番の年長者として自信をもって行かなくちゃ)

そう覚悟を決めたボルスにはもう迷いは無かった、ランはその様子を見て男に話しかけに行った

ランが話しかけてから数秒後、クロメとホリカマから準備ができたという合図をもらいボルスは走り出す。

何人かの影が男のもとに走り出す。

ゴウウウウウウウウウ

ボルスは男が思っていた以上にランに集中していたため炎を当てることなく目標を達成することができた。

「後は任せて」

クロメはボルスにそう告げると、自分のとっておきを出す。

クロメのとっておき、巨大な地響きと共にソレは地中から這い出てきた。

## VI

ランは周囲が火の海になり炎の中から脱出できる隙間が無いことを確認すると、自らの帝具万里飛翔 “マステイマ” で一気に空に飛び立った。

万里飛翔 “マステイマ”、は羽の帝具だ。

円盤状のパーツにある一対の翼がついており、背中に装着する事で空を自由自在に飛び回ることができ、高速での飛行も可能だが、長時間にわたる使用はできない。

ランは炎が届かないギリギリのところから炎の中を見る、先ほどした手相の話を信じて一生懸命自分の手相を見ている男がいた。

炎の中で9つの影に囲まれているのにも気がつかずに。

9つの内6つの影はクロメの帝具、“死者行軍”八房により操られた者たちである。

残る3つはホリマカの帝具 “奇々怪々” アダユスにより呼び出された強者である。

“死者行軍” 八房

殺した者を呪いで自分の意のままに操ることのできる帝具、殺した者たちは生前のままのスペックで操ることができる。

“奇々怪々” アダユス

本来は自分の体に帝国の土地で死んだ強者の魂を憑依させる事でその力を一時的にはあるが使用することができる。奥の手は自分の近くにある帝具の数だけ強者の魂を具現化し意のままに操ることが出来る。そして近くにある帝具の数が多ければ多いほど自分よりも強い魂を呼び出すことが出来る。

炎の中で最初に動き出したのは巨大なカエルだった、男の背後の地面から這い出るとその大きな口をもって男を一息にパクリと頭から丸呑みにした。

これで終わり？かと思っていたら突然カエルの腹が爆発し、男が姿を見せた。カエルの腹から完全に男が脱出する前に巨大なゴリラが男の背後に回り込みその巨大な腕をもって羽交い締めにした。

しかし男に振り払われ坊主頭で巨大な盾を持った男を巻き込みながら数十メートルふつとび炎の中に消えていった。

ゴリラを振り払った時、男は足下にあつたカエルの死体でバランスを崩した。その瞬間、目にも止まらぬ速さで男の足首に鞭が巻きつけられた。あごひげを生やした赤髪の中年男性がバランスを崩した隙をつき自慢の鞭でもって足をとり、そのまま男を炎の中に叩きつけようとする。

しかし男はそれをもう片方の足だけで踏ん張り炎の中に入るのを防いだ。そして足に巻きついた鞭を掴むとギユウンという音と共におっさんから奪い取り、そのままおっさんを空の旅へと誘った。

男は鞭を奪い取った方とは逆の手で背後に回り込んできた暗器使いの真つ赤な仮面でマント男の顔面に拳を入れる。

男の拳は暗器使いの持っていたナイフを砕きながら仮面の中央に決まり、暗器使いは仮面の破片を飛ばしながら炎の中に消えていった。

男が暗器使いが炎の中に消えていくのを眺めている間も無く横から飛んできた2つの弾丸をなんの苦もなくそれを避ける。そして弾丸を撃ってきた金髪ロングの女保安

官（？）に狙いを定める。

女保安官は男が近づいて来る前に後ろに大きく後退しながら引き金を引こうとするが目にも止まらぬ速さで急接近した男に銃の先端をバキリと潰されてしまう。

そして男は持っていた鞭を使い、手馴れた動作で女を簀巻きにする。その動作はまさに閃光の如しでどこぞの蜘蛛女が見たら膝を折って弟子入りを志願するほどだ、だが生憎その蜘蛛女はこの世界にはいない。

たった数秒の出来事で炎の中で立っている影は残り3つとなった。

しかし3つの影はどれも先ほどの6つとは比べものにならないほどのオーラを発していた

長い黒髪に白銀の鎧、刃渡りの1メートルほどの槍に凍土でも滑らない靴を履き白いマントをたなびかせている青年。

鎧や槍ベルト、靴そして額当てにも十字の印があり、それが彼の生前のトレードマークだと容易に想像ができる。



先ほどの青年よりも長く伸びた黒髪に肩のあたりから左右に1つずつ腰のあたりまである髪が前に垂れ下がり、それだけでなく獣の耳のような髪が立っていた。老人ではあるがその鍛え抜かれた肉体は老いを感じさせない。

顎のヒゲは長く、首に巻きつけている青いスカーフの辺りにまでかかっていた。左手には天秤を模した杖を持っていて耳には年齢にそぐわない金ピカのピアスをいくつもつけていた。

最後の1人は長袖のワイシャツにジーパン首には赤いマフラーをつけ、長い金髪をボサボサに伸ばしておっさん。

それだけで済めば一目瞭然なダメおやじであったが3人の中で1番危険なオーラを放ち、尚且つ鋭い視線で男の動きを確認し腰にある刀の柄を握りいつでも抜ける準備をしていた

3人の中で一番最初に動いたのは槍を持った青年だった、青年は男に真正面から突っ込んでいきその勢いで男の腹部に槍を突き刺す。男はその槍の先端部分を使って止め

るがここで初めて男に攻撃が当たった。青年は掴まれた槍の上を歩き男の頭を両手で掴み膝蹴りを食らわせる

男が青年の攻撃をくらい怯んだ隙に残りの2人男との距離を詰める

3人をサイタマが倒しきる前に、周りを囲んでいた炎の壁が巨大な力によって吹き飛ばされた。

## VII

廃墟と化した貴族街を包んでいた業火をいとも容易く吹き飛ばしたのはクロメのとっておきであるドラゴン型の超級危険種、デスタグールによるものだった。ドラゴン特有のプレス攻撃により前方数キロをルビカントの炎もろとも吹き飛ばした。

その威力は凄まじく、巨大な貴族の邸宅や頑丈な大理石でできた時計塔などを跡形もなく、大地はスプーンですくい取られたアイスのようにえぐられていた。先ほどまであった地獄の炎は全て消え静寂と砂埃のみが周囲を包んでいた。

「やったね流石、クロメちゃん」

「さすが超級危険種ですね」

「うん、私のとっておきだもん」

少し遠くで見ていたボルスと上空で炎の中を確認していたランがクロメに声をかける。

クロメは自分のとっておきが褒められたことが嬉しいのか笑顔を見せる。思っていた以上にデスタグールのプレスが強力だったのを見てかなり上機嫌だ。

「ところで炎の中ではどうなっていたの？」

ボルスは少し気になっていたことをランに尋ねる。

ランは少し考えるそぶりをして炎の中の戦闘をありのまま2人に話すことにした。

クロメの死体人形の殆どが一撃でやられこと

ホリカマの操っていた者たちもあまり決定打を与えられていなかったこと

自分が指示を出すまでもなく一方的だったということ

デスタグールの攻撃を男は回避できていなかったということ

「それが本当だったら私たちが束になっても叶わなかったんじゃない？」

「おそらくそうでしょう、上から見えていたのですが私たちでは束になっても勝てなかったかもしれません」

「…ポリポリポリ」

男の強さに驚愕するボルスとラン、今回の件で帝国が自分たちを強制的に招集をかけた理由がわかったからか。今回の件の深刻さを改めて痛感したからだろう、顔がけわしくなる。

クロメは2人との会話を中断し仕事終わりのお菓子を食べる。

クロメの様子を見てけわしい顔をしていたボルスとランは少しだけ笑顔をこぼす。

ドツゴオオオオン

3人の背後で巨大ななにかが倒れる音がした。

## 拳をひねる

### VIII

3人の中で一番最初に飛び出したのはクロメだった。

デスタグールがバラバラになりホリカマが壁から生えている状況にも関わらずそれらを無視してサイタマのもとへと走り出す。

「ナタラツ!!？」

クロメは死体人形の最後の一体であり自分の護衛であるナタラを呼び出す。

地面から這いであるようにして現れたナタラはクロメと同様に一気にサイタマに向かって走り出す。

サイタマは近づいてくる足音の主を見て深いため息を吐く。

ナタラは自分の武器である青龍トリシユ偃月刀ラを抜き放つと少し距離を置き勢いよくジャンプをして飛びあがる。

サイタマは視線をナタラに合わせるが太陽を背にとるナタラをその目で捉える事は出来なかった。

ナタラは勢いよく青龍偃月刀の柄を伸ばし空中からサイタマの左の肩に向かって振り下ろす。が、振り下ろされた青龍偃月刀をサイタマは左手で何の苦もなく掴む、掴んだ衝撃でナタラの青龍偃月刀にヒビが入り、もう一度でも使えば壊れてしまいそうなど脆くなってしまった。

しかしナタラはサイタマの集中を自分に集めることに成功した。

ナタラに集中しきったサイタマはナタラの陰に隠れるようにして接近していたクロメに気づくのに一瞬遅れてしまう。

クロメはナタラの青龍偃月刀を掴むためガラ空きになったサイタマの胴に刀を当て斬り捨てる。

しかし、上から飛んできたランによつてクロメは上空へと連れさらわれてしまう。

「グッ」

「なっ!?」

クロメはランに文句を言おうとするが先ほど自分がいた場所にナタラが勢いよく振り下ろされる姿を見てランが自分を助けた理由を悟る。

「あまり一人で行動しないでください、流石に一人であれを倒すのは無理です」

ランは真剣な表情でクロメにそう言う。



ランはクロメを助けた時に足を地面に思い切りぶつけたらしく歯を強く食いしばり痛みを堪えているのが見てわかった。

地上ではボルスが向かってくるサイタマにルビカンテの炎を回避しづらい不規則な形で放射しているがいかにも素人の動きで全てが回避されジワジワとその距離を縮められていた。

ナタラはホリカマの隣で下半身だけが壁から生えていた。

ランはクロメを地面に降ろすと今度はボルスのもとへと行きギリギリのところまでイタマの一撃を回避する。

サイタマのただ腕をふるっただけの風圧でランとボルスの二人はクロメのところまで吹き飛ばされた。

ランはマステイマを使いギリギリまで勢いを殺し地面に足をつける。  
ビキンビキンと感じる足の痛みを堪え、産まれたての子鹿のように足を震わせながら  
も立ち上がる。

「ランくん大丈夫!?？」

「ラン!!?」

その様子を見てボルスとクロメが心配そうに声をかけるが

「私はいいですから、今は目の前の敵を倒すことに専念してください!!?」

ランの吐き捨てるような強い言葉にボルスもクロメも言葉を失う。ランは痛みを堪えこの状況下で思いついた作戦を2人に告げる。

失敗は許されない、一か八かの勝負

## IX

ボルスはサイタマに向かって奥の手である『岩漿錬成』マグマドライブを放つ。

タンクの中身を少し使い一直線に放つ技。使用后、ルビカントの威力が下がるというデメリットもあるがランに頼まれた『一直線かつ目の引かれる技』であることには変わりはない。

絶対に当てる!!?その一心で放ったそれは空中に赤い光を残しながら超高速でサイタマの元へと向かう。

サイタマは目の前に迫る灼熱の溶岩に気づくとギリギリのところまでひよいと避ける。

そして気がつく、溶岩の後ろに隠れるようにして飛んできたランに。

サイタマはすぐさま拳を握り、ふるう。

バチイイイイン

ふるった手は勢いよく跳ね返された。

そして

サイタマの体が大きく後ろに後退した。

マステイマの奥の手である『神かみの羽根はね』

それは、ありとあらゆる攻撃を跳ね返す技である。

この奥の手は円盤状のパーツを分解して出力を上げ、光の翼で、敵の攻撃を跳ね返す技である。

ただささえ分解され壊れやすくなったマスティマは男の拳を跳ね返すのと同時にサ  
イタマの拳のあまりの勢いにより粉々に砕け散った。

ランは返しきれなかった勢いに乗り、空の彼方へと吹き飛ばされていく。

「それでいい」ランは消えゆく意識の中そう呟いた

周囲が全て炎、圧倒的不利な状況での戦闘。圧勝

本来であれば帝具使いの將軍数人で討伐する 超級危険種。一撃

暗殺者であるクロメのフェイント。通じない

銃弾よりも早いボルスの火炎放射。楽々回避

相手の技をそのままそっくり返す反射。

あまりの強大な力故え、反射しきれず。

(まさか帝具が耐えきれないほどの力で殴られるとは…、)  
そのことだけはランも思いはしなかった。

ランの役目はギリギリまでクロメを男の近くに運ぶこと。

先ほどのクロメとナタラが仕掛けた時とは違い、男は完璧にバランスを崩している。

骸人形であるナタラを操っているときと操っていない時とではクロメの刀を操る速さは比べ物にならない。

クロメは必殺の居合で男の首を狙う。

長いこと離れ離れであつた姉妹が互いに抱きつくかのように、一気に男に飛びかかりその距離を更に縮める。

そして抜刀

パン



なにかが割れる音がした

A M  
0 8 : 0 0  
サイタマ

帝都貴族街を移動中

X

帝都  
北部  
時計塔広場

『帝都の中の公園でもっとも広い公園は?』

そう聞かれたら誰もがこの時計塔広場のことを指すだろう。もし違う答えが帰ってきたらそれは田舎者が帝都のことをまったくもって知らない馬鹿である。

そう言われてもおおしくないほどこの時計塔広場は広い。

しかし今現在この時計塔広場とはある4人により貸切状態となっていた。

「てめえが俺の親父の顔面を腫れあがらせた犯人なんだつてな」

顔に大きなばつ印がついた褐色の肌の青年はドスをきかせた声でサイタマに話しかける。青年は、かなりイラついているようで首の骨や指の骨をパキパキならし威圧的な態度をとる。

話しかけられた方のサイタマもいちいち殴った人間のことなど覚えておらず、顎に手を当て首を少し傾け思い出そうとする。まったくもって思い出せないが。

(うーん? 誰のこと言ってるかわかんねー)

顔にばつ印のついた褐色の肌の青年、シユラはここ数週間の恥辱にまみれた日々を思い出す。

久々に帰ってきた帝都、父親に立派に成長した自分の姿を見せたいという思いと玩具おもちゃで遊びたいという子供の様な欲求を持っていた。

宮殿に着くまで少し時間がかかると思った彼は早くオモチャで遊びたいという欲求を押さえつけていたが、彼がいた頃の帝都には無かった街の人々の明るい笑顔や笑い声を聞き急激に人の泣き叫ぶ姿や自分に媚び諂う姿が見たくなつた。見たくなつてしまった。

普段から抱きたい女を抱き、ムカつく奴を殴り、美味しい酒を呑み、美味しい食事をとつてきた。高慢で自分に絶対の自信を持ち他者を見下すシユラが当然我慢などできるはずもなく、スラム街で少々おいたがすぎてしまった。

それが彼の過ちだった

るんるん気分です事を終えた彼を待っていたのは目が使えないであろう髭面で坊主の杖をつけて歩いて歩いているおっさんと帝都宮殿内にいるはずの近衛兵数十人であった。

近衛兵に周囲を囲まれて逃げられない状況になり彼はすぐさま自分が誰であるかを言おうとしたが、急に体が重くなりその場に倒れ伏し目が覚めた時にはすし詰め状態の牢獄の中にいた。

牢獄の中は最悪だった。

薄暗く汚れていて石の床は冷たく少し湿っていて、アンモニアと排泄部、吐瀉物や血が壁の至る所にぶちまけられていた。それでいてあまり広くない牢獄に10人以上の人間と同室にされ、服はボロボロで薄汚れた麻の布でできたものに着替えさせられていた。

牢獄の中のトイレからはネズミの鳴き声が聞こえハエやゴキブリが常にいた。同室の人間は膝を抱えぶつぶつと何かを小声で呟き涎を垂らしてこちらから何を話しても一切聞こうとしない、かと言って向こうから話しかけられた時に無視すると自分の糞尿を投げってくるためシユラは無視することができなかつた。

唯一の楽しみは食事の時でそのときだけは同室の人間は静かになる、と言つても食事はシユラが食べてきたどんな料理よりもまずく重湯に泥水を入れた様なものでシユラは一口食べた瞬間に食べない方がマシだと思ふほどだった。しかし3日後、流石に限界を迎えたシユラは苛立ちを抑えながら薄汚れた皿に入った少量のそれをすすった。

その数日後、大臣との面会が叶い全ての事情を知つたシユラは自分にこんな屈辱を味合わせ尚且つ父親に呆れられる原因を作つた男をぶち殺す事を決意した。

決意されたとうの本人はとうとうと

(上半身裸ってことは変質者だよな?)

目の前のほぼ上半身裸の男を変質者と決めつけていた。

## 拳を放つ

## XI

はじめて人間を殺したのは5歳の時だった。

父親に連れてこられてやって来たその場所には4人の人間がほぼ裸の状態で磔にされていた。

1人は大人の男、1人は大人の女、1人は年寄り、1人は自分と同じくらいの年頃の男の子だった。

4人はナニカを発していたが父親の言葉を聞くことに精一杯だった自分にはそれは届くことは無かった。

父親の言葉を聞き終えた自分は黒くてズッシリとした重いモノを渡された。その時の言葉はよく覚えてはいないが自分は父親の言葉に強く領いた。

磔にされている4人に近づく、4人がナニカを言っているのかは分からなかった。

でも、自分が絶対的優位な位置にいるということとは理解できた。

先程渡されたものを老人に向ける。

父親に教わった通りに黒いズッシリとしたものを老人に狙いを定める。外さないようにしつかり近づいて老人の胸の近くにあてる。

パシユツ



顔に何かかかった

乾いた音と共に黒と赤の混じった液体が老人から溢れ出す。先程からナニカ発していた3人の声が言葉にできない悲鳴に変わる。

老人は胸から液体を暫く垂れ流すと口から同じものを吐き出し動かなくなった。それを自分は眺めていた。

その言葉と同時に父親は、今まで始めて自分の頭を撫でてくれた。今まで自分のことなどあまり気にかけてくれなかった父親が嬉しそうに自分のことを褒めてくれた。

次は自分と同じ年頃の男の子を狙った。

大人の男と大人の女が必死になってナニカを訴えかけようとしていたが老人の時と同じように外さないよう今度は少し距離を置いて、引き金を引いた。

パン

乾いた音と共に液体が男の子の体から流れ落ちる。老人のと違い流れ落ちる赤い液体には黒は少なく明るい赤が多かった気がした。

今度は少し怒られた。

怒られた理由が分からない自分に父親が手本を見せてくれると言った。

父親は大人の男の方に近づくと右足に銃を当て、引き金を引いた。大人の男は今までにないほど大きな声でナニカを叫んだ、言葉にならないナニカを足から血を流しながら叫んでいた。

今度は左足、右手、左手と順番に父親は大人の男の身体を銃で撃ち抜く。

1発ごとに違う声をあげ、違う表情をし、違う言葉を放つ男を見て父親は笑っていた。男が動かなくなると父親は自分の持っていた銃を渡してくれた。

それを自分は女に向ける

右足を撃ち抜く

下にズレてしまった。太もも狙うつもりが足の甲の部分を撃ち抜いてしまう

左足を狙う

今度は真ん中から少しだけズレてしまった。太ももの中心を狙ったつもりが内側によつてしまい、股の肉をえぐる事になってしまった

右手に命中する

今度は狙った所にしっかりと当たった。でも思っていたのとは何か違った

左手に命中する

今度は思った通りになった

女は礫にさされているのにも関わらず自分の身体を大きく揺らす。撃ち抜かれた箇所から流れ出る血液が一瞬増えそして直ぐに元に戻る。女は獣のような声をあげたかと思えば苦痛に染まった悲鳴をあげる、痛みに耐えるようと歯ぎしりをしてもあまりの痛さに嗚咽が漏れる

美しかったであろう顔は恐怖、恨み、怒り、悲しみ、涙、よだれ、鼻水、汗それらがグツチャグツチャに入り混じり混沌としていた。

それが暫く続いて女は遂に糸が切れた人形のように動かなくなつた。

「お母さん……？」

不意に背後から声がした。

振り向くとそこには礫にされていた男の子よりも一回りほど小さい女の子がいた。

女の子は母親だったものに向かって走り出す。

腰のあたりまである長い黒髪は美しさを有していた。身につけている薄いピンクの仕立ての良いドレスはその子の家がどの様なものだったかを証明し、まん丸でぱっちり

とした蒼い目は涙に溢れていてその雫が美しい少女の顔をより一層美しく見せる様に引き立たせていた。

ドクン

胸の高まりを感じた。  
父親に肩を叩かれる。  
ナニカを囁かれる。

ドクン　ドクン

胸の鼓動が更に高まる

礫にされていた女は既に地面に降ろされ力なく体を横たえていた。その上に覆いかぶさるようにして泣く少女。

父親はまたナニカを呟く。

それと同時に壁にかけてあるさまざまの道具と隣の部屋にある大きなベットを指差した。

そして、兵士たちと一緒に部屋を後にした。

俺はそれを見計らって、未だ自分の母親だったものに泣きすぎる少女に向かって――

「うっわー、シユラのやつだいぶ飛んでったな。イゾウのやつは、って木にひっかかって

ら。死んだか？江雪ぶつ壊されてるてわかったらどうなるか気になるけど、まあ関係ないっしょ」

少女はそう言って吹っ飛ばされたシユラとイゾウのことを一旦忘れ、時計塔にめり込んだ上半身を無理矢理引きずり出す。

「うーん、あの力だとすると±10くらい？7ならなんとかできるけど、6は厳しい5だとしたら今すぐダツシユで帰りたい」

身体に着いた土埃をはたき落としポケットからメモ帳を取り出す。無印のメモ帳は片手に収まる程度のサイズだが五センチほどの厚さがあった。

少女は躊躇なくそれを本体から引きちぎり、ばらまく。

「あの馬鹿どもを利用してなんとかノルマ達成できると思っただけだなあー、少し考えが甘かったか…」

ばらばらになったそれらは意志があるかのように広場の上空へと飛んで行き、しばらくすると空中で解けるようにして消え、広場全体に見えないドーム状のものを形成し

た。

「こっちのメンバーも少し多かつたし、転生者もいるし、もしかして最近起こってる例の件って、いやそれは考え過ぎ？」

少女はぶつぶつ呟きながらもどうするか考え、ポケットの中からポケットの体積以上のものを取り出す。

数十センチのプロペラがいくつもついた機械。

自分と全くもって同じサイズのマネキン。

明と大きく書かれたスクロール。

「結界はがっちりじゃ無くて緩めに設定、音は4分の1カット、建物への配慮は5、外の様子を確認する為の分霊は10：　死ぬかもしれないからやっぱドローン、一応分霊は100分の1を東西南北に1人置いておいてっと。バフはあまりかけすぎると相手が本気になってこの国ごと滅びかねないし、かといってデバフ使うとあいつらに馬鹿にされるから、今回は無し。一応精神は明王クラスに設定、無いとは思うけど薬、毒、媚、脳洗、の一つを感じしたら自爆、威力は国家破壊クラスを想定。取り敢えず最低30分稼いで無理そうだったらやられたフリしてトンズラしよう」

おっ、あつたあつた

そう言つて少女はお目当てのものをポケットから取り出す。

金の装飾が施された長さ3メートルほどの異様に長い真紅の竿

一千年前に誕生し、今もなお帝国最強の超兵器として君臨する

少女が普段は使うことのない帝具<sup>ゴミ</sup>



## XII

チエルシーは革命軍情報局からの直接の依頼で4日ほど前から普段のチームのメンバーと離れ、帝都に潜伏することになった。

情報局が言うに帝都内にいる密偵と連絡が一切取れなくなった、おそらく帝国の人間に捕まったと思われるので新たに革命軍から密偵を任命、派遣するまでの5日間の間帝

都で密偵の代理をしてもらいたい、と言うものだった。

隠密を得意とするチエルシーからしてみればこの手の依頼は珍しくない、密偵からの連絡が一斉に取れなくなったのは少し珍しいが無いわけではない。革命軍も組織として大きくなってきた、その分帝国も革命軍に対して強い警戒を持ち始めているのだから。

普段の暗殺とは違った楽な任務。

後任がつくまでの間の時間稼ぎ。

ただ町の様子を調べる楽な仕事。

(どこか適当な宿屋探して帝都見学でもしようかなー)

そんな事を考えながら普段よりも軽い足取りで帝都の門をくぐった。

そして1日もしないうちに後悔することになった。

門をくぐった先はチエルシーの知らない世界だった。

とは言っても門の先が科学と魔術がしよっちゅう交差する馬鹿みたいに高いビルや風車が建ち並ぶ人口の9割が学生の世界であったとか島国の半分以上を人を食い殺す巨大な蟲が跳梁跋扈しその巨大な蟲を倒すために常に常住戦陣する武士がラツキースケベとシリアスを繰り返す和の国であったとかでは無い。

街並みの殆どがチエルシーの知っている帝都であったが中身が全くもって別物だった。

まず最初に目に入ったのが門をくぐつてすぐの所で直立不動の姿勢を保つ男。肩まで伸びた長い髪を左右を真つ二つにするかのようにバリカンで刈り、帝国でもあまり見ない逆モヒカンという髪型の男が二の腕を組み門から入ってくる人々をギロリと睨みつけていた。その鋭い眼光はあまりの威圧感により敵兵の戦意を削ぐといわれ、出陣した戦場では常に勝利をもたらす。革命軍でもどうかしてこちらに取り入れようも模索している人物の一人、反大臣派でありながら未だ存命のミカン将軍。

(普段は西の異民族と戦つてるミカン将軍が何で帝都に!?!?)

よく見ると至る所に武装した兵士たちが待機していた。

とあるカフェでは近々革命軍と合流する筈だったナカキド将軍が兵士たちと共にサンドイッチを頬張つていたり、少し離れた場所ではヘミ将軍が部下数名を叱りつけていた。

あまりにも変わりすぎていた光景に目を奪われたチエルシーはついつい周囲を見渡ししてしまう。

「ツツ——!?!」

敵を見つけた危険種のような血走った目のミカン将軍と視線が合う。

チエルシーはすぐに自然な形で目を逸らし相手に違和感を感じさせないように女の子の足取りでその場を離れる。

一瞬とはいえ鷹のような鋭さを持つミカン將軍と目があつてしまった事に後悔し、気持ちを切り替える。

いかにも『はじめの帝都で右も左もわからない』女子を演じ近くのスイーツショップに視線を移したと思えばすぐに隣の洋服屋へと視線を向ける。

面白そうなものを見つかれば視線を移し近くまでよる、また別の面白そうなものがあればそちらに近づく、早鐘のごとく鳴り打つ心臓を抑えながらそれを繰り返しチエルシーは門を後にした。

門を後にしたチエルシーがたどり着いたのは帝都のメインストリートだった。いつ

も通り人でござった返していが、しかし道行く人々の顔はチエルシーの知っているいつも通りではなかった。

(いつもなら表情暗い人が多いのに……)

「さあさあ、寄つてらっしゃい見てらっしゃい。並みの危険種じゃあ傷一つつけることのできない頑丈なロープ、そこのお兄さん一本いかが？」

「キョロクの西瓜、一個銀貨3枚！安いよ！今なら縄一本つけちゃうよ！」

「ひーもひもひもひーもひもー、ひーもひもひもひーもひもー、ひーもひもひもひーもひもー、ひーもひもひもひーもひもー……」

一部除いて活気に満ちていた。大臣による恐怖政治が人々の生活を苦しめている帝国で商人がこんなにも活気付いている場所はチエルシーが知る限りキョロクくらいだ。

取り敢えず何か冷たい物が欲しい、常に棒付きキャンデーを口に加えてはいるが今はこの人だかりで発生した熱をなんとかするものが欲しかった。

頭の中で帝都の地図を思い出し自分のいる場所を把握する。

そして近くに冷たい甘味が有名な店があつた事を思い出す。

目的地をそこに決め、人混みをかき分け、

3人の黒服に囲まれてながら店の甘味を楽しみつつ店主と雑談をしている青に近い水色の髪をした長髪の女性を見つけ

華麗なUターンを見せ、喉の渇きを潤せないまま帝都メインストリートを後にした。

先程見たものが夢であったと願いながら現実是非情である事を改めて知ったチエルシーが次に訪れたのは貧民街であった。

ここはいつもと変わらず雑草根性丸出しの賑やかさがあつたが普段は至る所にいるゴロツキが全くもって見られなかった。

歩きながら聞き耳を立てていると『警備隊がゴロツキから子供を守ってくれた』とか

『町の治安が良くなった』とかの話は聞き取れたが門の近くにいた兵士たちによる戦争の準備だとか帝都近郊に出た凶悪な危険種を討伐するとかの話は聞こえなかった。

太陽が西に傾き、帝都に夜がやってこようとしている時、チエルシーは一人公園のベンチに腰を下ろし熱心に何かを書いていた。

いや、正確には書いては乱線がかき消し、また書いてはかき消しての繰り返しだった。乱線だらけになった紙をぐしゃぐしゃにして潰し、チエルシーは呟いた。

「どうせ信じてもらえない……」

ため息交じりのそれはチエルシーの内心を物語っていた。

帝国の將軍ほぼ全員が帝都に召集された。

理由に依っては信じてもらえる。

エスデス將軍が帝都にいる。

エスデスならありえる。



しかし

帝都の治安が良くなっている。

帝国の帝具使い全員が集められている。

宮殿を囲む壁の一部崩壊。

歴代最高額の黄金10万の賞金首の存在。

宮殿上空の危険種の数が増減している。

悪徳貴族の大勢が捕まった。

これらはどう考えても信じてもらえない。

むしろ大臣が死んだ、と伝えた方が信じてもらえるのではないかと思うがあの大臣が死んだとは到底思えない。

夕日が完全に沈み周囲の電灯に明かりが灯る。自分がこの公園に来てかなりの時間が過ぎたのを感じた。ベンチから立ち上がり、どこか泊まれる場所を探そうと公園を後にしようとする。

「あの、」

不意に声をかけられた、チエルシーはゆっくりと振り向く。

相手は若い警備隊の男だった。

かなり疲れているのか目の下にはくつきりと真つ黒なクマが出来上がっていて、それが不気味さを醸し出していた。

「はい、何でしょうか？」

チエルシーは不気味な警備隊の男に警戒をされないように自然体を演じる。もし、自分の正体がバレたのであれば目の前の男を殺して直ぐにでも逃げないと。

「このぐしやぐしやの紙、貴方のですよね？ポイ捨てはいけませんよ」

チエルシーは一瞬ポカンとするが先程自分がぐしやぐしやにした紙の事を思い出す。そして自分の正体がバレてないことに安堵する。

「あはは、すみません以後気をつけます」

チエルシーは自分の正体がバレる前に目の前の男がもっている紙を取り返そうとする

が

男はぐしゃぐしゃの紙を広げて乱線がかき消された文章を見てしまった。

男が笛を自分の口につける前に一気に距離を詰める。懐に隠し持っていた7センチほどの細い針で男の頭を突き刺す

「しまっ、『ピイイイイイイ』」

夜の公園に警備隊の笛がこだました。

そして現在に至る。

## X I I I

チエルシーは現在、帝都で一番大きい公園に潜伏していた。数日前自分の失敗のせいで帝都警備隊に追われる身になり周辺では手配書が発行され、近衛兵も周囲を警戒しているほどだった。

しかし現在までチエルシーが警備隊の目から逃れる事が出来たのは彼女が持つ帝具、  
“変身自在” ガイアファンデーションがあつたからだろう。

彼女の帝具ガイアファンデーションは無機物有機物に問わず持ち主をあらゆるものに変身させることのできる化粧品型の帝具で自分より大きいものにも小さいものにも変身できる。

そして今彼女が変身しているのは木である。

帝都のこの公園ならさして木は珍しくない、一本増えたところでさして違いに気付く

ものはいない。

しかし警備隊にバレなかったとしても不眠不休でほぼ飲まず食わずはきつかった。変身を解除しようと周囲を確認すると必ずどこかしらに警備隊の姿が見え変身は解除できなくなり、粘り強く警備隊の姿が見えなくなるのを待ち続けた。

警備隊の姿が見えなくなり周囲を見渡す。

数日前、少し降った雨で喉を潤していろいろ何か飲んだ記憶はない。食べ物といったらガイアファンデーシヨンの箱の中に入れておいたキャンデーをバリバリと噛み砕いて食べたことくらいだ。ふらふらの状態で再び周囲を確認する。誰もいない事を確認し少し体を休めるために近くの木に体を預け眠ることにした。

ドゴオン      バゴオン      ドザツ

三つの馬鹿みたいにデカイ音が聞こえ寝ていたチエルシーを一気に覚醒させた。音を一切立てることなく起き上がり周囲の状況を確認する。

太陽が未だのぼりきっていないことから時間帯は朝である事を確認し、身を伏せる。

ズドオオオオン

地面が大きく揺れ、巨大な岩が勢いよく地面に落ちたかのような音が辺りに響いた。

そして嵐のような暴風がチエルシーの体を吹き飛ばした。巨大な質量を持つもの同士がぶつかり合う音が響き渡り、その都度都度、人の体を吹き飛ばすほどの爆風が巻き起こる。チエルシーはなんとかして近くにあった木の枝にしがみつくが、その木が地面ごと離れてしまうためどうしようもなかった。しかし数秒後には地面から離れた木やえぐれた大地や粉微塵に砕けた岩石は時間を巻き戻したかのように元のあった場所へと戻って行った。

岩石は土の中に潜り、巨大な木が宙に浮き土がその根を埋めた。吹き飛ばされた木々の葉は規則正しく自分の元いた場所へ戻っていく。

数日前自分が座っていたベンチは原型を留めていなかったが空中で木片が集まると元あった場所へと戻っていった。

そして再び吹き飛ばされる。

今度はあまりの風圧の勢いで木にしがみついている余裕は無く、その体一つが宙に浮かんだ。

鳥類に変身しようにも上下前後左右から荒れ狂う風のなか飛べる鳥類に心当たりは無い。心当たりがあつたとしても、目も開けられないほどの暴風で小道具が多いガイアファンクションなど使える訳がない。

何も出来ないと思つたチエルシーはせめて情報だけでもと思ひ、なんとか目を開ける。

そして見てしまった。

バゴオ      ガガガガガ

ギユオ

バツ

ブウンンン                    ピチュン                    ドガゴガゴ

ドドドドドドドドドドドドド

ベヤギ                    ジャギン                    ビギイ                    ザシユ

ズビユン                    ガリユン                    ビシユーン

ザザザザザザザザザ

ドゴオン                    ガゴオン

ドスツ

ズシイツ                    グラツ                    パラツ

ガシイ

ズウドオオン

バゴオ

帝都内部で尋常じゃないほど手配書を撒かれている男と自分よりも背の低く腕も脚も細い華奢な肉体をした浅葱色の髪の少女が真つ赤な竿に二匹の蛇が巻きつくようにデザインされたものを使ってこの嵐のような現実を起こしている事を。



（ーははは、これはきつと夢だわ。やっぱ私疲れてる。目が覚めたらきつといつもの場所です目を覚ますはず）

数日、飴以外のものを食べていない空腹や水もろくに飲んでいない事による喉の渇き、顔にちよくちよく当たる細かい砂粒や土の匂い、風で今もおめくれ上がっているスカートに対する羞恥心。

それらを全て夢だと思い意識を手放したチエルシーは突然誰かに抱きかかえられ、公園の中から姿を消した。

その数十分後、バリインというガラスの割れるような音が辺りに響き、帝都一広い時計塔広場は帝都一広い荒地に変貌した。

A M

08:35

サイタマ 帝都時計塔広場

突破

X I V

『らせつよんき』

この言葉を聞いても帝国の臣民の9割がなんと事だからわからないだろう。らせつ、という単語から動物か植物かはたまた食べ物か想像は出来ない。強いて言えば、よんきのよんという単語から何かが4つあるのだとは想像ができるだろう。

知ったかぶりだったら『ああ、らせつよんき、あああれね、知ってる知ってる…』と

でも言うのだろうか。

では残りの1割に聞いてみよう。

『暴力の化身』『悪魔』『バケモノ』『変態集団』『鬼』『悪鬼』『弟子』『いつか実験したみたい』『大臣暗殺の際の最後の関門』『地獄の処刑人』『帝具使いよりも警戒すべき相手』『武術に優れた暗殺者』『隠密を得意とする鬼』『いつのまにか背後にいる幽鬼』『大臣お抱えの秘密兵器』『人間殺戮マシン』…

羅刹四鬼

真の名は『皇拳寺羅刹四鬼』

### 皇拳寺

帝国最高の拳法寺であるその場所は古くから帝国臣民と密接な関係にある

少し裕福な家庭であれば息子や娘に護身術を習わせたいと思ひ皇拳寺行かせるほどだ。そこでお金を払い基礎的な護身術を優しく学び家に帰る。

皇拳寺の有段者であれば帝国軍に採用されやすい、そう聞いて皇拳寺にやってくる者も大勢いる。少し力の強い少女や帝都で一旗あげたい少年、田舎の方では強いと言われているおっさんなど様々なものが集う。

しかし皇拳寺そんな奴らには優しく無い

初日から百人組手、永遠と続く座禅、雑巾を使った寺の清掃、先輩後輩の絶対の関係、段保持者の上下関係、絶対遵守の戒律、それらが夢を見ていた者たちの目を覚ます。

吐くほどの練習をしても実力の見込めない者は技一つ教えてもらえない、何十年も皇拳寺に通つてやっと初段になった者だつて大勢いる。

やつてられつか、そう言い放ち皇拳寺を後にする者は後を絶たない。

才能のあるがゆえにはどんどん上の段位に上がり皇拳寺の秘術を多く学ぶ機会が与えられるものもいる

そして

絶対遵守の戒律を破り皇拳寺を破門にされる輩もいる。

皇拳寺で習つた護身術のお陰で命が救われたと言う臣民は多い、逆に皇拳寺を破門にされた有段者が暴威を振るう事件はさらに多い。

そんな帝国臣民にとって毒にも薬にもなる皇拳寺。

その奥深くに羅刹四鬼はいる。

今は大臣に雇われて各地で暗殺や護衛などを行なっているが昔は破門された有段者が暴れ回り皇拳寺の品位を下げる者を殺す事を専門とする集団だった。

羅刹四鬼の強さを証明するこんな話がある。

『羅刹四鬼に追われたものは

必ず死が待っている

5 以下は無知、侮り、挑む

6、7 無謀、遊ばれ死ぬ

8、9 逃亡、恐怖に怯え

師範代ならわかるだろう？

自ら膝を折り頭を垂れろ

自分の行いを後悔せよ

さすれば苦痛の無き死が待っている』

昔、百人組手に顔を出した羅刹四鬼の1人がいつぺんに100人を相手にした事がある。そして全員を瀕死の状態に追い込み、当時調子に乗っていた有段者の集団をたしなめた。

しかし、羅刹四鬼の強さはそれだけでは無い。

足音を立てない歩行術

飛ぶハエの目玉を爪楊枝で突き刺す胴体視力

数時間息継ぎ無しで水中に潜むことのできる潜水能力

相手の呼吸の仕方、足運び、目の動きその他諸々で相手の実力を図る観察能力  
数えればきりが無いほどの能力

それら全てが備わっているからこそ羅刹四鬼なのだ。

だから羅刹四鬼は強い。

だからこそわからなかった。

この男の強さが

一般人と同じ呼吸、武道のぶの字も知らないような足運び、落ち着きのない仕草、どれをとつてもザコだ。

唯一の警戒するべき点は服の上からでも分かる筋肉だろうか、だとしても皇拳寺の有段者にも劣るのではないかと思うほどのものしかなかった。



(だけどこれは、)

(明らかに…違う、)

(例えるなら、服)

(好きになる以前に引くは…)

スズカ、メズ、シユテン、イバラは直に触れることで理解した。自分たちが戦おうと  
していた存在のデカさを

そして理解できなかった。

自分たちが4人がかりで抑え込んでいる男が危険種ではなく1人の人間であるとい  
う事に。

## XV

「久しぶりにいい運動になったな」

そんな事を呟きながらサイタマは体についた土を払いつつ歩く。先程の少女、名前は聞いていなかったが今まで戦ってきた中でかなり強いということがわかった。

（殴られた時、久しぶりにうっ、ってなったよな。結構痛かった…）

そつと殴られた箇所を触る。もう既に痛みはないがタンスの角に小指を三連続でぶつける程の痛さだったのを覚えていた。

（あと、殴った時に殴りきれなかった？のがわからん。あれがバングの言ってた受け流すってやつなのか？）

正確には彼女は殴られた時の勢いの9割を地面の奥深くに拡散して自分のダメージを軽減させていたのだが、サイタマはそこまでの事はわからない。

フツ、とサイタマは笑みを浮かべる。

久しぶりに戦いの中で感情が湧いた。

自分にはまだ戦いの中で感情が沸くことがあったのか、そう思わせてくれる一戦だった。

『透視、結果。隠し武器特に無し。やれ』

ふっと、前から声があると急に周りが見えなくなつた。

お金が無くてお先真つ暗的なのもや無く物理的に見えなくなつた。何かが身体中を締め上げているのだろう。動けないこともないが首や口元を押さえつけられているため少し息苦しい。

サイタマはそう思うと直ぐに左手で首元を右手で口を覆っている何かを掴み一気に引き寄せそれを何か確認する。

「いたたたたたつ、髪引つ張んな」

「なんて馬鹿力だッ」

「イイ！スゴくイイッ！」

「チッ！」

なんか4人いた。

1人は褐色の肌で道着の下にある下着代わりの白いビキニが丸見えで頭に蹄鉄をつけた小柄な少女。

もう1人は腰に酒と書かれた壺をさげている髭が異常に長く後ろで髪を三つ編みにしている筋肉質で上半身裸の大男。

異様な声を出したのは顔に大きな切り傷のある4人の中で唯一のまともに服を着ているが一番まともじゃ無い顔をしている黒髪ポニーテールの女。

ボクサーが履くようなパンツ以外他には何も着ていない4人の中で最も露出度が高く両目が何故か黒く染まっている大柄の白髪男。

4人は足を思いつきり地面に突き立てていた、地面のタイルが割れて大地にめり込むほど、しかし4人のそれを無視してサイタマは一気に引っ張った

足が地面から抜け一気に男の元へと体が引つ張られる。  
サイタマの元へと瞬きのする暇もなく引き寄せられたのだ

え、？どうすればいいの？これ？

引つ張った方であるサイタマはそう思った、しかしサイタマはある事に気がつき次の行動に移った。

4人はやばいと思つて自分の髪を手刀で切ろうとする。しかしそれよりも早く、4人の鍛え上げた洞察力を持つてしても捕らえられないスピードで男の拳は振るわれた。

ドツ　ドツ　ドツ　ドツ

本来であれば腕を前に出し殴られる前に防御をするのだが

(はい！)

(重いイ!??)

(らめえええええええ) ブシャ——

(な!? バケモンがッ $\boxtimes$ )

意識は間に合う、しかし体が余りにも遅すぎた。脳が体に命令を送ろうとした瞬間、腹部あるいはアゴあるいは胸あるいは頬に強烈な一撃を食らう。

息を飲む暇もなく羅刹四鬼は勢いよく四方八方に飛んで行く。

額に巨大なボールのようなものをつけた人間を巻き込んで。

ピエロの服装をしたデブを巻き込んで。

80年代の臭いがプンプンするバニーガールのような姿の眼鏡っ娘を巻き込んで。

胸の部分が満月のように大きく丸く空いた服を着ている黒髪のおかつばの男を巻き込んで。

赤や青、緑や黄色の色鮮やかな魚が積まれた店へ

長さも太さもバラバラなロープが売ってある店へ

小洒落たカフェへ

甘という字が暖簾に書かれた和風の店へ

飛んで行く。

「はぁ はぁ はぁ、すうーう、はー」

サイタマは切れた息を落ち着かせるために大きく深呼吸をする。先程の出来事のせいで身体中の血液が一気に頭に上がったのではないかと錯覚させらほどだった。

そして確かめるようにして自分の頭を確かめる

(希望はまだある

筈)

A M  
0 9 : 0 0

サイタマ帝都メインストリート移動中



## 砕く

誰かが言つた

どんなに強い相手でもその数を持つて勇猛果敢に襲いかかり  
橋を作り大河を渡り

梯子を作り大樹を登る

鋭い牙をもつて肉を裂き

強靱な顎をもつて骨を砕き

常に大群で行動する

蟻あまがいると。

その種は生物の体に寄生すると、宿主の血肉を栄養源とし脳にまで根を生やす。

脳にまで回った根は憎しみと興奮の回路を刺激し、宿主に周囲のもの全てが憎しみの対象となるように見せ、自分以外の生きとし生けるもの全てを殺すまで止まらない殺戮マシーンにする。

殺戮マシーンとなり理性を失った宿主は自分以外の全ての同族を殺し、食事や睡眠を一切とらずただ淡々と自分の殺した死体を積み上げるだけの傀儡となる。

宿主の死を悟った植物は積み上げられた死体の下にその身を隠す。

そして死体の血肉を全て吸い上げ血のように真っ赤な花を咲かせる植物がいると

世はまさにグルメ時代、未知なる味を求めて死の淵を彷徨う時代。



## XV

## 帝都宮殿北門

そこには杖を持った1人の男がいた。

歳は40を過ぎ、無精髭を生やした藤色の着流しを着ていた。持っている木の棒に体を預け、そこにいた。

男の背後には宮殿の門があり本来ならば多くの警備員が厳重な警備をしているのだが、しかし今は警備員は

いや、決してはならない

いた場合、男の攻撃に巻き込まれてしまうからだ

「グラビドン  
超重力」

男がそう言った瞬間 音もなく男の目の前にあつた全てがペしゃんこになった。

し  
街灯はストローを無理やり潰したかのように歪な形になり、周囲にガラスを撒き散ら

木材で出来た家屋は全て潰れ、木片は辺りに散乱することなく無理やり圧縮され  
大理石で出来た建物は周囲にその破片をばら撒いてはいるが殆どがほんの小さな石

つぶほどのサイズとなった

整備されていた石畳も所々割れ、破損していない石畳は一枚も残っていないかった。

「少しやり過ぎちまったかのう」

男はそういつて頭をかこうとした手を止める。最近になってやっと自分の髪の毛が薄くなり始めているのに気がつき頭をかくのをやめようと決めていたからだ。流石にこの歳で禿げるのは嫌だ。ただでさえ視力を失ったのに髪まで失うのは勘弁して欲しい。

後ろから近づいて着た四人の気配を感じ男は木の棒で体を支えながら宮殿の敷地内に入っていった。

「舞台は作っておきました、もし貴女が負けるようであれば、あつしができます」

「ああ、すまないな」

男とすれ違う様にして宮殿の敷地内から出てきた四人は満面の笑みをうかべ、歩き始めた。



同時刻

宮殿地下

シコウテイザー保管庫

そこには2人の人間がいた

分厚い本の山、巨大なピーカーや緑色の液体が入った巨大な水槽、特殊な金属でできた機械、真っ赤なレンチ、なぜか紫の液体が溢れ出る石、常に形を変え続ける黒いモヤ、蛹の中の繭のように体を丸める異形の生物、乱雑に置かれたそれらに二人は囲まれていた。

「はあ はあ はあ……遂に完成したわ」

「ああ、妾の錬金術とスタイリッシュの科学力、この2つが無ければ決して完成などしなかったじゃろう」

男の方は額に浮かべた汗を拭くと近くにあつた赤い一人用のソファアームに力なく倒れる。

女の方は足元に散らばる大量の紙の上に寝っ転がり大の字になる、手足をばたつかせているところが少し子供っぽい。

Dr. スタイリツシュ

帝国一とも呼べる圧倒的なゲイ臭を放つも、帝具・パーフェクターを操り、圧倒的な科学力で「スタイリツシュの追求」に勤しむ、医師兼科学者。

ドロテア

西の王国随一、のじやロリBB Aうさ耳リボン人体改造に高飛車というキャラ要素でんこ盛りでありながらも、食事をいっぱい取ることで大食いキャラを得ようと奮闘している錬金術師

2人とも普段の生活から疲れとは縁の無い人物である。しかし2人の顔には疲労の色が見えた。

スタイリツシュは普段なら欠かさないヒゲのお手入れを忘れ、汚れたら直ぐに着替え



る服もススだらけでところどころ黒く染まっていた。

ドロテアも服の至る所がススだらけで何度か食事を忘れかけ、そのため何度も騒ぎを起こしかけた

それほどまでにシコウテイザーは2人を熱中させた。

自分の知らなかった錬金術

祖国には無かった科学

科学では決して埋められない溝を錬金術で埋め、錬金術では超えられない壁を医学で跳び越え、医学では成し得ないことを魔導で成し得た

互いに互いを高め合った

スタイリツシユはドロテアに自分の全てを見せた、人体実験、兵器、毒薬を、ドロテアはスタイリツシユに自分の全てを話した、錬金術、召喚術、魔導を

そしてそれら全てをシコウテイザーに詰め込んだ

科学の完成、錬金術の極致

最高の技術力、摩訶不思議な魔術

2人は思った

(はやく、コレを試したい)

(あとお風呂入りたい)

X  
V  
I

---

目は口ほどに物を言う、これはまぎれもない事実だ。  
だから、目を見れば相手の言いたい事はだいたい理解出来る。

もちろん全ての人間が目を見ただけで相手の気持ち全てを理解できるわけではない。純粋な瞳の裏にはドス黒いものを隠し相手を油断させる人だっている、逆に鋭い目つきで厳つい人でも実際は誰よりもピュアな心の持ち主だっている。

しかしどんなに上手く隠しているつもりでも見破るのが得意な人には簡単に見破られてしまうものだ。

エステスは人の目を見て内心を見破るのが得意な部類の人間に当てはまる

だからこそ、エステスには理解出来なかった。

あの男の目が

部下たちの自分を信頼する目

強者たちの覚悟を決めた目

蹂躪を楽しむ勝者の目

弱者の絶望しきった目

戦いを楽しむ戦闘狂の目

それらのどれにも当てはまらない

(なぜだ、なぜ私をそんな目で見る)

楽しさも、スリルも、憤りも、興奮も、嬉しさも、心地よさも  
そんなもの一切感じさせない

(やめろ、そんな目で私を見るな)

相手の全てを見透かし、それでいて価値が無いと相手に理解させる

(そんな、呆れた目で私を見るな)

男の瞳は空虚なものであり、エスデスとの戦いを価値のないものと語っていた。



「なあ、嘘だよなあ？」

空高く舞う4つの影を遠くに、70万の兵士の1人が呟く。しかし誰も答えない。

皆、その光景に釘付けになり、誰一人として返事をする余裕が無かったのだ。

巨大な氷が砕けるような音がして青い流星が天に昇り厚い雲の中に消え、見えなくなると兵士たちは一斉に騒がしくなった。



「え、エスデス將軍が負けた？」「あんなもん、人間じゃねえ」「うそ、だろ、」「もうだめだ、おしまいだ」「ブドー大將軍だけでなくエスデス將軍も…」「三獸士までもがっ!?」「帝具使い四人相手にしてエ、」「勝てるわけがない」「あばばばば」

西東南の門に配備されていた將軍9名

その配下の兵士、計18万

各帝都内駐屯地に待機していた兵士、計42万

帝都近郊の駐屯地に待機していた兵士、計10万

約70万の兵士

歴戦の勇者である將軍に

將軍直属の精鋭に

体に老いを感じ始めた老兵に

今回がはじめての戦いの新兵に

恐怖という名の大きな波紋を生じさせた。

もし彼らの敵が彼らの受けた報告通り人間であると確証が持てたならば、彼らはまだ立ち向かう勇気がでただろう。しかし、北門を突破、複数名の帝具使いと交戦、帝国最強エスデス將軍率いる三獣士を屠った相手が単なる人間であるなどという現実は、彼らにとって到底受け入れられなかった。

日々鍛錬を積み、己を限界まで高める事で人は強くなることができると。しかし力の無い人間も武器を持つことで鍛錬を積んだ人間を容易く屠る事ができる。

その武器の最高峰であり、所有者に一騎当千の力を与える帝国最強の武器。

それが彼らの知る帝具だ

その持ち主たちをいとも簡単に吹き飛ばした人間は、果たして人間という枠組みの中におさめて良いのだろうか。

「ワシは逃げる、帝国の將軍なんぞやってられっか」

カランという音と共に少しふくよかな將軍が金切り声で叫んだ。自らの劍を捨て、兜を放り投げ、少しでも身を軽くし、全力で逃げ出した。

敵前逃亡は死刑である、その將軍が部下たちの士気を無理矢理向上させるために使っていた言葉だ。

そんなことを言っていた人間が武器を捨て一心不乱に逃げ出した。つまり逃げてはいけないという環境が無くなったという事だ。兵士たちは將軍の行動をそう捉え

「おっ、俺は逃げる」「お、俺も逃げるぞ！」「もともと今の帝国にはうんざりして、た、んだ」「逃げるんだ」「兵隊になるんじゃないかった」「ひゃー」「うああああ」「ママ」「どけっ、俺が先に逃げるんだ」

將軍と同じように一心不乱に逃げ出す…

圧倒的な暴力を前には統率は意味をなさない

暴力により恐怖が生まれ、

生まれた、恐怖は伝染する

この人数ならまだ勝てる、そう思っていた兵士は確かにいた。しかし1秒ごとに逃げる人間が増えていく状況でこの人数ならまだ勝てる、という安心感はあるという間にすり減っていく。

立ち向かう勇気があったものたちは、自分とすれ違う形で逃げていくものたちの恐怖に歪んだ顔を見て、立ち向かおうという事が愚かな事であると悟り、逃げ出す。

歴戦の勇者である将軍も自分の周囲にいる人間全てが恐怖に陥っている状況であればその環境に呑み込まれ恐怖状態に陥ってしまう。

最終的には70万の人間全てが恐慌状態に陥り、軍としての規律、機能を完全に停止

させた。

そして兵士たちの周りを甘い香りが包んだ

「流石に70万ともなるとけっこう力使うわね」

70万の軍勢は逃亡を辞めた、1人の女に対して全員が跪いて頭を下げた。

「はいはい、みんな言うこと聞いてね、帝国のためにその命を投げ打つてでもあいつを倒すように」

女は指を指す、その先には兵士たちが逃げ出そうとしていた方角とは真逆の方向

圧倒的な暴力が振るわれていた場所

その指先を全員が見たのと同時に70万の軍勢は一気に駆け出す。時には前にいる兵士を全力で押しつけてでも走る。中には後ろから押されてバランスを崩し転倒するものも現れる、自分の上司や先輩、後輩が転んだとしても誰一人として気にせず踏みつける。

本来であれば踏みつけられた人間は鎧の鉄と肉が混じり合った塊となるかもしれないが、密集した人混みの中臭いが充満し濃くなったその場所にいた人間は無理やり立ち上がり唸り声をあげ、走り出す。

その姿を遠目で見ながら純白のマタニティードレスを見にまどった女は手元にあるピンクの香水瓶をそっと優しく撫でる。

びしゅうばんそう  
美臭万操 フエロモネア

彼女が使用するのは香水の帝具

この香水を吹きかけられた人間は体の新陳代謝がよくなり、自由自在にフェロモンを出す事ができる体になる。またこの香水の拒絶反応は全身の毛穴の至る所から血が出るというもので、接近戦で戦う場合は相手にこれを吹きかけ相手のからだから血が全部吹き出るのを見て終わりだ。

先程この女が発したのはフェロモンを合わせた臭い

普段通りであれば70万人もの大群を操る事は出来ない、しかし恐慌状態になり臭いが充満する無風の密集状態であれば70万人を操る事はそう難しい事ではなかった。

「さてと、あいつらがあの男をボコボコにして身動きが取れなくなった所で私の奴隷に



しようと思うのだけれど、まあじっくり歩きながら行こうかしら？」

女はゆつくりと優雅に歩く

近い未来強力な手駒が1つ自分のものになる事を夢見て

この国を牛耳るのが、自分になる事を確信して

人をこんな目に合わせたあの豚野郎を殺せると思つて

背後に迫り来る開ききつた巨大な口、錆びた鉄の臭いを彷彿とさせる液体がついた鋭利な牙、彼女を覆い隠すほどの巨大な影が迫っていることに気がつかずに

夢を見て、確信して、思つて  
女の意識はそこで途切れた



サイタマは歩みを止めない

目の前に現れた大柄な黒服の男

右後方の建物から現れた、中肉中背の黒服の老人  
背後から飛びかかってきた、小柄な黒服の少年

目の前に迫り来る斧を左手の人差し指と中指で挟み

迫り来る水龍を軽く握った拳で跡形もなく吹き飛ばし

背後から攻撃はあえて受けるが、頭に少し衝撃がきただけで痛くも痒くも無い。

空いた右手で斧を取り上げ何処か適当な壁に投げつけめり込ませ、目の前の大柄な男を軽く上空へ吹き飛ばす。頭を連続して殴りかかる少年には大柄な男と同じように軽く腕をふるい、空を飛んでもらう。

真上から降ってきた巨大な氷塊を軽く腕で防ぐ。ガツと氷塊の表面に指がめり込む

ほどの力で掴み、投げて来たであろう女に向かって勢いよく投げ返す。

音速を超えた氷塊は、空中に自らの破片を置いていきながらも投げてきた女に向かって飛んで行く。女はその氷塊をギリギリの所で回避し、今度は大小様々な鋭く尖った氷の塊を連続してサイタマに向かって放つ。

1つ1つが1メートルあるか無いかの氷、その氷は並みの剣を凌ぐほど鋭利さを感じさせ人の肉など容易に貫き通す鋭さを持っていた。氷の弾幕とでもいうのだろうか、空中に現れたそれらはサイタマに向かう精度もさる事ながらその数、10000はくだらなかつた。

(あつ、これ受けたら服が破ける)

そう思ったサイタマは氷の隙間を無駄な動き多めで回避して女に近づく。

毎秒毎秒数千発放たれる女の攻撃をあからさまに迷惑そうな顔をして、さも女の攻撃が無駄であるかを理解させるかのように。

女は後退しながらも攻撃の手をやめない、サイタマに氷の弾幕が当たらないと分かる  
と目の前に巨大な氷の城壁を作り、その上で先程の数倍あるもの氷塊を瞬時に創り出  
した。

サイタマは目の前に現れた氷の城壁に一瞬目を奪われるが、すぐさま自分の上に落ち  
てくる氷塊に目を向ける。

走り出していた足を止め、落ちてくる氷塊を先ほどと同じように軽く握った拳で殴り  
粉々にし、

その瞬間女によって氷漬けにされた

女はサイタマが氷塊に集中しているうちに距離を詰め、壁を壊しサイタマを近くの地  
面ごと氷漬けにしたのだ。

しかしサイタマは氷漬けにされた体を無理矢理動かし、氷の中から脱出する。

女は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ自分の剣、サーベルを抜く

しかし女が何をする前にサイタマは一つ溜息をして。一瞬で距離を詰め軽く腕を振

るい、女を先ほどの3人同様、空に吹き飛ばした。

サイタマは再び歩み始める

「正義一斉射撃!!？」

斜め上から何かが一気に近づくのを感じたサイタマはそれを掴む。ハンドボールほどの巨大な弾丸そして

ドドド

ドドド  
ドドドド

空気を切り裂く音が数秒聞こえ、次の瞬間には雷鳴にも似た爆発音が轟く。

弾丸の後に続いてやって来たのは何十発もの小型ミサイルだった。先ほどの氷塊よりも命中精度は高くないらしく、それら殆どがサイタマの周囲の地面にめり込み爆発し、砂埃を巻き上げる。

直撃したのは2、3発だったろうか。

しかしそれはまだ止まらない。

鳴り止まぬ砲戦、爆発によって吹き飛ぶ大地、ズズズツという鈍い音と共にバランスを崩し倒れる建物、土煙を吹き飛ばしたかと思えば爆発により新たな土煙を巻き上げる。

そんな状態に1分ほど続いただろうか

サイタマは倒壊した建物の瓦礫の下敷きになった

その姿を宮殿の壁の上から望遠鏡で見ていた少女は満面の笑みを浮かべる、しかし自分の相棒が持っている探知機の反応を見て驚愕する。

そして視線を探知機から未だ土煙が立ち込める瓦礫の方を見る。カラカラという瓦礫のカケラが落ちる音が聞こえるが到底人間が生きているとは思えない。しかし探知機には男が生きていると反応がある。

「しづとい悪だつ、コロ、6番」

そうやって少女は相棒の名前を呼ぶ、コロと呼ばれた子犬は急激に体を巨大化させると少女の上半身全てを飲み込んだ



ズリユリユリユリユ

そんな気持ちの悪い音と共に少女はコロの口の中から自分の上半身を引き抜く。引き抜いたその手には少女の身長の数倍はある巨大なミサイルがあった。

「悪は死ねええええええええ」

少女はそれを躊躇いなく男が埋まっているであろう位置に向けて発射する

ドオオンという腹の奥底までに響く音を放ちながらも空気を切り裂きながら巨大ミサイルは進んで行く。

一瞬にも満たない時間で巨大ミサイルは男が埋まっているであろう場所についた。

少女はその瞬間歓喜に包まれる

これでまた一人悪を倒した。

自分の正義が悪に勝った。

この調子でどんどん悪を倒さないと

ズンツ                   バシイン

何かを思い切り蹴り上げる音が聞こえ、その数秒後遙か上空で巨大な爆発音が響く

そして瓦礫があつたはずの場所にはクレーターができ、自分の背後には巨大な死が迫っていた

後ろを振り向こうとするが間に合わない、距離をとろうにも宮殿の壁の上には逃げる場所などない。

「コロ！おくのて狂化」

首にとてつもない程の負荷がかかり少女は気を失った。

X  
V  
I  
I



サイタマは歩みを止め、目の前にいる犬を見る

先程まではサッカーボールほどの大きさだった子犬が一瞬にして巨大になった。腕の太さだけでも先ほどの巨大ミサイルほどあるだろう、その腕を使い倒れた少女を右手で優しく抱え、左手を思い切り振り上げ、勢いよく足下に打ち付けた。

打ち付けられた箇所はいとも容易く崩壊し、重力に従って落下する。高さ数百メートルから地面へ命綱無しでのダイブによりサイタマは体制を立て直すことなく頭から地面に落ちて行く。

ドゴオン                      ドスン

サイタマは起き上がろうとするが犬はそれを許さない。抱えていた少女を優しく地面におろし一緒に降ってきた壁の破片とあたりに散らばる破片をサイタマのいる場所に向かってぶん投げる。

巨大な質量を持った瓦礫は予測不可能な動きをしてサイタマに向かって飛んでゆく、しかしそれらはそう遠くにいるわけでもないサイタマにまったくもって当たらなかつ

た。

恐怖により手元がズレているのだ

コロは怖かった。

生物型帝具であるコロが恐怖を覚えるなど今まで決してなかった。どんなに強い相手でも決して怯まず、千年という長い時の間帝具として使われてきて、様々な強者を見てきた。並みの人間よりも自分は人を見る目はある。だからこそ怖かった、自分の奥の手を使い始めて目の前の人間の異常性が理解できたのだから。

嗅覚

凶暴で凶悪それでいて圧倒的、絶対的食物連鎖の頂点に立つであろう存在。はるか遠い昔、一度どこかで嗅いだことのある伝説の龍の血の臭い

## 聴覚

いっさいブレる事なく一定のリズムで刻む心音は異形の存在となった自分を前にしてもまったくもって微動だにしていけない証拠

## 視覚

狂化された目で見て分かる、この男の異常な力。はち切れんばかりに空気を入れた風船、いやそんなちやちなものじやない膨大なエネルギーを人の鑄型に押し込みそれを何千回、何万回と繰り返して造られた自分以上の兵器ではないかと錯覚させる

## 感覚

自分がこれまで戦ってきた相手、その中でも叩きつけてくるオーラは別格。いや、今まで全ての敵を合わせてもここまでのオーラは出せないだろう、そうコロは悟った。

『ギオオオオオオオオオオオ』

コロは瓦礫を投げるのをやめる。犬の鳴き声とは思えないほどの雄叫びをあげ、恐怖によって固まった自分に喝を入れる。

すでにコロの主人であるセリユーは気を失っている、本来であればコロもその機能を停止させるはずであったがコロは動いていた。

体が元に戻ろうとする、無理矢理全身に力を込める

体の至る所からビキビキ バギバキと嫌な音が聞こえる、まだ倒れちゃダメだ意志を強く持ち堪える

全身から普段とはまったくもって異なる痛みが走る、目に涙を浮かべながら歯を食いしばりなんとか耐える

コロの体はもう限界を迎えていた。本来であれば自分の体をえぐる敵の攻撃を受けなくても再生するが、今回は主人であるセリユーが気を失っているため自分との戦いだっ

た。  
道具としての自分が元の状態に戻ろうとする、でも今元に戻ったらセリユーは目の前の人間に殺されてしまう。

それだけは、なんとしても避けないと

サイタマは目の前の犬を見つめる

先ほどまでは自分の数倍あったが突然ボシユンという空気の抜けたような音と共にサッカーボールほどの大きさに戻ってしまった。しかしその目は強い意志を感じさせサイタマを睨み続けていた。鋭く尖った牙を見せ唸り声をあげ、後ろに倒れている少女を守るようにして。

ふと目の前の男は何かについたかのか自分に背を向ける、そして男が何に気がついたのかを察する。

数万人規模の大量の人の波がこちらに向かってきていた。

普段なら援軍が来たとコロは安堵するだろう、しかし人の波は止まる気配をいつさい



見せなかった。

喘ぎ声とも取れる呻き声をあげながら血走った目でただ全速力でこちらに向かつて走る。その顔に理性の色は一切見られなかった。ただ一人の人間でさえ鎧を着ているのにもかかわらず体が数倍にまで膨れているのではないかと錯覚してしまうほど気迫があつた。

おそらくここにいるとあの人の波によつてセリユーと自分は踏み潰されてしまうだろう

コロは覚悟を決め、背後に横たわる主人、セリユーを引きずり端に寄せようとする。しかし帝具として主人が眠っている状態で出る力は自分と同じサイズの子犬と同じほどだ、いくらセリユーが女の子だったとしても到底コロには動かせない。

それでも引きずるセリユーが生き残る可能性を信じて。

ふと頭を撫でられた、やはりあの人間だ

「お前はご主人様を守ってろ、あいつらは俺がなんとかする」

そう言つて人間は自分の頭を撫でていた手を離すと巨大な人の波に向かって歩き出した。



「あの女、兵士たちに帝具を使うとは、よく考えたもんだ」

盲目の男は眩き、持っていた杖を握り直す

外では亡者の嘆きに似た声と何かを思いつきり引つ叩く音が鳴り止む事無く続いていた。それが何を指すのかを男たちは直感的に理解した。

「やはり来たか」

「ええ、来ましたよブドー大將軍」

「そうか……」

「シユラの小僧も負け、大臣お抱えの羅刹四鬼もやられ、エスデス將軍もやられ、帝国お抱えの帝具使いもあつしを含めて後8人つてところですかね」

「ふ、例え帝国の帝具使いが私一人になつたとしても。奴が帝国を滅ぼそうとするのであれば、私は奴を処刑するまでだ」

一際大きなバチーンという音と共に壊れかけの宮殿の門の上からボロボロになつた黒い鎧の少年が落ちてくる。

ブドー大將軍はその少年を優しくキャッチすると少し離れた所に自分のマントをかけ、休ませた。

氷氷氷氷氷氷氷氷

このままではダメだ

私はあの方と共に

私の命はあの方のために

一度捨てた、この命 あの方のために使わなければ。

剣が震えていた

鎧を着た瞬間

見えていた景色が変わった

目の前にいる人間から真つ黒なイメージを感じとった

それは巨大な蜥蜴のような姿で黒くドロツとした液体を口からこぼし、体の至る所から血を吹き出し腹からはベチャベチャ何かを滴らせながら、目を真つ赤にして泣き叫んでいた。

俺は喰う

主人を喰つタ

愛した者たちの喰ツタ

足りナイ、まだダメだ、もツと喰わネバ

この世界を救ウタメ、イラナイヤツヲクウ。

もつと力をよこせ



????????????????????????????????



「えっと、確か捕獲レベル46殺戮蟻の亜種と超特殊調理食材ベリバラの実でしたっけ？」

「そう、正確には捕獲レベル52と捕獲レベル421よ」

真つ白な髪をした少女が訪ねた問いに黒髪の女性は口にあてていたティーカップをはなし、答えた。

「対処方は？」

「殺戮蟻の亜種は牙を見なさい、身の危険を感じなければ堂々としていけばいいのよ。例え何億何兆何京匹いたとしても悪魔の胃液には溶かされちゃう。ベリバラの場合は一回体を燃やしなさい、脳に届いた場合貴女じゃ恐らく死んでしまう。なら燃やした方が楽よ」

少女は頷きながらその言葉を持つていた手帳に書き込む。その様子を見て女性は満  
足げな笑みを浮かべ、ティーカップを口にあてる。

「でも、いるんですかね他の世界にそんな生物たちが」

「わからないから探すんでしょ。未知とは恐怖、未知とは愚か、未知とは夢、未知とは憧  
れ、誰の言葉だったかしら？」

「確かに油断が命とりになりますものね」

そう言って少女はポケットから一口サイズのチョコレートを取り出し包み紙ごと口  
に入れる。パリポリという心地よい音が聞こえ、少女は満面の笑みを浮かべながらほっ  
ぺに手を当てる。

「己を磨くのをやめたものとはとつともなく惨めよ、私がこの前行った世界では優秀な少  
女たちがやる事が無いという理由だけでカバみたいな不細工の性奴隷かつ食料に

なっていたんだもの」

そう言い終わると女性は再びティーカップを再び口にあて中身を一気に飲みほす。

「それって狩りで倒せない奴がいなくなつたからつていう例の世界のやつですか？」

「そう、馬鹿よね。探せばいくらでもあるのに、楽器の練習、歌の練習、読書に、武器の作成、新しい事の発見、他の星へ行く、マグマの中を泳ごうとする、可能性なんて無限大なのに」

「で、結局どうしたんですか？」

「ペットの餌にしたのよ」

少女の問いに女性は冷たく言い放つ、しかし少女はその言葉を聞いた瞬間、ガラスで出来たテーブルに強く拳を叩きつけた。

ガラスのテーブルに蜘蛛の巣のようなヒビが入るが、壊れる様子は一切なかった。叩

きつめた拳は震えており少女の瞳は怒りに燃えていた。

### 女性は話を続ける

「面白かったわよ、特にカバみたいな不細工。私が性奴隷になりに来たのだと思って首輪をつけようとして来たの、だから逆に首を握り締めてやった」

「そうするとね、女の子たちが私の尻尾を掴もうとしたり握り締めてる手を離させようとしたり、効かない薬を刺してきたりして来たの」

「でもね、唯一面白くなかったことがあるのよ、カバみたいな不細工たちが女の子たちを鎧のように自分の体に巻きつけていた事」

「よくあるわよね、俺を殺そうとしたらこいつが傷つくぞ。カバみたいな不細工がニヤニヤとこつちを見て来たの、そろそろ薬が効いて来たはず、とか思いながらね」

「だから全部ペットの餌にしてあげたのよ、女の子たちは本当なら直属の部隊にしてあ

げようかと思つてたけど」

「まあ面白かつたわよ、女の子たちは自分から盾になろうと前に出るけど、家畜としての生活が長かつたせいかしら？筋肉が弱つていたせいとか、みんな檻獣に捕まっちゃうの、まあ何人が捕まつた時に背骨が折れて死にかけるのだけだね。ちゃんと直したわよ」

「カバたちが言うの、お前は仲間を殺すのか？つてバカみたいよね散々自分たちは殺して食べておいて、まあカバたちもその時は五体満足で生かしておいたわ」

「確かその時はどうだったかしら、そうそう女の子たちは自殺できないように全身縛つてギヤグボール唾えさせて、カバたちと虫の餌になつてるところよ」

「で、少女たちを殺したんですか？」

「楽しそうに語る女の話の中断させ、白髪の少女は尋ねる。少女の瞳にはもはや怒りはなく、目の前の女を殺そうと身構えている獣の目だった。」

「殺しは禁止よ、今もなお生きてるわ。多分時間からして今晚一本食べ終わってる頃かしら、あの虫たちは食が細い事で有名だから」

まだ話し足りなさそうにしている女性は少女の瞳を見て、肩をすくめながらそう答えた。

もつとも少女がどんな手段をとろうとも自分に傷一つつけられないのだが。

「平均捕獲レベル3000の凶悪拷問虫類、ありとあらゆる毒の抗体に宿主を殺さないようにする激痛を伴う凶悪な薬、無理やり血管を太くし体に栄養を送らせる。死なない代わりに全てにおいて不自由になるヤバイ奴ですよね」

少女の瞳にあった殺意は消えていた、が、未だ目の前の女に対する怒りは消えていなかった。それは少女自身が女の飼っている虫の事を身をもって知っているからだ。

「言うほど酷くないわよ、殺すと言うことはその生物の全てを奪うということよ。なら私たちは命を奪う場合じつくりと、その命に感謝して味わうべきなのよ」

「それに、私は排泄物を食べると言う事の意味がわからないわ、だったら栄養だけを送ればいいじゃない」

「狂人の考えですね」

少女は吐き捨てるようにつぶやく。

「そう？ 私はいたって普通の考えだと思ってるのよ？ むしろ家畜の方がどうかとしてると思うのよ」

「それで女の子たちは今どうしてるんですか？」

「さあ？ 確か正気に戻す作業を先にするよう命令してあるからそろそろ一人目あたりが餌になるのじゃないかしら？」

「命乞いは聞かないのですか？」

「聞かないわよ、そもそも彼女たちは諦めたのよ？ 自分を磨くことを、私はそれを決して許さない」

「それでも、「いい加減にしなさい。私はあなたの直属の上司では無いから殺さない訳ではないの、貴方が自分を磨き続ける人間だから生かしているのわかった？」…はい」  
女性の顔から笑みが消え、少女は次の発言は無いと悟る

女性は1つため息をし表情を戻し、少女に笑いかけ

「もし貴女が私と同じような場所に行くようであれば貴女はその娘たちを助ければいいじゃないのよ。人を育てると言うことも自分を磨くことなんだから」

と言った。

「…本日はありがとうございます、では失礼します」

少女は一礼をすると女性の前から消えた。



女性は少女の気配が完全に消えたのを確認すると椅子から立ち上がり体に収納していた耳と尻尾をピョコンと出す。

「まったく、理解に苦しむのよね。『命は一度限り、その死はどんなものよりも尊い。ならば汝は自らが殺した者ノミを食せ』この戒律を守っているのって私以外に何人いるのかしら?」

女性はそう一人眩きながら、少女が座っていた椅子を軽く蹴飛ばす。それだけで椅子はビー玉になった。

「でも、DMや自殺願望者って厄介よね。相手にとって傷つけることはご褒美になるし死ぬ事は良いことになってしまおうし」

右耳をびよこびよこ動かし、自分の座っていた椅子も少女の座っていた椅子同様ビー玉にする。

「ええ、わかってるわよ。不老にしたわ、鼻にチューブ突っ込んで栄養を送り、手足は縛らずそのまま、でも薬の効果で筋肉は動かない。五感は薬で異常なまでに鋭敏になっている、ただし快樂のみ感じられないようにしたわ。乾いた口や喉に詰まったタンの処理なんかは彼女たちを尊敬している後任が全部してくれるもの」  
くるりくるり右耳を回し、そしてひび割れたテーブルをコツンと叩いた。

それだけで、テーブルは目に見えないほどの小さな粒へと変わり、音も立てずに消えていった。

「私たちのために重傷を負った歴戦の勇者たち。勇者たちがこんな目にあつたのは私たちを助けてくれたおかげ」

持っていたティーカップをスボンのポケットにしまう、体積以上のものなのにもかかわらずティーカップはスツとポケットの中に消えていった

「めんどくさいことを全てやってくれる部下、死ぬことも動くことも一切できなくなるという絶対の罰、可愛い私の虫たちのエサ。一石何鳥の利益ができたか…?」

女性はかく両手を広げ上から降ってきたものをキャッチし、少し驚く。降ってきたのは全身ボロボロの浅葱色の髪の少女。

「貴女の失敗」

それが唯一の損かしら？

そんな事を呟くと

そこに2人の姿は無かった。

## 壊滅

## XVII

帝都から北に10 kmにあるその場所は切り立った崖と山が多く点在し、緑豊かな山林に囲まれている。山から溢れ出る水は滝を形成し、小さな河原や池がのどかな風景を作り上げていた。一部箇所には温泉が湧き出ており、知る人ぞ少ない名湯がある。

そんな場所に帝都を震え上がらせている殺し屋集団、ナイトレイドのアジトはあった。

そう、あつた。

過去形である。

事の発端は数日前、ナイトレイドのメンバーが一人増えた日の夜、ナイトレイドのメンバーが外でどんちゃん騒ぎをしていた時だった。

『☒また、侵入者だ!』

『ラバ人数は?』

『人数は1人、場所は南に少しある岩山』

『なによそれ、1人って事は迷い込んだ旅人とかじゃないの?』

『最初はそうかと思っただけ、糸に反応があると直ぐに反応がなくなっちゃうんだよ』

『つまり、どういう事なのでしょう?』

『ちよつとシエーレ、あんたしつかりしなさいよ!』

『つまり、ラバの帝具の糸で作った結界を切り裂くほどの強者って事だよな』

『兄貴、昼に来た連中のボスって事?』

『そうとは限らないが、違うとも限らないな』

『とりあえずメイン様子を見つゝ『ドッガーーン』なツ!??』

『嘘だろ☒あの岩場からここまで全部の糸を引きちぎった!??』

『一刻の猶予もないな、全員出動だ!』

そして現在ナイトレイドのメンバーは北からアジトからさらに北にあるログハウスの風の臨時アジトに身を潜めていた。

「で？これからどうするわけ？」

誰一人として口を開かない状況に嫌気がさしたのかマインが苛立ちを隠せないまま口を開いた。

「どうしようもないよ、マインちゃん。ナジエンダさんの帰りを待つしかない」

「なによ、その言い方！第一あんたがもつと早く結界のことを言っていればこんな事にはならなかったんでしようが!!？」

「ま、マイン、おちついて…」

ラバはマインを落ち着かせようとするが、普段のおちやらけた雰囲気は全く感じられず、その事が逆にマインの気に触れてしまい火に油を注ぐ形となった。

シエーレはマインを止めようとするがあまりの啖呵にただおろおろしていた。

マインは更に声を荒げてラバを責め立てようとするがブラートに注意される。

「マインやめろ、タツミとレオーネが起きちまう」

「うっ、」

マインは苛立ちが残ってはいるものの自分たちが気絶している間、寝る間も惜しんで看病し続けていたタツミに負い目を感じてか何も言えなくなる。

「とりあえず互いの情報を共有しておこう」

そう言ってブラートは今いるメンバー、マイン、ラバ、シエーレそして眠っているレオーネとタツミの顔を見渡す。起きている三人は無言で肯定の意思を告げた。

「まずは俺からだ、俺はいの一番に飛び出したから後の事はあんま覚えてないが敵は人間であつてるよな？」

その当たり前の質問に対しても三人は無言だ。先程の意味とはまた別の意味ではあ



るが。

「俺がインクルシオを身に纏おうとしていた時、インクルシオが怯えてた」  
「それってどういうことなのでしょう？」

「うまく説明できねえけど、自分が絶対に勝てない天敵に遭遇した、って感じだ」



帝都上空を突如として厚い暗雲が包んだ。暗雲はゴロゴロと音を鳴らし今にも落雷が発生しそうだが、この暗雲を制御しているブドー大將軍はそれをよしとしなかった。

ブドーの持つ帝具雷神憤怒アドラメレクは雷を操る帝具ということもあり帝具の中

でも上位に入る殺傷能力を持っている。雷雲を呼び天候を変える、磁場を操り空を飛ぶなどという戦いにおいて幅広い用途で使うことの出来る応用力がある。

大將軍の家系であるものしか使えないという弱点もあるがその力は破格なものだ。

しかし、ブドーは敗北した  
そして身をもって知った。

人間、生物、危険種も雷を一撃でも当てれば殲滅できる、しかしそれは己の力を過信した慢心に過ぎないという事

日々の訓練を欠かささない、そんな事一般兵でもやっている、当たり前のことだ

前回の敗北からブドーは学んだ。

自分の能力を過信しない、常に相手が自分より実力が高いものであると想定する、どんな手を使っても皇帝を守る。

「一つ聞こう、貴様はなぜこの帝国の宮殿に2度も足を運んだ」

雷鳴が轟く中ブドーはその言葉を発した

大方の予想はついてはいるが、どうしてもそれだけは聞かずにはいられなかった。

しかし、目の前の男は答えない

ただ黙ってこちらに歩みを進めるだけ。

そうか、それほどまでに意思は固いか

ブドーはまぶたを閉じ、息を深く吸い込む。

ブドーは大将軍の家系に生まれ代々の教えである『武官は政治に口を出すべからず』

それを守り帝国が腐っていく姿を見て見ぬ振りをしてきた。それを間違つた事だとも思つてはいない。

身体に至る所に電流を流し込み筋肉を刺激し無理矢理にも活性化させる。ただでさえガタイの良いブドーの体は膨張し電流をほとばしらせる。身体に至る所が悲鳴をあげているがブドーはそれを一切表情に出さない。

たとえ目の前の男がどんな酷い境遇で育ち、帝国にどんな怨みがあり、それをバネに強大な力を手に入れようと、それは仕方無い事だ。私のなすべきことは帝国を滅ぼそうとするもの全てを叩き潰すのみ。

「ちよつと待った」

ブドーはまぶたを開き、声のした方に目を向ける。

そこには先程マントをかけて寝かせておいたはずの少年が苦悶の表情を浮かべながらも立ち上がる所だった。

少年 ウエイブは持っていた剣を地面に深く突き刺し、腹の底から声を出す。

「グランシヤリオー」

声と同時に真っ黒な龍の形をした鎧が地面の中から現れウェイブの身体を覆う。

漆黒の龍を象った鎧を身に纏いウェイブはブドーに向けて言った。

「俺はまだ戦える」

それを見ていたブドーは「足手纏いになるなよ」と呟き、話が終わるのを待っていた男に目を向ける。

その時のブドーは少しの笑みを浮かべていた



互いに情報を交換し終えたナイトレイドのメンバーを待っていたのは絶望だった。

ブラートの帝具インクルシオは使えることには使えるが変身時間に1分以上の時間を要するという致命的な欠点が誕生し。

この世の全てを必ず切断できる、刃渡り1メートルを優に超える大型鋏の帝具“万物両断”エクスタスはシェーレが防御の時に要ネジの部分が壊れてしまい鋏としてはもう使えなくなり、二本の刀となった。

ラバックの「千変万化」クローステイルは糸がほとんどが千切れて今までの10分の1ほどこしか結界を維持できなくなった。奥の手である絶対に断ち切ることの出来ない(筈の)界断糸が二本になった事は不幸中の幸いだったが。

持ち主の精神エネルギーを衝撃波として打ち出すマインの銃の帝具「浪漫砲台」パンプキンはピンチになるほどその破壊力は増していくのだが、その全てがことごとく回避され、最後に打った高火力の攻撃時にオーバーヒートを起こしてしまった。

分解して直ぐに修理に当たれば被害は少なかったのだがマインが使った精神エネルギーがあまりにも多かったためマインは数日の間植物状態に陥り修理が出来なかった、そのため被害が深刻化しマインが見た結果、修理に数年かかるかもしれないという結果となった。

そして食糧を確保しに行っているアカメの帝具も…

先程の沈黙が更に酷くなった。

その頃、ナジエンダは臨時のアジトから東に12キロほど離れた岩山にある坑道で革命軍の密偵と情報を交換していた。

「な!? エスデスが帝都に戻ってきている!?」

「エスデスだけではありません、帝国の各地に配属されていた帝具使い全てが帝都へと招集を受けているようです」

「他にもキュロク付近では羅刹四鬼らしき人物が帝都へ行く姿があったという匿名の情報もあり、大臣の息子が複数の帝具使いを連れて帝都へと戻ったとの情報も…」

「い、いったい帝都にはどれくらいの戦力が集まっているんだ、」

「数日前に帝都に送った密偵からの報告が無いため確かではありませんが、参謀によると今の帝都には帝具使い、およそ15名。将軍、最低17名。兵士に至っては帝国の3分の2である100万はくだらないそうです」



その言葉を聞きナジエンダは絶句する。

こちらはエスデス1人倒すのに精兵5万以上と帝具使い10人以上、そしてアカメが必要だというのに。

「帝国が、遂に動き出したか、」

革命軍を叩き潰すために。

事実はまったくもって異なるが今のナジエンダはそうとしか考えられなかった。

それは強力な武器である

あるものは剣

あるものは指輪

あるものは仮面

あるものは絡繰

あるものは血

X  
I  
X

帝具

## 劍

強大な力を持った御伽噺に登場する生物の肉と強固で堅牢、それでいて稀少なレアメタルをふんだんに使い作られたそれは、常に安定して力を放つ。がそれは持ち主の体を精神を保護するため

その劍が持ち主を真に認めた時、さらなる力を引き起こす。

## 指輪

考えて欲しい、海に住む海龍の事を  
なぜ海龍が船人に恐れられ

神と崇められているのか

大海原に船を出す時

海賊と危険種、海龍にきーつけろ

遭難して喉がカラカラになった時

助けてくれるのはいつも海龍

仮面

人間の潜在能力などたかが知れている

言うなればコップに水を入れるという事だ

潜在能力100%

人間というコップにおいて、これはとてつもなく小さい

潜在能力100%

龍というコップにおいて、これは途方もない位に大きい

### 絡繰

いや正確にはマリオネットと言った方が正しいのかも知れない  
自分では動かない、いや動けない

どんなに国を憂いても、それは彼の体は動かない

### 絡繰の糸は透明

引きちぎる力は彼には無い

歪に歪んだ絡繰は演じる

悲劇 喜劇 歌劇

心底下らない物語

血

血とは力の証だ

戦いで多くの血が流れれば

勝者の力が誇示できる

王族の血が流れていれば

王族としての力を振るう事ができる

強者の血を吸えば

強者の力を取り込む事ができる



「その話が本当だとすれば、相当やばい状況だな」

ブライトは先ほどナジエンダが言った事を嘯み締めながら呟いた。

帝具使い、最低15人

帝具1つでさえ一騎当千の力を持つというのに帝国はそれを最低でも15個保有しているのだ。

少し前なら帝具が一箇所に集合しているため集めやすいという無理矢理なプラス思考な考えも思い浮かんだが、今はそんなことは不可能に近い。ナイドレイド側の帝具の能力が大きく低下している中で複数人の帝具使いと戦闘になれば負ける可能性は高い。

それに

ブライトが知っている帝具使い、その中で自分が戦いたくないと考えてしまう人物が

2人いるからだ。

昔の上司であり、現在エスデス軍所属、リヴァ

盲目でありながらも一夜にして1000匹の危険種を討伐した

恩師、トラフジ



リヴァは右腕を天高く伸ばし、水でできた小さな魚を手のひらに作り上げた。しかしそれだけでは収まらない。



帝都の至る所から水が少しずつ宙に浮かび上がり、矢のように鋭い形となつて勢いよく空へと飛び始めた。

空に浮かび上がった水は全てが魚に向かつて行つた。

迷う事なく真つ直ぐに一直線に魚に向かつて。

水でできた小さな魚はポチュンという水に石を入れたような音を立て、水でできた矢と自分の体との境界線をなくし、手のひらほどの体を少しずつ大きくしていく。

リヴァは先ほどの戦いとも呼べない戦いの中で悟つた。

『このままでは自分はあるの時と同じように何もできない』

いや、それはダメだ。

なんと少しでも奴を倒さねば

瓦礫の中から這い上がる。腕や足がビキビキと音を立てる、体のあちらこちらにへんな負荷がかかったのか筋肉痛に似た痛みが走る。

そして立ち上がり、右手の中指にはめてある龍の頭をかたどった指輪に向けて話しかける。

「私の帝具よ、もつと力を寄越せ!!？」

その時、龍の額にあつた宝石がキラリと鈍い光を放った。

リヴァはそれを覗き込み、一匹の龍を見た。

深い海の底に佇み、巨大な岩にその身を預け、淡い青と深海の蒼を合わせた体を持つ優しくも強い意志を持った龍。

龍はリヴァの顔を見るとコクリと頷き、その身を宝石の中の海に溶かした。

リヴァは人の頭ほどのサイズになった水をさらに2つ作り上げて背中と頭にそれぞれつけた。背中についた水はまるで背中にあるのが当然のように翼を作りあげた。蝙蝠のようなではあるが蝙蝠とは比べものにならないほどの力を持った翼。

頭についた水はリヴァに取り付くとグリグニユと形を変形させ龍の顎を模した形に落ち着いた。

リヴァは大地を蹴り空へと飛ぶ、そして空中を飛び宮殿へ一直線に向かう。翼はリヴァの意思で自由に空を飛び数秒もしないうちに宮殿へとたどり着いた。

そしてこちらの様子をぼーっと突っ立ったまま見上げている男へ向かって今の自分が打てるであろう、最大最強の奥義をお見舞いする。

『水龍すいりゆうてんがいそう天碎槍』

その言葉と同時に帝都にあった全ての水が小さな龍の形となり空へと浮かび上がった。

先ほどの水の量とは桁違いだ。

大河からは鱗の群れのように、噴水では我先にと飛び出し、コップの水はコップを倒し、バケツの水はバケツをひっくり返して。

一箇所に向かつて集まる。

それらの小さな龍は互いに互いにの体を融合させ少しずつ大きくなる。鱗ほどのサイズのものが渦巻き、蛇ほどの大きさになり、蛇ほどの大きさのものが互いに溶け合い大砲ほどの大蛇になり、大砲ほどの大蛇は互いを喰らい竜となった。

そして竜は唸りを上げ逆巻き帝都の上空の3分の1を覆うほどの巨大な一匹の龍となった。

帝都の水全てを飲み込んだ巨大な龍は男めがけて一気に急降下する。しかしそれだけでは済まない。

龍はその顎門を少し開け、その隙間から水を打ち出す。

数百万トンはいくらでもない水の中には砂や金属の破片が混ざっている、リヴァそれを水圧で無理矢理圧縮し超高圧水でもって音速の速さで打ち出し、敵の肉を確実に削る。

これぞリヴァの水龍天碎槍 一番槍 水斬みづきりである。

例え水斬りを避けたとしても、顎門を開けた龍はそのまま急降下し標的を飲み込むまで追い続ける。大量の水は地面を侵食し、建物を破壊し一直線に突き進む。そして水龍天砕槍 二番槍である大砲水たいほうみずの前に為すすべも無く飲み込まれる。

そして飲み込まれた奴は 水龍天砕槍 終焉槍 水阿鼻みずあびの水圧によりその肉も骨も全て押しつぶされ、唸り逆巻く水のミキサーにより跡形もなくコナゴナにする。

### 三段構えのリヴァの一撃

しかしそれは、あつけない結果を迎える。

サイタマ 宮殿 北門入口 戦闘中



XX

帝都 宮殿 最上階

「なあ、大臣」

「なんでしよう、陛下？」

「…いや、何でもない」

歳は10にも満たない皇帝は今、不安と恐怖に見舞われていた。



「なあ、大臣、余はこの国を、民を守ることが出来るか？」  
「はい、陛下ならきつとこの国を民を守ることが出来ます」

そうだ、大臣が余を裏切る事など無い

いつも、いつもいつも、余を支えてくれた大臣が余を裏切る事などあるはずが無い。

『いざとなればこのスイッチで、陛下諸共あの世行き、というわけですか？』

あの言葉は余の聞き間違えだ。

皇帝の心に刺さっていた恐怖と不安は、大臣の言葉でなくなった。皇帝はその手に握った杖をしっかりと握り締め、前へ進む。





トラフジの帝具は杖の帝具だ

いや、杖というのはおこがましい、正確に言えば木の棒だ。

ゴツゴツして微妙に太く持ちづらく、少し真ん中の部分が曲がっている。山の中を探せば似たような木の枝がいくつも見つかるだろう。

しかしそれには訳がある

装飾は一切施されていないのは、当時の技術をもつても一切傷をつける事が出来なかつたから

加工はされていないのは、なぜなら何者の影響も受けないから

では何故装飾も加工も施されていないこれが杖の帝具と呼ばれているのか。

それはこの帝具の持ち主がこの帝具を杖の代わりとして使っているからに他ならぬ。

トラフジは目が見えないが空間を把握する能力は帝国一を誇る。前もってブドーと決めていた位置に男が来るのを察知すると帝具の能力を発動させる。

「超重力」

トラフジの持っている杖の帝具 “しんみんへいふく臣民平服” ユグドラシルは重力を操る帝具である。

サイタマは膝が地面に着きそうなのをなんとかして堪える。歯を噛み締め一步前に出る。しかしその都度その都度地面に膝をつきそうになる。頭がぼーつとして体が重い、まるで脳にまで酸素が送られていないのではないかと錯覚してしまうほどだ。

「水龍天碎槍」

フラフラの状態で、後ろからくる何かには察知できた。

すぐさま後ろを振り向き見上げる。

サイタマの顔に大量の水が命中した。

上から降ってきた大量の水は子供が大人に水鉄砲をかけるかのように見事にサイタマの顔の中心を捉えていた。しかしその勢いはビシユという音が後から聞こえてくるほどであり、水の色が透明でない事から確実に水ではない硬いものがサイタマの顔にはぶつかっている。

しかしそれだけでは終わらない、身動き一つ取れないサイタマを大口を開けた水龍は無慈悲にも丸呑みにする。

周囲には水を一切飛ばさない。しかし龍の体内は洗濯機の中のように渦を巻きサイタマの自由を奪う、そして水圧により肺の中の全ての空気は奪われる。

サイタマは何もできないまま水龍の体内で死を待つのみ。

しかし、次の瞬間、水龍は内側から弾け飛んだ

サイタマは逆巻き渦巻く水流と大量の水による水圧に耐え水龍を内側から振りほどいた。

だが、サイタマの相手は水龍だけではない。

「ジャッジメント・ナイト・オブ・サンダー  
最後の審判・黒雷」

その瞬間帝都は暗黒に包まれた



X  
X  
I

ブドーは以前サイタマと戦った際、数千発の雷を十数秒の間、地表へと落下させる技を使った。雷はたしかに数発サイタマに直撃した、しかしサイタマは何事もなかったかのようにブドーの元へ行き、殴り飛ばした。

だからブドーは負けた

だが今回は違う

身体に電気を纏う事で基礎的な能力を向上させ、帝具による負荷に耐え尚且つ制御を可能とする身体にする。上空の黒雲を更に発達させ形を作り圧縮して威力をあげる。雷一発一発の威力の底を上げ、それを圧縮し落雷として落下させない。

ただでさえコントロールの難しい落雷は圧縮されるごとにその威力を格段に上げていた。

数千発もの雷を一つにした

それが放たれた瞬間を例えるならば、神話だろう。

闇が世界を支配し、天も地もない常闇の空間が生まれた。

全ての光が奪われ、時間の概念が消失した。

しかしそれは一瞬だった

一つの閃光がほとぼしり、暗闇をのみこみ世界の全てが白く染まった。

遅れて爆風が巻き起こる

巨大な建物はグラグラとゆれ、ガラス窓は割れる。材木や青々と茂っていた木々は、一瞬でその葉を散らした。大量にばら撒かれていた手配書は吹き飛んだ。

それだけでは済まない、衣類専門店ではショーウィンドウが割れ高級品、安物関係なく全てが吹き飛ばされた。果物や野菜はぐちゃぐちゃになり、魚や肉は殆どが埃を被った。スラム街の露店の多くは爆風によりいとも容易く吹き飛ばされた。

幸いにも人的被害は少なかった

帝都の民の多くが警備隊の指示に従い、帝都の中心部からかなり離れた帝都の外周の壁まで避難していたからだ。

しかしそれでも避難していた民たちに爆風は襲いかかった。

帝都の中心部から避難していた人々は身を寄せるようにしてその暴風に耐える。母



親は子供を守るように抱きかかえ、父親は家族を守ろうと覆い被さり、若い青年は老夫婦をしっかりと抱きしめ、30代の残念美人は近くにいた親のない子に覆いかぶさる。目を開けることさえ困難な風は彼らが避難する際に持ってきた衣服類を吹き飛ばし、書籍や紙類を遙か上空に持っていった。

少しの怪我人は出たものの、死者はでなかった。



空中に浮いていた水龍のかけらはブドーの放った一撃により全て蒸発し、未だ残る膨大な熱のみがその場を支配していた。

強大なエネルギーの放射により地面には大蛇を思わせる巨大な地割れが出現し、宮殿敷地内にあつた芝生や木々はもはや見る影もなく、荒れた大地と化した。

ウエイブは目の前の光景に驚愕する。

突如目の前にあつた筈の光景が黒く塗りつぶされたかと思つたら、天空から一筋の光が落ちてきたのだ。視界が黒く塗りつぶされた恐怖もあつたがその光の美しさに目を

奪われ何も考えられなくなった。そして爆風が巻き起こり自分の体が空中に浮いたと思つた瞬間、背中に巨大な衝撃を感じたのだ。

一瞬で宮殿の普段の光景が荒れ果てた不毛の土地に変わったのだ。

草木が焦げたような匂いはなく、まるで最初からなかつたかのようにそこには巨大な地割れがあつた。

ありえない、信じられない。そんな言葉ばかりが脳裏をよぎる。自分は夢を見ているのではないかと錯覚してしまうが、肌で感じている乾いた暑さが現実である事を告げる。

自分の体が壁にめり込んでいる事に今更ながら気がつく、壁から脱出し先ほどの一撃を放つたせいで地に倒れ伏しているブドーを介抱しに向かう。

この日ウエイブは帝国、最強と呼ばれし男の強さを身をもって知った

そして

「今のは結構あぶなかった」

帝国が敵に回した男の強さを

「服が黒焦げになるところだった」

地割れの中のほうから声が聞こえた。

誰よりも理解する事になった。

## 護国機神

少年は階段を登る。

自身の身長にそぐわないほど長いマントを引きずりながら、ブカブカの帽子を被っている。少年が両手に持っているものは巨大な鍵だ。大の大人の握り拳よりも大きい深紅の宝石とこの世界で最も希少とされる鉱石で造られ、造形こそシンプルであるがこの世界で1、2を争う最高品だろう、現金にしたら山脈のような数の金貨と交換になるだろう。

しかし、これは鍵である。

鍵であるのだから何かを開ける為のものだ

少年は階段を登り終え、目の前にある巨大な鍵穴に鍵を差し込む。  
そうこの鍵は

この世界、最強にして最高の兵器の封印を解く鍵である。

---

X  
X  
I  
I



ウェイブは地割れの中から這い出て来た男に目を奪われる。

先ほどの雷の直撃を受けてか、着ていたジャージは焼かれたのだろうか、その服の下に隠された肉体が泥だらけではあったがあらわになっている。腰には見覚えのあるマントを巻きつけそれ以外の衣服は一切着ていなかった。

そして、何より一番驚いたこと、それは

「うわー、服なくなっちゃったな。とりあえず今はこれ、腰にまいとけばいつか。つうか痒いな」

そんな事を呟きながら目の前の男は体の至る所についた砂埃を手で払う。どこもかしこも汚れてはいるが、火傷や擦り傷などの外傷は一切見えなかった。それどころか「なんか、体軽くなったきがするな」などと言う始末。

（どうすればいい、考えろ！まず俺が一人で突っ走っても一撃で吹き飛ばされるだけ。さっきの衝撃波でブドー將軍は、もう戦えるような状況じゃない。となると、俺とトラフジさんだけでこの男をなんとかしないと。だがどうやって？）  
ウエイブは数秒にも満たない時間の中で考える。

一気に距離を詰めて、正面から一撃を食らわせる？

いやだめだ、一撃当てたとしてもカウンターの一撃でまた空に吹き飛ばされる。

なら一気に距離を詰め、あえて攻撃させ直ぐに避けてカウンターを食らわせるのはどうだ？

これもだめだ、あの男の拳は人間が避けられるスピードではない、それに男の拳は一撃でも食らえばお空のお星様になりかねない。

なら男の目の前で大地を勢いよく踏みつけて、砂埃を起こし視界を奪い背後から攻撃を仕掛けるのはどうだろうか？

これもだめだ、砂埃のせいでこちらの視界も奪いかねなし、それにそんな砂埃、やつの拳一振りでも吹き飛ばされてしまう。

「ええい、ままよ」

ウェイブは考えるのをやめ、大地を強く踏みしめると、空高く飛び上がった。

高さにして約30メートルに達すると、ウェイブの体は重力に従って落下しはじめた。

「トラフジさん！」

「最大重力!!？」

ウェイブはサイタマの動きを封じる為にトラフジに頼む。トラフジはブドーの攻撃を受けてなおかつ無事なサイタマに対して自分が使える最も強い重力をかけ、動きを封じる。どんな危険種であろうと泡を吐いて白目をむき、大地に倒れ伏し、超級の危険種でも一撃で死ぬほどの重力を浴びせる。

しかし、体の泥をはたき落しているサイタマにはその重力を浴びて、地面に倒れ伏す様子は一切見られなかった。

ウェイブはグランシャリオの力を使い加速し、一気に落下し、蹴りの体制に入る。

ウェイブはサイタマに目を向ける、未だ体についた砂を落としているのに集中して、

こちらの様子伺う素振りはない。

(畏? いや、違う俺の攻撃なんて意味がない、と見せつけたいのか?)

ウエイブはこのまま行つていいのか考える、しかし考えている間にも男との距離は縮まるばかりだ、このまま行けば確実に男の顔面に決まる。嫌な汗がわきでる。

(いや、だめだ。何を弱気になつたんだ俺!)

ウエイブは一瞬目を閉じる、そしてこのまま決める事にする。おそらく、多分、絶対に止められるだろうが、そんな事は気にしない。全力でこの男を倒すだけ。

母ちゃん、爺ちゃんごめんな。俺、帰れそうにないわ。でも俺は最期の時まで帝国の為に戦つたんだぜ。

覚悟を決めて目を開く

そこには、未だ身体中の砂を落としている男の姿はなく

巨大な握り拳に掴まれた男が目の前に迫っていた。

「は？」

ウェイブはそう呟くと、未だ迫る巨大な握り拳に勢いよく吹き飛ばされ、意識を失った。

---

XXXX

帝都

宮殿最上階

展望台

本来であれば、その場所は皇帝が帝都を一望する為に作らせたものであり、臣下が私用で立ち入ってはならない場所である。そんな場所にやつ——この国の腐敗の原因、オネスト大臣はいた。

豪華絢爛で尚且つ自分の体重を支えることのできる頑丈な椅子に深く腰を下ろし、右手に持つ——遠くから見れば棍棒を持っているのではないかと錯覚してしまうほど巨大な——ローストチキンを頬張っていた。

そして目の前で繰り広げられる圧倒的、蹂躪を楽しんでいた。

サイタマは地面から生えてきた手になすすべなく掴まれた。そして勢いよく空に放り投げられると、幾多もの爆撃がその身を襲った。

帝国最強の超兵器と呼ばれる帝具の中で随一の力を持ち、始皇帝の血を引くものにか使うことのできない最強の帝具

護国機神 “シコウテイザー”

「く、くつつつく、ぶつホオ！ イツヒヒヒヒ www www www。ああ可笑しい、吹っ飛んだ吹っ飛んだ www www 為すすべなく、吹っ飛んだ、あーヤバイ、腹が、腹がよじれる www www」

大臣は笑いながらもまた一口、その大きい口でローストチキンを頬張る。そしてズキリとした痛みが頬に走り、男に叩かれやっとな腫れが治り始めた頬を撫でる。

ジユクジユクとした痛みが未だ頬にはあり、先ほどまでの笑みが嘘のように消え、今度はぎりつとした表情を浮かべる。

シコウテイザーの至る所から発せられる何千何万発とい小型ミサイルの爆撃を受け、サイタマは重力に従って落下していく。

しかしシコウテイザーはその落下を許さない。

サイタマの数百倍はあろう巨大な拳を握りしめ、サイタマが正面に来た瞬間、正拳を食らわせる。シコウテイザーのその拳はスタイリッシュユがプログラミングした何万人もの達人級の武道家たちの正拳を完璧に再現したものであり、その威力は凄まじいもので殴られたサイタマは音を置き去りにし帝都の遥か北に吹き飛んでいった。

しかし、サイタマは直ぐに帝都へ戻ってくることとなった。

ドロテアがシコウテイザーに施した自動展開型魔術の1つが発動した。正拳がサイタマの命中した瞬間、不気味な魔法陣を展開し、そこから現れた黒い人の腕を象ったタールのようなものがサイタマの体には巻きついてた。巻きついた黒い腕はどこまでも伸び地平線の先まで勢いよく吹き飛ばされたサイタマの勢いを少しずつ減らし、伸びきったゴムが戻るかのように、音を置き去りにして帰ってきた。



未だ目の前で行われている惨劇を受けている男のせいで普段であれば十分に楽しめていた食事がここ何日か苦痛を伴うものとなっていたからだ。食事だけではない、ここ何日も自分がしなければならぬ書類仕事に追われ自由な時間が奪われた。それに捕まった役人、武官文官、政務官の中には少し拷問をされただけで自分との関係をポロつと口にするような不屈きものいて、そいつらを優先的に例の被験体にするよう手配した。

「まったく、苦勞しましたよ。私を大臣の座から引きずり降ろそうとする文官の目を掻い潜り、一気に増えた犯罪者たちを密かに、それでいて大量に宮殿へ運び込むのは」

しかし、目の前に広がる自分の駒が繰り広げる殺戮シヨを眺め、再び笑みを浮かべる。ドゴオン、バゴオン、ズドオンという、従来では考えられないほどの巨大な音が響くごとに煮えくり返っていたハラワタが少しずつであるが収まり、時々見える爆風や閃光と、いとも容易く破壊される街並みが自分の手に入れたものの大きさを実感させた。

「まったく、招集した帝具使いどもはまったくもって役に立たないとは情けない。仮に

も帝国の帝具使いを名乗るのであればもっと強くあつてもらわなければ」

ローストチキンを骨まで食べ終えたオネストはテーブルの上に置いてあるもう一本のローストチキンを掴み、そのまま口へ運ぶ。

「ブドー大將軍がいなくなったのは良いとして、あのエスデス將軍率いる三獣士がこうも簡単にやられるとは、誤算でしたが」

大臣は少し眉を細める。しかし、細めるだけだ。

エスデスとは互いの利害関係が一致しただけの関係で馴れ合うつもりなどさらさらない。いなくなつてしまえば代わりを探すのに少し苦勞をするだけ、代わりが見つからない訳ではない。

一際巨大な閃光がほとぼしり、周囲に巨大な突風を巻き起こす。

それにエスデスの代わりとなるには十分な戦力は手に入った、いやエスデス以上と言つてもいい。

流石、帝国随一の科学者と西国一の錬金術師、あれだけガタついていた巨大兵器をこ

うも改良を施すとは。私の想像を遙かに超える代物を作ってくれたものだ、まったくもって素晴らしい。

この処刑が終わり、反乱<sup>ゴ</sup>分子や革命軍<sup>ミ</sup>を一掃したら、2人には手厚い支援をしよう。

ローストチキンの骨をバリボリといった心地よい音を立てながら噛み砕き、ふと思つた。なぜあの2人は未だ来ないのだろうか？

シャワーを浴びたら直ぐに来ると言っていた2人。スタイリッシュの性格からいつて、過去最高傑作と謳ったコレの実践など何を差し置いてでも見たいものであろう。ドロテアでさえ、食事の時間を忘れて、体が老化するのに気がつかないほど没頭し、遂に完成したコレが動くのを開発者の1人として是が非でも見たいものであろう

ではなぜ2人は来ないのだ？

大臣はそれについて考えるのをやめた、

いや、正確には

自分の視界が急に暗くなり、血生臭くぬるぬるとした世界へと一瞬にして放り込まれた事に思考をうつつしたので

そして数秒も経たずに大臣は、四肢を裂かれ、身動き一つ取れない状態へ陥り、確実に溶かされていった。

『コレデ、イイ』

『アトハ、アイツヲ、コロスダケ』



サイタマは腰に巻きつけていたマントをなんとか外れないように縛ると、先ほどまで自分を一方的に殴っていた巨大兵器に目を向けた。

先ほどまではあまりの猛攻ゆえ、落ちそうになったマントをしっかりと縛ることはできなかつたが今は違う、絶対にこのマントは落ちない。そう確信したからこそ、目の前の巨大兵器に目を向けることができるのだ。

いや、訂正しよう

巨大怪人だ

先ほどまでのシコウテイザーの姿は甲冑をその身に纏い、真紅のマントを羽織っており、胸の中央部分にある巨大な目玉を除けば、威厳ある皇帝、もしくは軽装備の将軍だろう。

甲冑箇所が所々剥がれ落ち、その下に隠された人の体で言うところの筋肉のような部分があらわになった。

甲冑の内側にあった人のような部分は膨らんでおり、周囲に高温の蒸気を発し、その姿は異常で、メギツ、バギツ、と言ったオルゴールを巻きすぎた時に聞こえるような音が鳴り響く。

一際でかい音が胴体と両肩、膝の部分から聞こえ、その部分にあった甲冑が一気に弾け飛び宙に舞う、そして甲冑のあった場所には巨大な目玉がそれぞれあった。

ずりゆずりゆとなにかを引き抜くかのような気持ちの悪い湿った音が不快感を与え、その音の発生源である巨大な尻尾が姿を現した。

所々機械の名残を残す箇所もあるが鋭利で長い爪、肉を切り裂き細切りにする牙、ギョロリとサイタマの方を凝視する7つの目玉、今にも襲いかかつてきそうなほどの前屈みの姿勢、そして狂気に満ちたオーラ。

そう、巨大な怪人の姿にシコウテイザーはその姿を変えた。

サイタマはシコウテイザーの事をよく見ていなかった為、シコウテイザーは器械（巨大兵器）だと思っていた。しかし先ほどまでそれがあつた場所には、そんな兵器のようなものではなく巨大怪人が咆哮を上げていたところだった。

「あれ？怪人だったっけ、……まいつか」

そう呟き足に力を込める。



ミサイル発射管を全て開く。

人で言うところの肩甲骨と背骨の部分にある発射管は左右200門。

そこからシコウテイザーに内蔵されている全てのミサイルが発射する。

音速の速さを持つて敵に突っ込んで行くもの。

空中を飛行しながら龍に似た異形の化け物に変化するもの。

ある一定の割合で混ぜると黄金ですら溶かしてしまう液体を魔導の力で無理やり隔離し、目標の手前で合成されると工夫が凝らされたもの。

飛行中に発光し、雷、炎、酸、冷気などを帯び加速するもの。

飛行中に分裂し、小型のミサイルとなって再度敵に向かっていくもの。



どろっとした敵の動きを封じる為だけに造られた液体の入ったもの。

ある一定の生物が嫌いな周波数の音を半永久的に発するもの。

上空から一気に落下し途中破片となり、鉄の雨を降らせるもの。

目標の近くになると、紫やピンク、深緑などと言った毒ガスを撒き散らすもの。

種類にして50は下らない数のミサイルが合計400門の発射管から数十万発放つた。

あるものは殴り飛ばされ、あるものは蹴り飛ばされ、またあるものは地面に叩き落とされ、またあるものは蹴り返される。とある科学者があまりに優秀すぎたせいか、数十万発のミサイルは一発も漏らすことなく対象に向かって行く。

真つ黒な闇を孕んだ巨大な高エネルギーの塊を放つ

一撃で山脈を崩し、灣を干上がらせ、天候を変え、巨大なキノコ雲を作り出し、数万の命をいとも容易く刈り取り、この世の地獄を作り出す一撃。

蹴り飛ばされ、打ち上げられ、人の身では決して訪れることもできない、はるか上空で爆発。

(なぜだ、なぜコイツは余に齒向かう)

少年は理解できなかつた。

あの時も、今も、目の前の男が自分に楯突くということ

シコウテイザーの喉にあたる部分が一気に膨らむ、その膨らみが一気に喉を上昇し、口へ届く。

シコウテイザーの口にあたる部分からどろっとしたま緑の液体を滴らせる巨大な肉団子が吐き出された。

「真・近衛兵、発射!!？」

その言葉と同時にその肉団子がバラバラに分裂し、異形の兵士になる。異形の戦士の見た目は人を無理やり虫にしたかのような姿であった。

顔は蠅のようであり、目は虫のそれでいて口は蠅の口吻そのもの、背中は蜻蛉の羽のようにっており飛行速度は常人の目では追いつけない。

左腕は鍛え上げられた人のそれであったが、右腕は個体差があり、蠅の鎌のような腕をするものもあればクワガタの顎のような形をしたもの、蜂の針のように液体を滴らせた針を持つもの、剣のように鋭い腕を持つもの様々だった。

その数およそ1000

『この国は他の国と比べてとても豊かです、それだからこそこの国を狙おうと模索する輩は後を絶ちません』

大臣、お前の言っている事は正しいのか？

『やつは、再びこの帝都にやって来ます。ですが今回は前回のようには行きません。この国の全ての民が陛下の味方です』

大臣は満面の笑みを浮かべてそう言った。

シコウテイザーは肉団子を何度も吐き出す。シコウテイザーの内部にある全ての肉団子を吐き出す。

この国に忠誠を誓った近衛兵たち、貴族の地位を奪われた没落貴族たち、大臣との関係を暴露しそうになった官僚たち、厳しくなった法案により警備隊に捕まり罪の免除という甘い誘惑に負けた罪人たち。

スタイリツシュとドロテアの改造により異形の姿となった人々をシコウテイザーは



痛みで動けないシコウテイザーを尻目にサイタマは異形の兵士たちを次々と落として行く。数万の死体が秒ででき上がる。

次の一撃で殺す。

大地を震わせる勢いで地面を思いきり踏み込む、その瞬間目の前の男は瓦礫とともに空中へ浮いた。

シコウテイザーにインプットされた動きで構えを取る。

拳を握り力を込める

拳を引き更に力を込める

拳をひねり腕にある噴射口から爆発力を生む準備をする

拳を放つ、腕と肩にある噴射口からエネルギーを噴射させ一気に拳を放つ。ミギリツ、バグユリと言った壊れたような音が聞こえ右腕損傷甚大、再使用不可と言った文章が操縦室にいくつも現れる。

シコウテイザーにインプットされた皇拳寺の達人の動き、本来は機械でありそんなことはできるはずがないのだが2人の天才により、完璧な形で再現された。

名前をつけるとするならば『至皇帝正拳』だろう、力強く流れるような動作で放たれるそれは、千年続きこれからも繁栄して行く帝国を阻むどんな壁も粉微塵に砕いてしまうような未来を彷彿とさせるものであった。

しかし、その拳は男の放った拳により吹き飛ばされてしまった。

至皇帝正拳が弾き飛ばされ後ろに倒れるシコウテイザー、その姿は腐敗し腐りきった

この帝国の姿そのものと言っても過言ではないだろう。ゆっくりと、それでいて確実に倒れるシコウテイザー、しかしその目には未だ倒れたく無いという意志が残っていた。

『奥の手発動、護国豊穰』

右足を無理やり後ろに下げ、何とか崩れたバランスを元に戻す。そしてボロボロになり使えなくなった右腕やミサイルを弾き返され損傷した箇所を奥の手の護国豊穰で元どおりにする。奥の手護国豊穰はシコウテイザーの受けた損傷魔導の力で全て回復させた。

万全の姿になったシコウテイザーはもう一つの奥の手を使う。

『奥の手発動、民ノ力』

シコウテイザーは尻尾を勢いよく天に伸ばし、勢いよく地面に突き刺した。地面に突き刺さった尻尾は遙か地下深くまで突き刺さると、植物の根のように少しずつ細くなり分散していく。



「いったいどうなっているんだ？」

西の異民族の兵士はポツリとそう呟いた

数日前から国境沿いに展開されていた帝国の兵士たちの姿が消え、前線を広げるために帝国へ攻め入ろうとしたところ、この出来事に遭遇した。

兵士たちの目の前には少しずつ枯れて行く木々があつた、雪を被り緑が隠れてはいるが少しづつ目に見えてかかっている。そのせいか被っていた雪は落下している。

「うっわやべえ」

そう言った兵士の1人が帝国の領内に一歩足を踏み込んだ、次の瞬間兵士は地面から

現れた巨大な何かに包まれて「カヒユ」つという声を漏らしその生涯を終えた。

次々と地面から現れたそれに狼狽える西の異民族の兵士たち、1人が捕まりそれを助けようと2人が帝国領内に入る。それが続き1分間のその交戦で西の異民族の兵士達は7割近く死んだ。

「ギャハハハハ、奪え奪え、野郎ども!!？」

そう言つて海賊たちは帝国の港街を荒らし回っていた。

海賊たちの憎つき敵である帝具使いウエイブが消えた情報を手に入れた海賊たちは今がチャンスとばかりにここ数日暴れまわっていた。もちろん帝国の湾岸警備隊はいるが海賊と湾岸警備隊では数が違う。湾岸警備隊の連中は1人1人が鬼のように強いが1人で海賊船5隻も沈めさせることはできない。だから100隻の海賊船で港街を攻めても湾岸警備隊が5隻沈めている間にこっちの略奪行為は終わってしまうのだ。

今日もまた数万人の海賊たちが港町に乗り込み、略奪と強姦、そして殺しを楽しんで

いた。しかしそれは直ぐに終わった。

「なつ、なんだあの化け物は？」

1人の海賊がそれに捕まり物の見事にミイラとなった。

次々と地面から現れたそれは老若男女問わず人間を捕まえる、しかし1つだけ違う点がある。それはお年寄りや子供には少しの間、弱い力で巻きつきすぐ離し、海賊や海賊に乗じて街を荒らす帝国の害虫には力強く巻きつきミイラにするというものだった。

1分間という短い時間ではあったが、海賊の殆どがミイラとなり海にいた海賊たちも海中から現れた巨大なそれに船ごと握り潰された。

「海龍様の祟りじゃ」

誰かがそう言った、そして港町の人々の全てがそれを確信した。

ぬるりとした鱗を持った先ほどのそれは彼らが想像するものの中では海龍の鱗に見えたのだ。

帝都へ向けて進撃をしていた革命軍はここ数日間で初めて巨大な敵と対面した。

地面から現れたそれは革命軍の各々に巻きつきその力を奪っていった。

「各員は、武器をとり一番近いやつに攻撃しろ！」

「守るな、攻めろ！捕まった奴の救助を優先しろ」

「敵は硬い、攻撃力の乏しい武器を持っているものは下がれ、混戦で邪魔になるだけだ  
！」

何千本といったそれらに絡まれ革命軍の人間は次々に倒れていく、しかし

誰一人として死ぬものはいなかった

それは革命軍の1人に襲いかかった、万力のような強さでその1人を縛り付き、ビクンとその身を震わせ地中に戻っていった。その繰り返しである。数十万人いた革命軍の兵士たちのうち5割の兵士たちがそれに絡まれた、最初の方に襲われたものの何人かは骨折こそしていたがそれ以上ひどい怪我をしたものはいなかった。

「被害がその程度で済んだのはよしとするか」

「元帥殿、妙ですよね」

「ああ、確かに」

「帝国の生物兵器であるならば革命軍の兵士である我々を殺さないのはおかしいですし、かといって危険種だったとしても人間を食わないのは変です」

「だな」

「それに、絡まれたものの全員が『この国のために力を貸してくれ』って幻聴を聞いています」

参謀と元帥は頭を悩ませる、このまま帝都へ行くべきか、それとも戻って力を溜め直すべきか。

しかし数日後には彼ら革命軍は全員残らず帝都へ行くことになる。

目を覚ましたタツミに『レオーネが財布を盗み、その財布を取り戻すただけに帝都から数十キロ離れたナイトレイドアジトまで男が殴り込みに来てきた』と大まかな事を聞いたナイトレイドのメンバーは未だ爆睡中のレオーネを尻目にこれからの事を話しあっていた。

「まさか、レオーネが財布を盗んだせいでこんな日が来ようとは、私がつとしっかりと注意しておくべきだった」

「ナジエンダさん仕方ないですよ、帝都でスリなんてよくある事ですつて。それに姐さんの手グセの悪さはいつものことだし」

自分がしっかりと部下にトラブルを巻き起こすなど言っておけばよかつたと今更ながらに後悔しているナジエンダに対し、ラバは何とか励まそうとするが今回は無茶だった。

にへらにへらと笑っているレオーネの顔にマジックでバカ と書くマイン。それをオロオロしながら止めようとするシエーレ

タツミはブライトに裸にされていた。

注（目立つた外傷がないかも一回確認する為、他意はない）

もう一度言う、他意はない。

そして、巨大なそれが地面から突き出てきた。

その巨大なそれとの戦闘は戦力が大幅に減少したナイトレイドにとって今までに類を見ないほどのピンチであつた。

帝国の至る所でその尻尾はエネルギーを集めた。

生物の生態エネルギー、植物の生命力、温泉の効能、危険種の力、電気、風力

ありとあらゆるものを蓄えた。

そして、そのエネルギーを確認し、驚愕する。

(エネルギー充填率、計測不能か…)

皇帝は壊れきった笑顔を作る。未だ集まるそのエネルギーはシコウテイザーと直結している自分の体に激痛を走らせ、身体中の血管がいくつも切れているのではないかと思わせるほどの痛みを与える。崩れゆく意識の中でカッと、目を見開き頭に浮かんだ言葉を発す。

『奥の手発動!!? 国家総動員砲』

尻尾から巻き上げられたエネルギーはシコウテイザーの体を壊しつつ、そのエネルギーを圧縮させ放たれた。

何者にも形容し難いそれはとにかく白く美しく、目を引くものであり、時流れを感じさせないものであった。



白いそれは触れたもの全てを分解する。

今にも落下してきそうな星のかけらでも、人々の命を一気に奪い去る巨大な津波でも、何十万もの凶悪な危険種の群れでも、数千万もの敵国の軍隊であったとしても何も残さず消す。

サイタマは目の前に迫る白い巨大なエネルギーに対して諦めを感じていた。もう無理だどうしようもない。

先ほどの黒い巨大な攻撃の時だった、迫り来る大量のミサイルの時だって、結構キツかった。

虫みたいな怪人をとにかく沢山相手にした時は何度も攻撃を受けた。さつき殴り返したときだって、そのせいで力があまり入らなかった。

もう諦めよう

サイタマは諦めた

そして

ボロボロでなんとか腰巻きとして機能していたマントが闘いで吹き飛ばされないように抑えていた手を離す。

ハラリとサイタマの腰から布が一枚落ちる

しかしサイタマは気にしない、隠す事を諦めたのだから。

目の前に迫る巨大な白に向かって拳をぶつける。

「マジ殴り」

結果論として男に迫っていた白は、帝国全土にそのエネルギーをばら撒きながら吹き飛ばされた。

高エネルギーでかつ高出力だったそれはほんの数秒間ではあるがその一撃と拮抗していた、しかし土台が保たなかった。

シコウテイザーはボロボロになりながらも後ろに倒れた、先ほどの国家総動員砲で自分のエネルギーを全て使い尽くしたのだ。

それに

（余は、いや私は間違っていたのだ大臣に言いように使われていただけなのだ）

皇帝は確かに聞いた、エネルギーを溜めている時、帝国の各地から集められたエネルギー

ギーと一緒に聞こえてくる、民の声が。

(父上、余はやり直せますか?)

少年は今は亡き父親の事を思いながら、スツと倒れた。

A M 1 1 : 3 5  
サイタマ 帝都 宮殿 敷地内 全裸

## 龍と魔神

(力があふれる)

『ウラミガツノル』

(なんでもできる)

『ナニモデキナカッタ』

(今ならできる)

『イマナラデキル』

(やつを倒す)

X  
X  
I  
V

『  
アイツヲコロス  
』

あれだけ巨大であったシコウテイザーはゆっくりと倒れた。

足をだらしなく伸ばし、腕をぷらーんとさせ下を向き猫背となった。

例えるならテーマパークに行つた時の父親だ。

日曜日の朝早くから車を運転し、高速に乗る。テーマパークに着いたらチケットを購入する為に並び、乗りたくもない絶叫系アトラクションや大の大人が乗るとファンタジー感ぶち壊しなくくると回転する乗り物に乗り、吐きそうになる。元氣いっぱいな娘に手を引かれながらお城や洞窟子供の世界を歩き来する。日も沈み、暗くなつてきた。早く家に帰りたいのにも関わらず、娘と妻はパレードが観たいと言つて何処かへ行つてしまう。酒を飲もうにも明日の仕事は朝早く、二日酔いになるわけにもいかない、それに帰りの運転だつてしなくてはならない。せめてどこか腰を降ろせる場所に行こうとしても、自分と同じような境遇の人が既にはそこに倒れ込むように座っており、仕方がなしに地べたに座る。

見る人が見たらそう思わせるような状況だ。

サイタマはそんなシコウテイザーの姿を尻目に目の前に迫る龍を見据える。

サイタマが今まで戦ってきた龍の中では比較的小柄

腕も足も翼も尻尾もどれも細く小さい。しかしその口はサイタマを一口で飲み込んでしまいうようなほど大きく広がっていた。

上空から突如として現れ、錆びた鉄のような臭いを漂わせながら近づいてくる龍に、サイタマは軽い不快感を覚える。拳を握り、血の滴る牙を向け自分を丸呑みにしようとする龍めがけて拳を振るう。



その無慈悲な拳は生物の常識外のスピードをもつて繰り出され、硬い鱗を持つ龍の身体を容易に貫いた。哀れにも襲いかかつてはいけない存在に襲いかかった龍はその一瞬で物言わぬ肉の塊へと、その身を変えた

はずだった

「あ」

龍はサイタマの攻撃が当たる直前で頭を亀のように体の内側にひっこめ拳を回避すると空中でくると身をひるがえし、歪なまで巨大化した尾でもつてサイタマを地面へと叩きつけ首元までめり込ませた。

龍は肩まで土に埋まったサイタマめがけ更に追撃するかのようには思えたが、何かに気がついたのか追撃する事なく上空へと飛翔した。

その直後にサイタマの真上に巨大な氷塊が降ってきた

その氷塊は空を覆い尽くすほど巨大で、もはや冰山とよんでも過言ではないほどであった。並みの城塞なら破壊しかねない巨大な氷塊は加速し錐揉みしながらその破壊力を増し、サイタマのめり込んでいる場所へ向かって落下して行く。

サイタマは地面から這い出ると、軽く身体についた汚れをはたき落とす。先ほど龍に変な体勢で埋められたせいかわ脇の辺りや膝のあたりが特に汚れていて少しはたいただけでは汚れが落ちそうにないことに少しばかりのショックを受ける。

落下してくる氷塊はだんだんとその大きさを感ぜさせる。

汚れを落とすのを諦め、サイタマは巨大な冰山めがけて勢いよくジャンプする。周囲の地面に亀裂が走り地盤が変形し宮殿の一部が大きく傾く。それとほぼ同時に拳が冰山を貫いた。巨大な冰山は氷の塊となり氷の破片を撒き散らしながら、宮殿内部や帝都の宮殿周辺の街へととんでいった。

そして、サイタマは巨大な冰山に隠れるようにして近づいていた筒状の氷塊の中に吸

い寄せられるかのようにして入って行った。

筒状の氷塊は外側には年端もいかなない少女が精巧な彫刻で施されていた。少女の氷像は薄いワンピースと脚まで伸びた髪が風に揺れている様子が見事に表現され、胸の辺りで組んでいる細い指一本一本がしっかりと形取られていた。そつと目を閉じ何かを待つかのようなその表情は耳をすませば呼吸の音が聞こえるのではないか、そう錯覚してしまうほど見事であった。

「アイス・メイデン  
氷の処女」

そつと囁くような冷たい女の声が聞こえ、少女の氷像の目がぱちりと開く。美しく、ガラスのように透き通った目、氷像でありながらも吸い寄せられてしまいそうなほど美しいその瞳は人であればその容姿と際立って数多の男を魅了し、庇護欲を誘う事は間違いないだろう。

帝都の芸術家や幼児性愛者が見たならば己の全財産を投げ打つてでも欲しいと願うほどの逸品である事は間違いはなく。芸術家でなくともこの氷像が博物館にでも展示されれば、連日連夜、人々は列をなしこの少女の氷像を見ようとするだろう。

しかし、そんな美しい少女の氷像は容赦の無い男の拳により内側から粉碎された。

吹き飛ばされた氷片には美しい彫像の残りと人体であれば肉を容易く突き刺し骨ごと貫いてしまうのほど鋭く尖った氷の棘が無数に入り混じっていた。

「やはり、その程度では倒せないか」

巨大な冰山と氷の処女を作り出した女は実に楽しそうに笑う。

サイタマは華麗に地面に着地しようとしたが、足元にあつた氷を踏みツルツと滑りコケる。

一瞬の間が空き、サイタマはその事が無かつたかのようにして立ち上がるとその笑い声が出た方をむき、その姿を確認した。

体の至る所が氷で覆われ、肌の所々が薄い灰色。左右非対称でどう考えても翼の役割をしていない氷の翼は右側が短く左側が歪なほど大きかった。腰よりも長く伸ばした髪は透明度が高く髪に向こうの空が見えるほど透明で透き通っており、腰に当てていた手が様になっていた。

「なんか、あのガキを思い出すな」

サイタマはその姿を見てS級ヒーローの1人を思い出す

背丈や発育、髪型も全くもって別物であるのだが、そのポーズと常に余裕そうな態度から、ふと思い出してしまった。

『ジヤマヲスルナ、コイツハ オレガコロス』

自分もろとも巨大な氷山で押し潰そうとしたエステスに対し龍は低い唸り声を上げ、牙をむき出しギロリと睨みつける。

並みの危険種ですら逃げだしかねないその眼光は以前のエステスであれば身震いする（もちろん武者震いである）ほどのものであったが、今のエステスからしてみればなんの痛痒も感じさせないものであった。

しかしエステスは龍が顔につけている ソレ に目を向け、少しばかりの興味を抱く。

「まさかあの時のフライングデスがここまで強くなるとはな、それにその顔につけているのはバルザックか？」

エステスは目の前の龍を観察する。唸り声をあげながらこちらをギリツと睨んでい

るその龍はいつだったかフライングデスの飼育場で見た、特級危険種レベルにまで強く  
なったというフライングデスのボスだっただろうか。

しかし、だいぶ違うな

(以前見た時よりもだいぶ小さくなっている、いや違う骨格や筋肉のつき方がフライン  
グデスのそれと全くもって違う?)

エスデスは昔、生きたまま解剖したフライングデスの体の構造を思い出し、記憶の中  
のそれと目の前にいる龍を見比べる。フライングデスにはない箇所には筋肉があり、明ら  
かに骨や関節の数が増えていた。それによく見てみると爪の鋭さや鱗の硬度が帝具の  
材料を思わせるほどであった。

フライングデスが鉄の鎧なら目の前のコイツはオリハルコンか、不意にそんな言葉が  
口から出た。

少し間が空き、エスデスが龍の事をじっくりと観察していると今度は龍が口を開いた  
『ヤツハ、オレガコロス、ソレガアイツラヘノタムケニナル』

ジャマラスルナラオマエカラコロス、その言葉を聞き、エスデスは獣のような笑みを

浮かべる。そして目の前にいる龍と下で何かを探している男を交互に見る。

顔に右手をあて悩む姿は彼氏に買ってもらった誕生日プレゼントを決めかねている年相応の女性であるが、その人からかけ離れた姿からは、どちらの獲物の方が美味しいのか考えている捕食者のそれに近かった。

「ふむ」

ほんの数秒、戦闘の最中であれば自分の首が飛びかねない時間の中エスデスは少しの迷いはあったものの自分の中でどうするかを決めた。

「今のお前と殺し合うのも面白そうだ。しかし、生憎だが私は強いやつと戦いたくてだな、今更トカゲなんぞを相手にしている暇はないのだ」

そう言うと顔に当てていた手を前に出し、パチンと軽く指を弾く

するとエスデスと龍の丁度中間の位置に以前のエスデスと同じ姿をした氷の氷像が



三体出現した。

「アイスマン氷人形と言ったところか、未だ実験段階だが中々使えそうだな。私は強いやつと戦いたいのでな、お前はコレと遊んでいろ」

エスデスはそう言うのと、龍に向けていた視線を男に向け、そして男めがけて一気に急降下する。

エスデスが行った途端、氷人形は動き出し腰の部分に持っていたサーベルを抜き、龍へと突き刺す。

しかし、龍の異常なまでに膨らんだ右腕により氷でできたとは思えないほど鋭利なサーベルは砕かれてしまった。氷人形は次の動作のためいきに距離をとるが、一瞬のうちに距離を縮めた龍の巨大な顎門により粉々に噛み砕かれる。

『ジカンカセギニモナラン』

バリボリといった心地よい咀嚼音を立て、氷を噛み砕きながら龍はそう呟き、口の中に残っていた氷を飲み込む。そしてその小さな翼をたたみ、エスデスの後を追うように男めがけ下降していった。

---

帝都から南に少し離れた所

荒れ果てるところどころひび割れた水気のない大地と帝都からここまでのびている少し整備されていると言えなくもない街道以外は何も無い場所。

そんな場所に帝都から避難してきた大勢の人々は集まっていた。

人々は帝都警備隊指示のもと秩序だつて行動し、今は一時的にここら一带にテントを張り、少しの間だけ帝都から避難していた。

ずっと歩き続けた人々が健康な人間だけであればもつと遠くまで避難できた。だが、老人や怪我人を優先的に避難させたため、あまり遠くまでは移動できなかつた。それでも警備隊が予想していたのよりずっと遠くまで避難できた。

朝早くから叩き起こされた者たちの足取りは遅く、苛立ちを覚えながら警備隊に対して愚痴を零す。

避難している間に店に泥棒が入ると困るからという理由で店の商品を馬車いっぱいに乗せる商人や、その商人を見て家に忘れ物を取りに行く住民たちで道が混雑する。

警備隊が指示を出したのにも関わらずロクに聞かない住民たちのせいで道はさらに混雑し、避難しようとする人間と家に忘れ物を取りに行く人間が肩がぶつかったや足がぶつかったで揉め事を起こし、後ろから押した、押してないで揉め事を引き起こす、人混みに乗じてスリが現れ避難勧告が出て30分経っても避難は一向に進んでいなかったのだ。

大勢の住民たちが避難勧告に危機感を持っていなかった。

しかし、帝都北側で起こった爆発音や遠くからでもわかる天空に舞う人影が出現してから事態は急変し、人々が我先にと避難した結果、当初予定していたのよりも遠くまで避難できた。

そして現在、帝都警備隊は

「怪我人はいませんかー」

「暖かい飲み物あります」

「まだマントが渡っていない人はいませんかー」

「体調のすぐれない方は赤い旗の立っているテントまで来てください。医療班がしっかりとした手当をします」

「おらつ、新人どもも23番テントに毛布と食料運べー！」

「はい」

その多くが休みなく働いており、それぞれ割り振られた仕事をしていた。

——に物資を届けていた。その物資と言うのも、とある人間が、道を塞ぎ避難を妨げた商人から無理やり買い叩いたものをここまでは運びこんだもので軽く数万着あった。買い叩かれた商人は涙目であつたが、とてつもなく美味しい葡萄酒を貰った為なんとも言えない表情をしていた。

買い叩いた本人は

「いいかてめえら！おそろくこの戦いは数日で終わる！帝国が勝つか！あの男が勝つか！そんなもん知ったこつちやねえ！だがなこんな状況だと強姦や火事場泥棒の被害者になるやつが必ず出る！これはなんとしても避けなければならねえ！いいか！てめえら近衛兵はそれを未然に防ぐためパトロールだ！必ず最低3人で行動しろ！変なやつがいたら止める奴！応援を呼ぶ奴！周囲を警戒する奴！仕事を分担しろ！応援には今配っている玉を使え！地面に叩きつけると煙が出る仕組みになっている！応援を見た奴はすぐに現場に向かえ！わかつたら返事！わからなくても返事！」

「ハッ！ハッ！」

「医療班！報告しろ！」

「ハッ！怪我人1253名、その内擦り傷かすり傷等の軽傷者907名、打撲捻挫等の負傷者254名、骨折 刀傷等の重傷者79名、意識不明の重体13名であります」

「意識不明の者もってこい！私が直々に診る！患者の容体に合わせてゆっくりでもいいから持ってこい！」

「ハッ！」

「お忙しいところがすいません、帝都から傷だらけの兵士たちがおよそ10万人、どんどん数を増やしながらかこちらに向かつてきます」

「健康な体の奴らを全員集めろ！4番テントと8番テントの倉庫に数日分の食糧の備蓄がある！そこを解放し兵士へ配る！私も重症患者と内部のクソ野郎共を一掃したらそちらへ向かう！私がそちらへ着く前に兵士たちに温かい食べ物配れるようにしておけ！」

「ハッ！了解しました」

そう言つて走り去つて行く警備隊の1人を尻目に一息着く、どうせ数秒後には自分は移動しなくてはならないのだ

声を張り上げ怒鳴り散らし、警備隊と近衛兵と健康な人間を使い即席の部隊をつくり、的確で正確な指示を出し、物資の分配や各テントでの問題やトラブルがないか目を光らせる。

ところどころ汚れた燕尾服の埃を払うと胸ポケットから30センチほどの竹櫛を取り出し、白髪一本ない自慢の真っ黒なオールバックの髪を整える。

誰しも慌ただしく動いてる中、その瞬間だけ男は1人その場から切り離される。

「で！帝都の中はどうなつてた！」

髪を整えながら、何か返事があるのを待つかのように呟く

『……………』

「は！あいつが負けた！つうことは！」

少しの間が空き自分のすることが増えた事に心の中でため息を吐き、仕方がないと割り切る。

男の仕事にはそんな事よくあるからだ。

『……………』

また少しの間が空き、近くで見なければわからないほどでしかないが肩を落とす。

男の仕事にはそんな事 r x

「わーつたよ！こっちは近くの森に！暖をとるための薪と食料になる危険種を狩りに行かねえといけねえから！」



『……』

「はーそりゃー！どう言うことだ！って！おい！」

竹櫛を握りもう一度握り締め何かを確認する、しかし竹櫛は持ち主の思い通りにならず、軽く舌打ちされる。

男の仕事には r y

「ったくー！ふざけやがって！」

整え終えた髪を軽くなで胸ポケットに竹櫛を仕舞い込み、今度は目に見えるほど深いため息をついた。

男の r y

一瞬の出来事であつた

世界が氷に包まれたのだ

サイタマが崩壊した宮殿の方から降ってきたチエインシャツと皮のズボンを全裸でいるよりはマシだろうと思ひ、着ていた最中であつた。

遙か上空から降り立ったエスデスは地面に着地すると同時にその身に新しく宿つた力の一部を解放する。

背中にある左右非対称の翼が白く強烈な光りを放ち、エスデスの体は更に強烈な冷気に包まれた。

エスデスは体に纏っている冷気をその掌に集める。空気を凍らせるほどの冷気は止まる事は知らず掌に収まりきらないほどの大きさとなつた。数時間前のエスデスの内

包していた力の数十倍はあるであろうそれを躊躇する事なく上空へと打ち上げる。打ち上げられた冷気の塊は帝都の遙か上空で弾け飛び、内包していた力を一瞬で解放させた。

そして今所々穴が空き壊れかけていた宮殿も内部まで氷漬けになり、崩落していた壁も落下途中の壁の破片も空中で静止し、その動きを止めた。宮殿を囲うようにして存在していた巨大な城壁も下からてっぺんに至るまで全て凍っており最初よりも分厚く巨大な氷の壁を作り上げていた。

常に人の身を凍てつかせる強烈な吹雪がおこり、日の光を遮る分厚い雲の中から人々容易く押しつぶしてしまいそうなほど巨大な電が無作為に落ちてくる。あちらこちらで落ちてくる巨大な電は凍りついた地面や帝都の凍りついた建物を破壊していく。破壊された箇所には電がその場にとどまり歪な氷の水晶を作り上げる。

「素晴らし〜」

エステスは自然とそんな言葉を漏らしてしまう。  
彼女がそう漏らしてしまうほど、この出来事は素晴らしいのだ

帝都上空を厚い雲で覆い、猛吹雪を巻き起こす自分の力　いや帝都だけでなく恐らく帝国、いや近隣諸国にまでこの猛烈な吹雪は影響を与えるだろう。

しかし、これだけの事をして未だに力が溢れてくるそんな自分が手に入れた力の強さを差し置いて、彼女は素晴らしいと漏らした

勿論、芸術のセンスがあまりない彼女が帝都の凍りついた様子や至る所にできた氷の水晶を見て素晴らしいと思っっているわけでもない。

目の前の男

寒さに震えながらも

自分に立ち向かうこの男

上空を飛翔する龍

一撃で氷人形を倒し  
殺しにかかる龍の

そう

素晴らしいのだ

これほどまでに強い相手と戦える

その事実が彼女に素晴らしいと思わせるのだ。

数時間前、彼女は何も出来ずに終わった。

ブドーを倒したほどの強者

楽しみで楽しみで仕方がなかった

どうやって戦う？どうやって攻めよう？何か帝具を使っているのか？使っているとしたら時間制限があるのか？倒した後は？どうやって屈服させようか？いや、どんな拷問にかけようか？どんな命乞いを聞かせてくれるのか？

そんな事ばかり考えて、珍しく一夜明かしてしまったほどだった。

目の前で三獣士がやられた

それも一撃で

三人とも別々の方角から奇襲をかけた、しかしその奇襲はまるで効かなかった。

ダイダラのベルヴァークを人差し指と中指だけで止め

リヴァの水龍を拳で吹き飛ばし

ニヤウの背後からの奇襲はまるで最初から効かないのを分かっていたのか敢えて受けていた

ニヤウが吹き飛ばされるかされないかの時、私はいつのまにか男に対してハーゲルシュプルングを放っていた、少し力み過ぎたせいかもしれないもの倍くらいの大きさにしてしまった。しかし、この男ならなんとかするだろう。

数秒たつて少しばかり不安が走った、いささかやり過ぎてしまったか？まさかこれで終わりではないのか？そんな不安がよぎった。しかしそんな不安はハーゲルシュプルングが帰ってきた事で、かき消された。

(そうか投げ返してきたか)

放った時よりも早く、音を置き去りにするかのような速さで近づいてくる。

ギリギリの所で回避する。

楽しかった、どんな危険種や強者であれど私が全力を出せば容易くその命が失われる、あの大技を壊すでも回避でもなくまさか投げ返してくるとは。単騎で帝都へ乗り込んでくる気概といいこちらの予想を遥かに上回る戦い方、どんなやつなのか実に気になった。

一瞬目、男と目があつた

戦いの最中であるのにもかかわらず、その目は敵を認識する目ではなく、ただそこに

エスデスがいるという事実を認識しただけ  
能面のような目だった。

面白い

その顔を変えてやろう

この場は戦場である、にも関わらずその油断しきった目  
それが貴様の命取りであつた事を後悔するがよい

普段の数倍、いや数十倍数百倍規模のヴァイスシユナーベルを男を基準に扇状に展開  
する。数百本ずつ0・1秒のタイムラグを作り1秒に千本それを数十秒、右足を狙うもの、  
左足を狙うもの、肩を狙うもの、胸を狙うもの、頭を狙うもの、右腕を狙うもの、左  
腕を狙うもの 別々に狙いを定める。そして放つ。

陸上の生物というものは基本、体の一部分が大きく損傷すると体の動きが鈍くなる。  
例えば動物、どんなに強い肉食獣でも足を一本でも失おうと、自ら餌をとることのでき  
ない弱者へと成り下がってしまう。

兵士だつて同じだ、戦いの最中怪我をする事はよくある、だから兵士たちは怪我をし



たら直ぐに後ろに下がるのだ。勝てる戦いでも下手に手負いで前に出ると取り返しつかない大怪我を負うからだ。

目を失えば戦闘で相手との距離感を失い、視野が狭くなり、肩を斬りつけられれば、下手すると一生腕が動かなくなる。腕が無くなれば、走って逃げる事も上手くいかなくなるし、足が無くなれば、そもそも逃げる事すら叶わなくなる。

そんな当たり前の事は十分理解しているし知っている。だから、敢えてバラバラに狙いを定める

無論、相手が回避する事を予測していつでも軌道修正を行えるようにしておく。

(おそろしく回避に徹すると思うが…)

エスデスは氷の剣に体の至る所をズタボロに斬り刻まれた男の姿を幻視する。

1秒 たったそれだけの時間で千発もの氷の剣が男へ向かう

しかし

体の至る所を狙った氷の剣は男によって全て回避された。

戦士のように後ろに後退するわけでもなく、暗殺者のように身を低くして横に逃げるでもない、かといって身を翻すようにして避けたわけでもないし、空高く跳躍し地面から遥か上空へ飛び上がったわけでもなかった。

ただ単純に回避しただけである。

0・1秒ごとに100本もの氷の剣が男の体の至る所に狙いを定めて放たれる。初撃を回避しようにも0・1秒後には男の動きに合わせて軌道修正された氷の剣が再び飛んでくるというのにも関わらず。

前に一步踏み出したと思えば近づいてくる氷の剣を紙一重でかわし、手をパツと上にあげ回避し、足を軽く内股にして回避し、顔を少し傾けて回避する。

その動きは酔っ払ったおっさんのそれに似ていて予測が難しく、エスデスが今まで戦ってきた武術家や武道家、暗殺者とも全く異なっていた。

そして男の能面のような顔は少しずつ変わっていく

やめろその顔はやめろ

(ここは戦場だ、私はお前の敵だ)

段々と距離を詰めてくる男　その呆れたような顔が段々と近づき苛立ちが募る

男との間に巨大な氷の壁を作り上げ、先ほどの数倍の力を込めたハーゲルシュプルングを壁の向こうに落とす。

そして目の前にある自分が作った氷の壁を壊し、ちょうど拳を振り上げた男に自ら近づく。地面を凍らせ、摩擦係数を減らし、異常なまでの速さで滑るように距離を詰める

(私は全力を尽くしている。なのになんだその貴様の顔は)

こちらに一切気付くそぶりのない男をその周囲の地面もろとも凍らせる

どうせ直ぐに氷を砕いて出てくるだろう、だがそれでもいい。

(貴様がその顔をやめ、私と全力で戦うのなら)

そう思っていた

そしてエスデスは敗北した

「いや、あの時戦いにすらなっていなかった」  
何も無い虚空を見つめてポツリと呟く。

数時間前の事にも関わらず、遠い記憶の出来事であるかのように思い出す。あの時、男が氷を打ち砕いた後、確かにサーベルを抜いた、それまでは覚えている。

しかしあの一瞬だけ、私ですら追いつかないほどの速さで何かをされた。

そう、あの時、私は負けたのだ

完璧なまでの敗北

「しかし、そんな事などどうだっていい」

この世の中強いものが勝つのが当たり前

弱者は淘汰され、強者のみが生き残る

今はこいつと全力で戦いたい

「だが…」

ブドー大將軍が力を溜めていたため時、帝都の上空は分厚い積乱雲で覆われていた。しかしブドーがその積乱雲の力を使った事とサイタマとシコウテイザーとの戦いで発生した膨大な爆風が分厚く巨大な積乱雲を吹き飛ばし霧散させ、帝都上空は晴れてい

た。

しかし、エスデスが自分のエネルギーを使って天候を猛吹雪へと変化させる氷嵐大將軍ひょうらんたいしやうぐんを放った事により今度はブドーが作り上げた雲よりも更に分厚く広範囲にわたる雪雲を作り上げた。

そしてもうひとつ、自分の半径数キロ圏内を弾丸のスコールや砲弾の飛び交う、この世の地獄である戦争の最前線を雹ひょうこくにより再現した氷獄ひょうごく 寒冷前線かんれいぜんせんを無意識に発動したのだ。

今や帝都は人の住むことの叶わない極寒の地と化した。

「力がさらにみなぎるな」

エスデスは自身の手をグーパーさせてその力を確認するかのようなそぶりを見せる。今までであればこれほどの大技を一度でも放てばその場で倒れ伏していただろう、にも関わらず一切の疲れを感じない。それどころか未だ尚力が増しているのを感じていた。

それもそのはずである、エスデスは吹雪を起こし、無意識に自分の身体の至る所に生えている氷の皮膚と同じ性質でできた巨大な雹を地面にぶつける事で上空で増幅され

た冷気のエネルギーを効率よく循環させ増幅させ利用しているのだ。  
「これだけあればできるか」

『爆・嵐・焰』

エスデスは一時、思考を停止させ回避運動をとる。そして先ほどまで自分がいた場所では自分の起こした吹雪を一時的にであるが空白にするほど巨大な爆発が起こり、炎の柱が姿を見せ、その熱波を暴風が周囲へばらまいていた。倒れ伏したとはいえ巨大なシコウテイザーよりも巨大な炎の柱は極寒の世界に一瞬ではあるが灼熱の地獄を顕現させた。

『雷・腐・氷』

「あー、またスポンが燃えた」

そんな声が聞こえた気がするが無視して、今度は氷の壁を作りその攻撃を回避する。しかし、氷の壁は雷と紫色の液体を纏った氷の塊により碎かれる、そして紫色の液体がエスデスの皮膚にほんの少しばかり付着した。

エスデスはその部位を手刀で切り落とし、その部分を凍らせ止血する。切り落とされた部位は落下と共に液体が付着した箇所から紫色の液体が付着した範囲が広がり、地面につく前に蒸気となって消えた。

エスデスは攻撃が飛んできた方を軽く睨みつける。そこには小柄な龍が猛吹雪の中、巨大な雹をその身に受けながらホバリングしている様子が見れた。

「うっわめちやくちや吹雪いてきたな」

自分の身体のサイズに合わないチエインシャツを着ているおかげか下半身が微妙に隠れているサイタマの呑気な声は目の前の獲物を目前としたエスデスには届かず。エスデスは不敵な笑みを浮かべ力をふるう。

『氷鬼兵』、『百戦錬磨 冬將軍』『凍死ヲ招ク悪魔』

一際強力な吹雪がエスデスの半径百メートル辺りに吹き荒れる。あまりにも強力な吹雪であったため龍はほんの少しだけよろめき、サイタマは顔にはりついた雪を手で払



うことになった。

一際強い吹雪が周囲に溶け込むとそこには100を超える影があつた。姿かたちには差異はあれど、どれも異形で並みの危険種を上回る力を内蔵させている。今のエスデスには数段劣るが生身の人間なら触れただけで身体の芯まで凍らせるほどの強烈な冷気を放っていた。

「これならどうだ？」

吹雪でかき消えるほどの声でエスデスはそう呟いた。

「3番テント！薪が足りないとの報告です」

「7番テント吹雪により飛ばされました」

「2番3番4番3番7番テント、薪が足りません」

「食料庫に保管していた備蓄の食料が凍りかけてます」

「吹雪で凍傷になりかけているもの、未だ増加中です！」

次々と警備隊や近衛兵、医療隊から上がってくる嫌な報告に頭を抱えながら男は耳を傾けていた。

「やばいな！」

突然天候が変わったかと思うと強烈な吹雪が起こった。

強烈な吹雪はまるで改二がきて、やったーと思っていたが、未だ地味で芋臭いと言わ

れ、何処そのTに憤りをぶつけているかのような、すさまじさを感じさせる。

先ほど近くの森林で木々を伐採して薪を作ったがこの吹雪のせいで殆どが吹き飛ばされるか雪に埋もれた。近衛兵や警備隊の面々に吹き飛ばされた薪を拾いに行かせるにも掘り起こそうにもこれだけの吹雪の中だと寒さで身体が動かなくなる。

(警備隊の装備なら持つて五分！近衛兵なら30分！一般人なら1分！持たないか)  
吐く息ですら瞬時に凍るこの世界でどうすればいいのか。

「最善を尽くす！」

男は動き出した、帝都から避難して来た百数万人の命を救うために  
仕方がない

男の仕事にはそんな事よくあるからだ。

全身が蒼く身の丈7メートルはあろう鬼は凶悪な笑みを浮かべながら、丸太のように太い腕でサイタマの顔面にパンチを入れる。腕よりも更に太い足の踏み込みは足下にはられた氷に蜘蛛の巣のような亀裂を走らせた。血管浮き出るほど鍛え抜かれた腕は筋肉の膨張によりその大きさを数倍にまで膨れ上がらせていた。そして、音速をゆうに超えるその拳は真つ直ぐにサイタマの顔に決まる。

樹齢数百歳の大樹ですら一撃で粉微塵にし破片を数百メートル先へ吹き飛ばすその一撃はまるで引き寄せられるかのようにサイタマの顔に決まったのだが、サイタマのお返しの一撃により鬼は吹き飛ばされた。

血飛沫は飛ばない、代わりに周囲を強烈な冷気の奔流が巻き起こる。

鬼は自分が怪我を負った事を認識し、距離をとり警戒する。

そして次の行動を移す事なくその場に倒れ伏した。

本来であれば後ろに下がり同族たちに敵の強さを伝える手筈になっていたのだがサ

イタマの拳を受けた鬼は胸より下半身は無事であったが上半身は吹き飛んでいたため同族に敵のヤバさを口頭で伝えることはできなかつた。

しかし、死んだ鬼は敵の強さを伝える事はできた。

鬼たちの身体には生き血のような真つ赤な刺繍が彫られており、召喚された三種類の中でいちばん数が多く50体ほど。角の形や数、髪型で多少の個性は見受けられる。

先ほど男に殴りかかったのは左腕の二の腕の部分にしか刺繍はなかつた。それはこの鬼たちが身体の刺繍の数で個々の力関係を表しているからである。強い鬼であればあるほど刺繍は全身にあり、その数を増やす。先ほどの鬼はこの50体の中では格段に弱い個体であつた

それでも一体が特級の危険種を優に超えるを有している。

同族が死んだ事により鬼たちは瞬時に思考を切り替える。

鬼たちは全身に力を込めて、臨戦態勢をとる。

生き血のような真っ赤な刺繍が赤く発光し、角が更に太く長くなる。爪は伸び、牙は剥き出しになり髪は逆立つ。

少しの間が空き、空気がシーンと静まり返る。そして鬼たちはサイタマのかかつてこいよ、という言葉と共に一斉に動き出す。

鬼たちの戦いは始まった。

鬼よりは数が少ないが帝国では見かけない甲冑を身に纏う集団がいた。帝都よりも東に位置し、周囲を海に囲まれた国で見られるという甲冑、鎧兜は氷で作られていた。そんな鎧兜の集団は空を飛ぶ龍目掛けて幾度となく氷の刀で斬撃を放っていた。

一閃 刀が鞘から抜かれた瞬間、氷の斬撃が飛ぶ。

鎧兜の数はたった10、しかしその飛ぶ氷の斬撃は上空を飛翔する龍の行動を制限するのには十分だった。

「ナンドモナンドモチマチマトウザッデエ」

氷でできた鬼の集団に吹き飛ばされたサイタマを気にとめる暇もなく、龍は目の前に迫る数百の氷の斬撃を身を捻り翻しながら回避する。そして10いる鎧兜の1つに向けて爆のプレスを放つ。バスケットボールほどの大きさのそれは鎧兜たちからしてみれば余りにもお粗末なプレスではあるがその内蔵するエネルギー量は膨大だった。5メートルはあろう巨大な雹はプレスに近づくにつれその巨体を溶かし最後には水蒸気となって吹雪の中に消えた。プレスの周囲だけ極寒の吹雪が掻き消される様は鎧兜たちが恐怖し身じろぐには充分だった。

しかし爆発し高温を周囲に撒き散らすそのプレスは身体が雪の結晶の形をした半透明の生物によってかき消された。

成人男性ほどの大きさの結晶型の生物はプレスを受ける瞬間、前方に向けて体を高速で回転させながら冥府の冷気を放つ、そしてその体に直撃する頃にはプレスの威力は弱まってしまふ。しかしそれでもプレスの威力は強く食らった結晶型の生物は力なく落下する。だが、どのような原理かわからないが、いつのまにか元の大きさとなって戻ってくるのだ。

1匹に狙いを定め襲いかかろうにも他の39匹がそれぞれ盾になり、その間に鎧兜が氷の斬撃を飛ばしてくる。それを回避しているとまた40匹となり再び攻撃してくる。

「ウゼエウゼエ、オレハテメラナンカアイテシテルヒマハネエンダヨ」

決め手に欠ける攻撃が続キイライラが募る。

体をバキリボキリと鳴らし龍は体を更に小さくし、結晶型の生物の半分ほどの大きさになる。無理矢理体を小さくさせているせいか龍の身体に至る所に内出血の跡や体に収まりきらない骨が皮膚を突き破りそうなほどに持ち上げている箇所が見られる。

翼だけを巨大化させ地面に向けて急降下する。

向かってくる結晶型の生物は当たると強烈な爆発を巻き起こす体当たりを繰り返してくるが。

「オソイツ」

龍の落下するスピードは結晶型の生物が龍に当たるのよりも早く、数千メートルの高さにいた龍は一瞬で地面へとたどり着く。しかし龍は鎧兜の氷の斬撃は何度か受けてしまい翼の殆どが凍りついた。

「クライヤガレ、爆・嵐・焰、雷・腐・氷」

距離をとったりつつも斬撃を放ってくる鎧兜に向かい、爆・嵐・焰を放つ。回避行動をとった鎧兜たちだったが落下の途中に放っていた特殊音波をモロに浴びていたであろう三体は動きが鈍く爆発の中にその身を吞まれ消えた。巨大な炎の柱により上空にいた結



晶型の生物も5匹ほど溶けてなくなり、再生する様子はない。どうやら完全にその体を維持できなくなると体は溶けて無くなるらしい。龍はそうだと決定づけた。

雷・腐・氷は近くまで迫っていた結晶型の生物に放ったが最初の一匹が殆どの威力を抑えてしまい、毒が飛び散った9体と合わせて10体しか倒せなかった。

体を元の大きさに戻しながら翼に血を送り体温を温めつつ翼の氷を溶かす。体温的に数百度を超えているはずなのだが未だに降る吹雪や冷気を放つ氷塊のせいか翼の氷の溶ける速度は遅かった。

その間にも結晶型の生物が焔の柱の周りを囲み冷気を放ちながら焔の柱を弱めていた。鎧兜はこちらが攻撃するまで攻撃を仕掛けてこないのかじつとしていた。

「コノママジャダメカ」

猛吹雪の中、龍はポツリと呟く。

悪天候でも視界は良好であるが吹雪のせいで体力がガンガン奪われる。常に巨大な雹が降り、一体一体がRPGの水エリアの隠しボスクラスの敵と消耗戦をしていたら裏ボスエスデスと負けイベサイタマまで体力が持たない。

なら、チート使つても勝ちに行くしかねえな。

「おやおや、珍しいね。あんたが針治療をするなんて」「普段使ってる肉料理わ?」「中位回復使わないの?」「こおりなおし ぐらい常備してるでしょ?」「あー、死人出した? ほうこうこくしよ、ほうこうこくしよ!」「エリクサー使わんの?」「バケツとコーラないの? 使えんなあ」「気を使えば楽勝だろw」「ここいら一帯焼けばあつたかくなるのに」「なんだっけ? せんびーんずだったら一発じゃない?」「うわあ、あの針一本一億じゃなかったけ:」「さけもつちえこーいげははは」「もう呑むなや」「ヒヨコ饅頭食べたい」「中身はもちろん」「こし餡(粒餡)」「ああああ?!?」「やるか、戦争?」「上等だオラア」

燕尾服の男は自身が展開した多重結界の外から中へ入ってきた少女たちへ目を向ける。全員が全員同じ顔で浅葱色の髪、同じ服装。華奢な腕は力を込めてひねれば折れてしまいそうなほど細い。

しかしその腕には2人ずつ少女たちよりも大きな人間が乗せられていた。年は少女たちよりも少し大きい十代後半くらいの少年少女で黒い学生服に龍を象りひび割れたヘルメットをつけていた。

「この子たちクスリで頭イかれてるし体内ボロボロだけど国への忠誠心強イから復興に役立つと思イます」「くる途中、暴れてめんどかつた」「ヘルメットwわれてるーw」「結界幾つ張つたの?なんか寒さまで塞がれてる」「多分、私たちクラス100人で1つの結界破壊できれば優秀クラスだよ」「お味噌汁飲みたい」「わたしワカメと豆腐」「ジャガイモ:」「生卵とポン酢あと重油」「で?怪我人何人?もし必要なら手伝うよ」「本体は先に戻りました」「そのバンジの実わたしのだけど?」「じゃあそのマゴの実返してくれる?」

口々に思い思いの事を言っている少女たちの持っている患者を受け取り重要な話だけを聞く。余計な事や馬鹿みたいな事を言っているやつは患者を受け取ったあともう一度結界を張り侵入拒否に設定する。

「それで!あと何人来る予定だ!」

「そうね、帝具使いの何人か転生者のフライングデスに食べられちゃったけど、後10万くらい?」

「全く!この人で普通の人間はキャパオーバーだ!」

燕尾服の男は胸ポケットから鉄櫛を取り出し前髪を少し整える。その顔には疲労が

見え、顔には汗が滲んでいた。

「普通の人間相手は疲れるの？それとも今回みたいなのは苦手？」「今日これからどうする？」「取り敢えず帰る手続き取って帰る」「交代のメンツよんどけよ」「メロン食べたい」「ドライ栗マンゴウかけ極楽米、ポイズンポテトと真鯉昆布（左脇腹町産）の味噌汁、あと空飛ぶキャベツのおひたしデザートは間宮のアイス」「あ、ごめんこれから私次の仕事あるから」「そっか、じゃあ残念」「まあ仕方ないな」「なんやて」

男は溜息を吐き出し目の前にいる少女以外の話の通じなさそうな少女たち100000人をいっぺんに結界の外に追い出す。外で「入れるー」「味噌汁」「漬物」「鼻毛真拳究極奥義」「スーパー」とう騒ぎながら結界をボコス力殴っている少女たちを無視して目の前の少女だけに目を向ける。

「どっちもだよー！」

そうやって男は少しの休憩を終え、再び作業に移った。

「やはり、戦いはこうでなくてはな」

そう言ったエスデスは閉じていた目を開きポロポロの龍を見つめる。翼はどこもかしこも穴あきで他の場所は殆ど凍っていた。鱗は剥がれ落ち、体の至る所に血の氷を作っていた。爪も全てひび割れているか欠けているかで無傷の場所を探す方が難しかった。

「その体で生きているとは、流石だ。今から殺すのが惜しいくらいにな」

あれから結晶型の生物40匹と氷の鎧兜を額から生やした第三の目から放つ熱光線で弱体化させ、毒と雷と焰と爆風を含めたブレスで跡形も無く吹き飛ばした。そして人の目では捕らえきれないほど細い蠶を器用に使い、自分の体の傷を修復させた。

そして万全の状態となった龍はエスデスに挑んだ。

六色のブレスを使い分け

鼻腔に闘争心を煽る匂いのする体液を分泌させ

翼から真空の刃を放ち

額の第三の目で五視を操り

筋肉と神経と蠶を使い自分の体を改造し

声帯を駆使し

顔の一部を埋める仮面で潜在能力を引き出し

龍である自分自身を操り

勇猛果敢に挑んだ。

しかし、エスデスには勝てなかった。

幾千幾万幾億と言った水の刃は龍の体を少しづつ削り

防御の為に造られた氷塊は龍の歯牙を物ともせず

地面や空中から突如として現れる数百メートルはある水の柱は龍の飛行疎外し

凍てつくオーラは龍の体力を確実に奪って行った。

満身創痍の龍に対してエスデスは無傷だ。そして今もなおこの寒さのお陰で力を増幅させていた。しかし、絶望的なまでに力の差を感じさせるエスデスに対し、龍の目は未だ自分が勝つという絶対の自信があった。

「いい目だ。あの男のような死んだ目ではない、覚悟を決めた戦士の目であり、龍として戦いに飢えた目。そして最愛のものを失った悲しい目だ」

「ハハハハハ、アノエスデス将グンニ、そコマでホメテ貰えるトは、光栄だ」

背中に巨大な雹を受け龍は血反吐を口から吐いた。エスデスと戦う前であれば見ずに回避も可能で当たったとしてもなんの痛痒も感じなかったが、自分の持てる力をほぼ全て出し切ったこの状態では回避はできなかった。

吐いた瞬間凍り口の周りで血が固まった。唸り声をあげ猛吹雪に晒され今にも消えてしまいそうな意識の中、龍はエスデスを睨み続ける。最期の時まで生に執着する一匹の龍、最期の最期まで諦めの悪い、一人の戦士。

万全の状態であれば恐らく今の自分とも同等に戦えていたであろう。恐らくこの世

界最後の生物。

この龍を殺しこれからどうするか、そんなことが脳裏に浮かぶが今はいい。ここまで私を楽しませてくれたのだ、極寒の吹雪の中凍えて死ぬのではなく、私自らトドメをさしてやろう。

蹠跟めきながらも決して倒れない姿にエスデスは感心し、自らの手でとどめをさす為に一步前へと踏み出す。

「

龍が微かに口を開き何かを呟いた。

その瞬間エスデスは見失うはずのない龍の姿を見失い、自分の胸から突き出たナニカに目を奪われた。

「帝具シャンバラ…アニメでも漫画でもクソ野郎のあいつの帝具を使うのは嫌だったがまあ仕方ないだろ。これでアンタを殺せるのなら…サイタマも殺せるだろう」



完璧な形で決まった背後からの不意打ちに思わず笑みがこぼれる。

ワンパンマンではタツマキという超能力者やボロスやガロウといった化け物がいたがこの女は所詮人間。アカメが斬るの世界においてボロス並みの超速再生はいなかった、唯一、姉さんがエスデスに右胸を刺されて生き残っていたがあれはライオネルの奥の手に回復能力があつたからだ。

「これで終わりだ」

一息つき、一気に傷口を広げにかかる。

しかし、少しも動かない。

さらに奥深くに突き刺そうとしても、冷たいナカが押し返そうとしてくる。残った力全てを振り絞り傷口を広げようとするが

「私に触れるということがどういう事かわかっているのか？」

その言葉を最後まで聞き終わる事なく、龍は凍りついた。

血の一滴から骨の髄まで、丁寧丁寧に凍らされた。

「ふんっ」

エスデスは胸に力を込め、背中突き刺さっている龍の部分を折る。少しばかり硬かったが折れないほど硬くはなかった。胸の部分に刺さったままのものを手前に一気に引っかく、痛みはあったがエスデス自身短い間ではあったが龍との戦いの楽しさが痛みを上回っていたため痛みを感じる事はなかった。

最初から自分が相手をすればよかった。

龍を倒した事により先ほど浮かんだ考えがより鮮明に浮かび上がった。

この龍は強かった。

私の冷気に耐え、いくつものプレスを吐き、体の骨格を一時的にはあるが変形させ最適化させ羅刹四鬼を彷彿とさせる戦い方をしていた。これだけの強者、これからまた会えるだろうか？

今の自分であれば、ブドーを倒すことなど容易いことだ。シコウテイザーも凍りつかせるのにももの数分もかからない。それに自らの力で異界の住人を呼び出し使役することも可能となった。

そして

エスデスは自身の胸部を見る

先ほどぼっかりと空いていたはずの穴は既に塞がりそこには強大な力を手に入れた代わりに灰色となった肌が見えていた。

灰色の肌を見て改めて自分の体を確認する。

背中には左右非対称な氷の結晶のような翼があり左側が長くそして右側が短い。肌は殆どが灰色だが関節などのところどころは氷の結晶で覆われていた。蒼かった髪は白く、いやほぼ透明な白になっていた。

そしてようやく自分の服に気がついた。

「これは…少しきついな」

エスデスは女性として背も高く、服も大きめだったがパワーアップしたせいか体の形が人間のそれとは異なる形となり従来まで着ていた服が色々とまずい状態となっていた。

本来であれば仕立て屋に行き自分に合った服を新しく新調して貰うのだが、帝都にいた人間は恐らくみな死んだだろう。

仕立て屋も、呉服屋も、床屋も酒屋も大人も子供も老人も幼女も貴族も貧民も軍人も警備隊も学生もみな死んだ。

もはや帝都周辺に生きとし生きるもの全てが凍り死に絶えただろう。

恐らくあの男も

「実に惜しい事をした、だが仕方がない。弱かった私がさらに強くなった。強くなった私に周囲がついてこれなくなり、あの男もまたついてこれなかった。ただそれだけのことだ」

龍ほどではないにしろ、今の私とならきつと面白い戦いができただろう。7割とはいかないが5割くらい力の力なら…。

終わってしまった事を気にしながらも氷で服を作る。以前と同じような軍服をアレンジしたものが氷で作ったせいにか少しひんやりとして気持ちが悪かった。

「しかしこれからどうするか」

エスデスは考える。帝国の首都である程度が氷で覆われた死の街となってしまうた

以上誰一人としていないこの街に居ても意味がない。帝国が無くなり他の国が領土を求めて攻めてくるかもしれない。そう考えるがこんな氷で覆われた国を誰が欲しがるのか？ そう考えた途端なんだかやる気がなくなってしまった。

ろくな兵力も無いであろう南にあると噂される革命軍の本拠地を叩くか？

否、帝国が滅んだ以上、革命軍を相手にする意味がない。それに、たった数万足らずの人間が今の自分を見てまともに立ち向かってこれるのだろうか？

「虚しいな、圧倒的な強さは」

氷で椅子を作り座る。そして未だ降り積もる雪と彼方此方で建物を破壊する雹の音に耳を傾けながら厚く覆われた雲を眺める。

「何やってんだ、お前？」

不意に後ろから声をかけられた。くぐもってはいたが聞き覚えのある声、氷鬼兵を向かわせた男だ。恐らく全ての氷鬼兵をやつと倒しここまで来たのだろう。

それに油断していたとはいえここまで距離を詰められるとは、やはりこの男は只者ではない。そう思いながらエスデスは椅子から立ち上がり男の方を見る。

「プッ」

男は氷鬼兵が腰に巻着付けていた獣皮を防寒具として全身に巻きつけていた。明らかふざけているとしか思えない姿にエスデスはつい笑ってしまう。

その笑顔は普段敵に見せる狂気染みた笑顔ではなく、彼女が部下たちにはしか見せる事のない心からの笑いだった。

「いや、何笑ってんだよ」

当然笑い出した目の前の女に若干不機嫌になりつつもサイタマはツツコミを入れる。エスデスは一通り笑ったのか目に浮かんだ涙を拭うと言葉を続けた。

「いや、すまないなその格好が何とも面白くてだな、つい笑ってしまったのだ」

「そんなにおかしいか？この格好」

エスデスはいよいよ本音で話してしまう。目の前の男を煽り挑発し自分と敵対させる事は簡単だろう。しかし、目の前の男ではどんなに頑張っても今の自分には勝つ事は不可能だ。

サイタマはエスデスの内心を知るよしもなく、己の格好を見回す。確かに獣の皮を何

重にも体に巻きつけ縛りあげたため一般人の観点からしてみればダサイが、一般人ではないサイタマからしてみればいいフアッションだとは思えたのだ。

「ところでお前はなぜ、帝国に喧嘩を売ったのだ？」

「いや、俺が先に質問したんだけど！」

エスデスの質問に対しサイタマはツツコミを入れる、そして暫くかみ合っているのかみ合っていないのかよくわからない会話が2人の間で続いた。殆どがサイタマのツツコミだったが。

「私はこれからどうすればいいのだろうか？」

「しるか、そんなもん。自分で考えろ」

「貴様がこれから何をするんだと聞いておいて、その返答はないだろ」

「しらねえもんはしらねえよ。とりあえず今はこの都市の氷と空から降ってくるアレと雲をなんとかしろ、この国ほんとに誰も住めなくなるぞ」

「別に私はこのままで構わんからな、この状況を変える事はしない」

サイタマの問いに対しエスデスは迷い無く答えた、それが彼女からしてみれば当たり前前の事であるかのように答えた。

「は？」

サイタマはエスデスの返答について聞き返す。こいつ馬鹿なの？ 獣皮を顔にまで巻きつけているせいかな顔はよく見えないが明らかに変人を見るような目でエスデスを見ていた。

「吹雪に対して生命力が強ければ生き残る者もいるだろう、弱者は死んでいくだろうが」

「淘汰を乗り越えた者と戦うのも楽しみだ。強くなってそうだ」

お前はどうか？ エスデスがそう言い終わる前にサイタマの姿はその場から姿を消した。それと同時に巨大な地震が起き、帝都中に張られていた氷に地震の衝撃で亀裂が走った。

そして、吹雪が止み。帝都の上空を覆っていた巨大な雪雲は荒れ狂う爆風により霧散



した。

空を見上げると太陽が見えた。

冬の季節である今は日の入りが早い、が未だ沈み切らない太陽が少し西に傾き始めていることから今が2時頃であることをエスデスは理解した。

「眩しいな」

巨大で分厚い雪雲に覆われた帝都は太陽の光を全て遮っていた、そのため突如として現れた太陽が余計に眩しく見えるのだ。

いや、それだけではない。

見つけた、これからどうすればいいのか。

その後のことなどどうでもいい、また考えればいい。

今、私がするべきこと。

エスデスは無意識に片手に溜めていた冷気の渦を更に圧縮し、未だ上空にいるサイタマめがけ放つ。

それ1つだけで小さな集落に住む全ての物が凍りつくほど凶悪な冷気を内蔵している。人間に当たれば細胞どころか原子レベルで活動を停止する事を彷彿とさせるそれは確かにサイタマに命中したが、あらぬ方向へと吹き飛ばされてしまった。

満面の笑みを浮かべる、エスデスの目には先ほど抱えていた不安は無かった。

「礼を言わせてもらうぞサイタマ、私はこれから何をするか決まったぞ」

無傷である事など当たり前だ、あれくらいで死なれては楽しくないではないか。

翼に力を込め飛び立ち、未だ落下中のサイタマを蹴り落とす。

大量の水蒸気が帝都の上空に広がり、空気に溶けるようにして消えた。そして地面には未だダメージを受けた様子がないサイタマのすがたが見えた。

そうだな、私はこれから

「私はこれからお前を殺す」

## 帝都

あれからどれだけの時間が過ぎただろう。

六十万四千八百

10800

1 1 0 1 0 0 0

漆

長かった。短かった。身体の一部を失う者もいた。最愛の家族を失う者もいた。職を失う者もいた。地位を失う者もいた。友を失う者もいた。持っていた強大な力を失う者もいた。倒すべきものを失う者もいた。髪を失っていた者もいた。友を失う者もいた。夫を失う者もいた。妻を失う者もいた。子を失う者もいた。土地を失う者もいた。家を失う者もいた。家財を失う者もいた。名誉を失う者もいた。

千年の歴史の中、受け継いできた物を失う者もいた。

長く短い、永遠のようで一瞬、天国のようで地獄

そんな、あの日々は過去のものとなった。

暗黒の時代に見切りをつけた人々は明るい未来へ今、歩み始めた。



「おーい、次はこっちの瓦礫を動かすのを手伝ってくれ」

「おー、わかった。ちよつと待ってる」

一輪車に瓦礫乗せて運ぶおっさんは、友人の声ができる方を向き、軽く返事をし、一輪

車に乗せた瓦礫を指定の場所まで持って行く。

指定の場所に着くと、口髭の立派な爺さんが一輪車に瓦礫を乗せた俺のと同じような奴らに囲まれていた。

口髭が立派な爺さんは周りの奴らが着ている様な獣皮でできたボロではなく、貴族が冬に外に出かける時に着るような上等な毛皮のコートを羽織っている。それは爺さんが文官のお偉いさんである証のようなものだ。

その毛皮のコートはこんな寒空の下でも一步も動かずとも暖かそうで羨ましいのだが、髪の毛が一本も生えていないその頭は寒そうだった。

何故かハゲの爺様に思いつきり睨まれた後、俺は瓦礫を昨日とは少し離れた所に運んだ。そして、先ほどよりは軽い一輪車を押しながら、着た道を戻り、先ほどのハゲ爺とは少し離れた所にあるテントへと向かう。

テントの前には5人ほど列になっていたが押しつける事はせず黙って列の後ろに並

ぶ、数日前順番抜かしをしようとしたやつが酷い目にあつたためここに並ぶときは行儀よくしないと行けないのだ。

しばらくして自分の番になった。係りの人に軽く会釈をし、違う液体の入った2つの木のカップを貰う。

1つは水の入ったコップで、もう1つは木のスプーンが付いた肉の入った熱々のスープ。

それらを左にあるトレーにのせ少し離れた所へと移る。

ここにはハゲジジイの所よりも多く、俺のような奴が集まり、それぞれの時を過ごしていた。熱心にスープを味わっているやつ、自分の仕事場の手伝いをしてくれそうなやつと、交友関係を作ろうとしているやつ、交代の人間が来るまで地べたに腰を下ろしカードをしているやつなどだ。

本来であれば俺もこいつらのようにゆっくりとしたのだが友人が俺を呼んでいるためそれほどゆっくりしてはいられない。

テントから少し離れた場所にある丸太の椅子がちようど空き、そこに腰を下ろす、そして熱々のスープを水を使いながら食道に無理矢理流し込む。

テントの方へ戻り係の人にカップを渡す。係りの人が『お代わりありますよ』と言い、

もう一杯飲みたいという甘い誘惑が現れるが、友人の自分を呼ぶ声を思い起こしその甘い誘惑を丁寧な断り断ち切る。

熱々のスープを一気に食べたことにより額に湧き出た玉のような汗を首から垂らした手ぬぐいで拭う。

自分の一輪車を押し、係りの人へ遠巻きではあるがもう一度軽く会釈をする、そして足早に友人のもとへ向かった。

「ふむふむ、復興作業への意欲は良好つ、と」



「はい、手伝ってくれた、わんちゃんにもお肉あげるね。今日は特に頑張ってくれたからおばちゃんサービスしちやったよ」

「キュー、キュー」

「おいおい、それはデカすぎねえか？」

簡易ながらも食事スペースの一角で屋台を開き肉を焼く膨やかな女性は秘伝のタレがたっぷりとかかった特製肉を犬(?)に渡す。

帝都復興作業が始まり数日し、この犬(?)が働き始めた初日こそ、その犬のような姿に戸惑う人もいたが、毎日人に混じって瓦礫を運んでいる姿が目撃され、今ではすっかりここの顔なじみとなっていた。

「おい、犬っころ、なんならこつちのと交換しねえか？」

「そんな大きいの食べきらんだろ?なんならおじさんが手伝ってやる」

犬(?)は渡された肉を大切な我が子を守る母親のようにさつと背後に隠し、脅かすような発言をした二人をキッと睨みつける。

睨みつけられたちよび髭の男も角刈りの男も冗談のつもりで言ったのだが、今にも自分の腕に飛びかかってきそうな雰囲気恐怖を抱く。

「冗談だよ、そんなおこんなって」

そう言いながら未だ機嫌が悪い犬（？）に、自分たちの肉を半分ほどちぎり渡す。そうする事によって犬（？）の機嫌が良くなるということは一緒に仕事をしている男たちにとつて周知の事実であるからだ。

それに怒らせたままにすると、後で拗ねて自分たちの担当エリアだけ手伝ってくれなくなる。日々、山のような瓦礫を運ぶのにあたつて、犬（？）の手伝いがなくなる事はこちらで働く人からしてみれば余りにも痛手となるのだ。

犬（？）は自分の皿の大きな肉に、男のちぎった肉が二キレのると一気に肉へとかぶりつく。先程見せていた子を守る母から打つて変わり、ただただ本能の赴くままに肉を貪り食う暴食の魔獣へと変貌した。

短い手足を勢いよくぶん振り回し、おばちゃん直伝のソースが口の周を汚すのにも留めない。一見乱暴のように見えるが繊細で、肉片が周囲へ飛び散ることはなく、犬（？）の肉へ対する執着と敬意がそこにはあつた。

「コロ！人がいっぱい見てるから、そんな食べ方しないで！」

「いい食べっぷりだ、ホレわんこう、わしの分もやろう」

「いいぞ、犬もつとやれ」

人混みの中から現れたポニーテールの少女は犬（？）がアクロバティックに肉を食べる姿が周囲の人たちに見られているのが恥ずかしいのか赤面しながら犬（？）の首根っこを掴む。

しかし未だ肉を食べている犬（？）はさらりとそれを回避し、短い右手で少女に向かって『かかって来い』とジェスチャーをする。

頭にデフォルトの血管マークを3つほど乗せた少女はなりふり構わず必死に捕まえようとしますが、しかし犬（？）は自分を捕まえようとすると少女を煽りながらムーンサルトやバク転で少女の腕を回避し、さらには小さい体を生かし空中で8回転半体を捻りをやっつてのけ少女をおちよくり続けた。

何か太い管状のものが千切れる音がした。

見事な両足での着地に周囲からは歓声が上がリ周囲から多くの肉が犬（？）めがけて

投げ込まれる。犬（？）は何度もお辞儀をしながらそれらを一枚一枚口の中へ納めていく。

しかし10枚も食べ終わらないうちに、人の顔から般若のそれへと変貌した少女に、首輪をがっしりと掴まれどこかへと連れていかれた。

少し残念そうな声の人々から漏れるが犬（？）を連れて行った少女にはその声は届かなかった。

「食糧の配給は問題なし、ってところね」



「おら！ 帝国の清く正しい少年少女団！ 次は貧民街の瓦礫を運ぶぞ！」

「[[[おっ]]」

石でできた建物がほとんどない帝都貧民街へと繋がる住宅街、とは少し離れた一画で数百人規模の少年少女の元気な声が周囲に響いた。

時刻はまもなく昼の一時を過ぎる。

これは早めに昼食を取っていた作業員たちが作業を開始する為に移動し始める時間だ。

数百人規模の少年少女たちは全員がお揃いの白い龍を象ったヘルメットを頭につけ、男子は長袖のビシツとした学生服、女子はセーラー服だが、上着の丈は短くスカートはくるぶしと膝のちょうど真ん中辺りを隠すロングと統一された服を着ていた。

午前の作業のせいで至る所が汚れてはいたが彼らの服はヘルメットと同じ純白だった。

そして、男女の人数差や個々人の体格差、頭髪の色に差異はあれど、統一された返事はこの少年少女達が数百人規模で訓練されていた事を物語っており

その中の返事が数人ばかりくぐもっていても、隠し通せてしまうほどだった

「19番23番41番！お前ら少し休んでろ！」

しかし少女少女たちの先頭を行く男には隠し通せなかった。

自分の番号を呼ばれた2人の少女と1人の少年はビクツと身を震わせる。数百人の少女少女たちの視線が3人に集中し、そして彼ら3人が何故呼ばれたのを瞬時に理解した。

先ほどまでしていた軽めの力仕事からでは考えられないほどの汗を掻き、表情こそ平常を保とうとしているが時々苦痛が生じるのか、口元が歪む。

真っ直ぐと立とうとしているつもりでも足が震え、体が強風に揺れる木のようにぐらついていた。

「わ、私は大丈夫です。まだ働けます。それにカイRじゃなかった19番も41番も今までの任務ではこれくらいでもこなしていました」

「そうです、私たちはまだ大丈夫です」

「俺もまだ大丈夫です」

男は立ち止まり身を翻すと、少年少女3人を視線だけずらし交互にじつくりと観察する。

3人とも強がつてはいるが顔色は悪い。

数日前に男が彼らに施した処置は長期的な目で見れば効果があるのだから最初の数日はどうしても体調が悪くなってしまう。

どうするか悩んでいると3人に向かっていた視線が少しずつ男に集まりはじめた。1人2人とその数を増やし、遂には少年少女たち全員が男の方を向き、男の次の言葉を待っていた。

『  
』

次の瞬間、建物の陰から音もなく数人の黒服が現れた。

黒服は言葉を何一つ発する事なく、顔色の悪い3人の元へ向かい、手に持った注射針

を3人に打ち込む。

首にブスリと注射針が差し込まれた3人はその場は倒れ伏す。

痙攣し、涙を流し、言葉にもならない単語をもらし、砕けた石畳の上に水溜りを作る。立ち上がるうにも手に力が入らないのかずるりと滑り足は産まれたての子鹿のようにプルプルと震え自力で起き上がれるそぶりはない。

『連れて行け』

冷たい情のない言葉が寒空の下周囲に響く、倒れ伏した3人は大きめの布をかけられどこかへ運ばれていった。

そんな幻想をこの場にいる少年少女らは感じとった。

今の上司であるこの男が言った『休め』という言葉の意味が前の上司たちが発していた言葉の意味と同じであればこの3人は何処かへ連れていかれるだろう。

そして残された彼らはまた働けと言われるのだ



少しの間が空き、男が軽く息を吸い、言葉を発す

「よーしお前ら！丁度いい時間だから！ここで昼休憩にする！お前たち3人もここで昼飯にしろ！」

緊迫していた、空気の中その言葉は響く。

誰もが息を飲み一言も聴き漏らせまいとしている中で、その言葉を直ぐに理解する事が出来たものは彼らの中には1人もいなかった。

男は本当は午前中にもっと仕事を片付けたかったのだがと喉にでかかった言葉を押し殺し、胸ポケットから青いガラス玉をいくつか取り出し地面へと叩きつける。

もくもくと煙が立ちこめ、煙の中から木製の長椅子やテーブルがいくつも姿を見せた。

「初日だから早めに飯にする！あとお前ら三人は飯食って少し昼寝したらこっちに合流しろ！少し寝ただけでも体力は回復する！わかつたら返事！わからなくても俺が言ったことには返事！わかつたな！」

そう言われた3人は胸を安心をしたのか一瞬間が空いたが他のメンバー同様に元気な返事をした。

「72型『薬物中毒者』正常化129名、一定基準を満たしているようですね。報告したら、次のところに行きますか」



「いただきます」

少年少女たちの明るい食前の言葉に耳を傾けながら男は着ていたエプロンを脱ぎ適当な瓦礫のうえに腰を落とす。そして胸ポケットから板切れを取り出しそこに新たに刻まれた文字を満足げに眺める。

72型『薬物中毒者』を『正常』に戻しました。

薬物廃人正常化 72型の資格を取得しました。薬物廃人正常化の資格を合計124獲得、残り26で1年の休暇が得られます。

大勢の人間の命を救いました。只今の合計5007256人。

50000000人を超えたことにより、次の仕事を选べる権利、優先度8を取得しました。90%の確率で次の仕事先が選べます。

戒めの部屋への鍵が付与されました、次の仕事先へ行く前に必ず立ち寄ってください。

満足げにそれを眺める笑顔には少しのやるせなさが隠れていた。

帝国の闇に深く染まり全身が薬物に蝕まれ、体の内部がボロボロになっていく彼らに  
対し、男ができることは数少なかつた。

本来であれば靈山に生える神仙の薬草を使い、浄化の魔法でもって毒物と化した血肉  
を清め、時を巻き戻す禁術でもって体を壊れる前の物へと戻したかつた。

しかしそれらは禁じられている。

その世界に未だ無い技術はその世界に混乱を生む。

まったくもって別世界の技術を持つものはその世界の権力者や、また違った別世界の  
ものの関心を引く。

多くの次元侵略者が異世界の技術を使い自由気ままな生活を送る中、数年後また違つ  
た世界からの訪問者やその世界の深奥に存在するものによりその作り上げたものが破  
壊されるなどよくあることだ。

ある程度のことであれば許されるがこの世界に存在しない物質やエネルギーをさも  
当たり前のように使えば目立つ。目立てば他のものの目を引くことになる。

下手をすれば、どこぞの破壊神や権利の女神のような埋不尽と正面から衝突しなければならなくなるのだ。男からしてみれば最も嫌いなあの女に頭を下げるのと同じくらい、勘弁してもらいたい事だ。

それに先程使った家具玉も、コロとかいう犬？帝具？がいなければ使用禁止だった。

だから、禁じられていない方法を選んだ。

体の中の要らないものを排出し、足りないものを作りだす

至極単純な事だ。

最初に男が行った治療は大量に血を抜くという方法だった。

毒素を含んだ血を生命活動ができるギリギリまで抜く、ただそれだけで少年少女たちの体調は少し良くなった。全身を蝕む毒が体内から大量に放出されたのだから当たり

前ではある。

次に男が行ったのは少年少女たちから取り出した毒素をほどほどに中和する栄養素を鑑みて摂取できる食材をこの世界から探し、少年少女たちの体調に合わせて微細な調合をする事だった。

幸いな事に宮殿の食料庫には今は亡き大臣の忘れ形見ともいえる食材が大量に眠っていた為、調査は簡単に終わった。

未だ転生者がいるかもしれないこの世界で他の国の食材を見て回るのはあまりにも目立ち過ぎると考えていた男からしてみれば嬉しい誤算だった。

そして今、現在進行形で行なっているのが体調の回復である。

大量の血液を失った体は必然的に新しい血液を作り出す。その為にも普段よりも多くの食べ物が必要とした。

男が少年少女達へ振る舞う料理は肉料理が殆どである。

その肉に男が調合した調味料、スパイス、薬膳をふんだんに混ぜ込んだ。

未だ体内に残る薬物の成分を全て出すために薬膳を使い発汗作用や利尿作用を促す。新たな体を作る動物性タンパク質となる肉に合わせた味付けをする。

本来は苦く、若い少年少女が好んで食べないような薬膳を彼らの好物である肉類、汗

を掻くことで必然と欲しくなる塩、食欲をそそるビネガーでバランスよく摂取させる。

肉だけでは必然的に足りないものはスープや付け合わせを作り補えるようにする。

しかし、薬の影響でポロポロになった少年少女達の体を治すために、体を薬膳が万全の状態に機能するように間接的に調節するだけではダメなのだ。

一度全身の細胞を殺さなければならぬのだ。

古い体から新しい体になる為には細胞の分裂を活発化させ新しい質の良い細胞を作る、毒に侵された血液を捨て新しい新鮮な血液を生み出す。ポロポロになった神経細胞を作り変える。

幸いな事にこの技術はある程度デメリットがあるため完成されていない。たとえ原理を聞かれてもある程度の常識や代謝に対する知識、食材に対する知識や栄養学、若い世代のもつ新陳代謝の良さを知っていれば理解できるものだからだ。

魔術や魔法的な洗脳や催眠、体内環境の変化ならばこの世界で行って良い行動では男に出来ることは何一つなかったが、この世界にはそういった文化の発展があまり盛んで

はなかつたのだ。

最後は少年少女達にかけられた帝国を裏切ってはいけないという暗示を解除するのだが、これは時間が解決してくれる。それに暗示が帝国のために働く意欲になるので解くのは後々でいい。

「あの、」

男はニヤけた顔をやめ普段のいつもの顔へと戻し、自分の元へやってきた少女へ目を向ける。

「どうしたの？　なんか苦手なもんでもあったか！」

「あつ、いえ、そのどの料理も私たちが今まで食べたことのあるどんな料理よりも美味し  
いですが、みんなも美味しいうってってます」

あの…その…と、人差し指をぐるぐるさせる少女は言葉が出ないのか、やつぱりなんでも  
でもないですと言つて顔を赤らめながら自分の席へと戻つて行った。

「ナニヤツテンノ」「ナニヤツテンダヨミカー」「ムリダヨハズカシイヨ」「タカガコツチ  
ニキテイツシヨニタバマセンカ？　ツテキクダケデシヨ」「ナラアンタキキニイケバイイ



デシヨ!」「イヤヨ、ワタシハズカシイモノ」「オトメカ!」「ジャアイツシヨニイイニイコウヨ」「ムリムリハズカシイ」「アンタガツレテツテクレルナラカンガエルケド」「アアワカツタヨ!ツレテツテヤルヨ!」「アンタダレ?」

男は黙つて立ち上がると少女たちの会話の中に入った異物を無理矢理つまみ出し、異物を持つてきた手紙を奪い取る。

「これを読めと!?」

異物は黙つて頷くと切れ味の良さそうな触覚をグルングルン回転させながらどこかへ走り去つて行つた。

少女達は心配そうにこちらを見つめてくる、が男は大丈夫だと手で合図を送る、そしてどこかから聞こえてくる急ブレーキ音を聞き流しながら手紙を開け、それと同時にため息を吐く。

手紙には男が最も嫌いな女からの報告書の請求だった。

「どうやらみよんな人から手紙を受け取つてしまつたらしいですね。まあそれと私の仕事には関係はないですから良しとしますか、……あと性格に少し難あり……と」



## 帝都 宮殿跡地

そこには自分の体の数十倍はあろう巨大な瓦礫を前に立ち止まる、黒い鎧の男がいた。

「よっいしょっと、」

鎧姿の男は瓦礫の下の方に指を食い込ませると一息で楽々と持ち上げる。そして人並みならざる速さでもって移動し巨大な瓦礫を開けた空き地へと運ぶ。

空き地は元は帝国で一番広くて有名な公園で石造りの立派な時計塔があったらしいのだが今ではその姿を見る影もなくただただ広い広場となり鎧の男が瓦礫を運ぶペースとなっていた。

宮殿にある大量の瓦礫を近くのテントへ運び、そこで砕く。砕かれた瓦礫は職人や

専門の人たちが更に細かくし街道の整備へと使うらしい。

鎧姿の男は更に二時間ほど宮殿と広場を行ったり来たりを繰り返した後に足を止めた。一陣の風が吹き鎧姿の男のが立っていた場所には一人の青年が立っていた。

黒潮を思わせる濃い青色の髪色に錨のマークがついたマフラーと先程までは持っていなかった片刃のカーブがついた剣を持っていた。

「ウェイブさん、お疲れ様です」

「、っ!?……あつ、どうも」

「あ、これタオルです。汗かいてると思ったので持ってきました」

「あ、ありがとうございます」

ウェイブと呼ばれた青年は自分のためにタオルを持ってきてくれた少女に礼を言い、タオルを受け取り、顔を拭く。

湧き水の源泉のように噴き出る汗はとどまることを知らず、少女から受け取った真っ白なタオルはあつという間に色を変えた。マフラーを外し上着を脱ぐ、そして体を一通り拭く。

そしてもう一度顔を拭く





「おーい、ウエイブくん」

遠くから自分を呼ぶ声が聞こえ少年はその方を見る。声のする方からは胸に大きな三つの傷痕を残す巨体の男性がその巨大な手に似合わないほど小さな弁当の包みを持ちながら向かっていた。

「あ、ボルスさん」

青年は男の方に向かって走り出す。

「いやー探してたんだよ、待ち合わせのテントにいつまで経っても来ないから瓦礫にでも挟まれて出れなくなってたんじゃないかって」

「…あはははは、すいませんちよつと仕事に集中しすぎちゃって」

「でも凄いいんだってねウエイブくん、今日の午前中だけで2日分の瓦礫を運んだんでしょ、みんな凄いつて言ってたよ」

「あれ？そんなんですか。あーでも、そう言ってもらえると　なんか照れるな」

「でもしっかりと休みを取らないと皆んなに心配かけちゃうよ。ウェイブくんの担当の広場の人も休まな過ぎだつて、心配してたし」

「心配してくれるのは嬉しいんですけど…、その、皆んなが働いてると思うと俺だけ休もうって気になれなくて」

「それでも休まなくちゃダメだよ、休みを取ってしっかりと体調管理を整える。これも仕事の一つなんだから」

「はい、つて、ボルスさん、その手に持つてるのつて、この前言つてた奥さんの手作り弁当ですか？」

「うんそうなの、あとウェイブくんの分もあるから一緒に食べよう」

「いいんですか？」

暗い顔をしていた青年の顔は明るくなり、マスクを被った男の笑い声は遠のいていった。

「トラウマを抱えてしまった者への対処は完了している。しかし直接戦闘へ巻き込まれていた青年への配慮は足りていない模様。まだまだですね、写真は……撮る価値ないですかね」



「では、第三者である私から見た感じを述べさせてもらいます。」

まずは他の国々について。東西南北特に問題が起こる様子はないでしょう。強いて言えば西の異民族と国交を開くといいでしょう。例の巨大兵器の所為で攻め込もうとしていた軍は壊滅しちやいましたし、まともな戦力がないので、多少こちら側が有利な停戦条約でも進んで飲み込んでくれます」

「北はもう壊滅しちやつてるみたいだぜ」

「南は旨味がないので暫く無視でいいと思いますよ」

「東側も海賊がいなくなつたので安全です」

「帝国領内のゴミもあらかた掃除し終わっているのようなので暫くは国民も安全に暮ら



せませすね」

「次に食糧なのですが、地方に身を隠していた文官や元大臣、革命軍に席を置いていた人材が大臣の死亡と帝都の壊滅的な状況を知り復興の為に隠し持っていた備蓄米や麦を運びにきているのですが：冬という時期もあつてか、どう考えても足りないみたいです。ですからこのまま、危険種退治兼食糧調達を続けて下さい」

「冬の間は主食や肉だけで栄養バランスは少々偏るかもしれませんが、春先にジフノラ樹海のマツ科の木の根に生える薬草を採取してくれば、おつけーです。この世界において豊富なビタミンとミネラルを含み、雑草のように取っても取っても生えてくるようなので冬場に偏った食生活をした人たちへ食べさせれば体調が良くなります」

「食糧問題に基づき、男女の距離を遠ざけることも進めるぜ。今、子供が増えると大量に食糧を消費しちまうから、ここ数年は民衆に労働を促し、性欲を他の形で発散させて、出来るだけ子作りをさせないようにしたほうがいいぜ」

「最後に帝都の復興を急いでいる文官の人材が石造りの建物を建設したがってるから、それを遅らせちゃって。この土地の地質調査をやったら数ヶ月後に大きな地震が起き

るみたいだから」

「なので、宮殿や貴族の屋敷を中心とした巨大な瓦礫となったものの除去を優先し初夏を迎えてから本格的な建物の建設を始めてください。下手に建物を建てると地震で崩壊します」

「もしどうしても石で何かを作りたいたいと言う人がいたら、建物ではなく道路や街道の整備をさせましょう、材料となる瓦礫は有り余っていますし、地震が起きるまでの時間稼ぎにはなるはずです」

「あと、例の帝具使いの少年なのですが、あの2人の戦いを見てトラウマが残ってしまっただようです。恐らく時間が解決してくれると思いますが、帝都にいますか、帝都にいますかと思いましたが、帝都にいますかと思いが向いてます。これからの事を考えると早急に配置換えを行った方が賢明かと」

男は止まった時の中、影から聞こえる声に耳を傾ける。

淡々と代わる代わる聞こえる少女たちの声に不満を感じながらもこれからどうする

のか考え決め決定づける。

少女たちの声が聞こえなくなり男が質問する時間になった。

影の中の少女たちの説明でこの世界に関してはある程度の予定を立てられたのでよしとする。

そして唯一の心配の種について問いを投げかけた。

「ところでレイのあいつはどうなった!!?この世界にまだいるのか!」

「その件についてなんですが……まずい事になりました」

「まずい事…!?!」

「それが………」

影の中の少女の予想外の返答に対し、込み上げてくる歓喜と友人に対する同情心が湧

く。

男は胸ポケットからビツシリと文字の書かれた紙を取り出し影の上に置く。少女たちの気配が消え止まっていた時が動き出す。

そこには何の痕跡も残らず、誰も目を向けていなかった。

「帰ったら奴に一杯奢ってやるか！」

そんな言葉が寒空の帝都に響いた。



## とある世界

そこでは2つの国が戦いの火蓋を散そうとしていた。

一方は巨大な木造船を何百隻も持ち、質の良い金属の鎧をその身に纏った数百万の兵使い、一騎当千の力を持つ赤毛の戦闘民族の兵団を操る。

この世界の有史以来、最も「強く大きな国」であり続けている国。

そしてもう一方は数十万人の命を極少数の魔導師が守り管理し導く国。

轟々と燃え盛る炎を、全てを攫い無に帰す水を、星々の瞬きの如き閃光を、天を裂くほどの雷を、巨大な木々を薙ぎ倒す風を、人の精神に最たる影響を及ぼす音を、万物に等しく影響を与え及ぼす力を、全ての生き物の根源たる生命を、それら全てを自由自在に操りし存在たる

魔導師が統べる国。

双方、強大な力を持ち、互いにぶつかり合えば無傷ではすまない。

開戦の狼煙は既に上がり戦と、多大な犠牲は避けられないものとなった。

しかし

「一体どうしたというのだ!?!既にマグノシユタットと開戦をして数十分!なぜ大レーム

の兵士が一步も前に進む事が出来ない!?!」  
「槍を下ろすな、この岩の壁を越えろ!」

強大な国の兵士たちは驚愕した

目の前に現れたのは数十メートルは下らない巨大な壁

城壁の如く分厚い壁は、まるで地面をそのままエグリひっくり返したのではないかと、感じさせるほどの存在感を放ち、レーム兵の侵入を拒んでいた。

空から1つなにかが落ちてきた。

ただただ重力に任せてそれは落ちてきた。「強く強大な国」と「魔導の国」が互いに睨みをきかせていた丁度中間に

「あいつはいったいなんなんだ!？」

「もう一度だ!もう一度雷魔法をあてる!」

「もっと魔導師の人数を増やせ!!?威力を増大させるんだ!」

「無理です!私を含め多くの魔導師の杖が奴によつて壊されました、杖なしでこれ以上の威力の魔法を撃てば我々の身がもちません」

魔導師が続べる国の魔導師たちは驚愕していた。

目の前の1人の人間に対してこちらの魔法が一切通じない事に。

我々の前に現れたのは1人の杖を持たないただの人間<sup>ゴイ</sup>

それが何故だ!?!何故我々の魔法を喰らい平然としているのだ!?!?

天から落ちてきたそれは開戦して暫くして動き出した。



「強く強大な国」の兵士たちが「魔導の国」へと向かう時、動き出した。

「モガメツト様、第一次防御結界が破られました！」

「狼狽えるでない。敵はまだ内部に侵入していない、今直ぐに破損した部分を再生すればよい。それと防御結界を再生させたのち、前線の魔導師たちには敵の兵士が近づかない限り結界の中から出ないように伝えなさい、杖が壊された者には新しく杖の代わりになるような物を渡しなさい」

魔導師たちは自らの魔法が効かない相手に戸惑っていた。

魔導師たちの魔法はことごとく回避されていたのだ、無駄に地面をえぐり土埃をたて自ら視界を狭めている。そのせいでまた1人2人とボルグを破られ杖を破壊される魔導師がふえた。

「かしこまりました」

「ふむ、どうやらレームとも煌とも違った敵がまぎれこんでいるようじゃのお」

それは風よりも疾く

音を置き去りにし

圧倒的な力を持って、戦場を駆け巡った

「イレエヌ様、モガメット様からの発射許可がいただけました。これでいつでも巨大魔法道具発射が可能です」

「！そうか！なら、いますg『ズドオオオオン』なあああ!？」  
「嘘だろおお!?!」

「巨大魔法道具崩れるぞおお、周辺にいるものは避難しろ!!」

「そんな、バカなあの距離からいったいなにをしたというのだ!?!」

数百メートルはありそうな巨大な兵器がその存在感から戦場を支配した。

しかしそれも一瞬だった。

巨大な地面の壁の方から2つか3つ石が飛んだのだ、直径が7センチ行くか行かないかくらいの岩といってもいいほどの大きさの石。

それが誰の目にも止まらず一直線に向かい、その巨大魔法道具を破壊したのだ。

「団長、先陣切った兵士たちが丸裸でこっちに飛んできてます！」

「何を言ってるのだ、魔導師でないレームの兵士が飛ぶわけないのだ」

「いやだって、ほら」

「「……………」」

その姿は見えなかった

正しくいうのであれば、見続けられなかった。

例えるなら、人が太陽を見続けるようなものだ

見ることはできる、しかし見続けることはできない。

壁を超えた兵士たちを待っていたのは拳という名の洗礼だった。  
梯子を使い壁を超え、地面におり立つ。

そして金属鎧の丁度ど真ん中に衝撃が走る。

鎧にヒビが入ったことに気がつく前に意識は刈り取られるのだ。

「ここから前線までかなりの距離があるな」

「あそこ、少し地面が盛り上がっていると、あそこから飛んで来てる」

「レームの魔導師は人を飛ばす事もできるのか…」

「いや、違うでしょ」

「これはどう考えても、殴られてこちらに吹き飛ばされてるのだ」

「もしかしたら、ファナリスに会えるかもしれないねえなあ」

「どうやら我々の出番は思った以上に早く来そうだ」

魔導師の大半の杖がおられ、再び第一次防御結界が破られた。

マグノシユタットの兵士たちはもはや動けなくなっていた。自分の国の守護神たる魔導師たちがことごとく杖を奪われ敗走している様を目の前で見せつけられているのだ。

もはや戦う意志など微塵もない。

それでもまだ隊列を維持し、自分の手にある魔法道具を握り男のむけて構えているのは日頃の訓練の賜物だ。

目の前の男に巨大な雷が落ちる。

誰かが言った『やった、魔導師様が帰ってきてくれた』『杖を再び握ってくれた』『やった、これで勝てる』『やった！流石魔導師様だ』

炎の柱が立ち上がり、酸の雨が降り注いだ、巨大な地面の塊が宙に浮き、勢いよく地面に落ち、大地を震わせるほど巨大な爆音が響いた。

「魔導師様万歳」「魔導師様万歳」「魔導師様万歳」「魔導師様万歳」「魔導師様万歳」「魔導師様万歳」「また、きたのかよ」「魔導師様万歳」「魔導師様万歳」「魔導師様万歳」「魔導師様万歳」「魔導師様万歳」「魔導師様万歳」

巨大な地面が落ちた場所から少し離れた所に風にたなびくマントが見えた、しかし次の瞬間には地面から現れた巨大な人食い植物により飲み込まれた。

兵士たちはみな願った、頼む出てこないでくれと。誰にともなく願った。未だ咀嚼す

る巨大な唇のような人食い植物の花弁がああ男の手によつてもう2度と開かないことを。

強く願つた。

兵士たちの願いは叶つた。ゴックン、と言つた音と共に男は丸呑みにされた。そしてもう2度とその花弁は開くことはなく、人食い植物の茎に当たる所に巨大な穴が空き

そこから男は姿を現した。

兵士たちは狂乱し、武器を捨て、一目散に逃げ出した。

逃げ出す兵士たちの姿をあつげにとられていた魔導師たちは再び杖を壊され敗走することとなつたのはいうまでもない、

ヒーローとはなんだろう

正義の味方とはなんだろう

勇者とは英雄とはなんだろう

マグノシユタツトの兵士たちは全て敗走し、前線にはレームの兵士だけになった。その兵士たちもたつたいまをもつて全員錐揉みしながら空高く飛んで行った。

また、レームの火薬兵器を大量に乗せた気球は男がジャンプした際拳を振るい生み出された爆風により海への方へと押し返された。

もはや戦いも終わった、そう思われた時、男が生み出した地面の壁にヒビがはいり。



そこから赤毛の金属鎧の集団が現れた。

人を殺す事により、未然に人の死を防ぐ者たちがいた  
人が死んだ事により、人はこれを悪という。

1人の少女を守る為、大国に1人立ち向かうものがいた  
人が少女を守った事により、国はこれを悪という。

人の大切なものを奪う事により、哀しみに明け暮れたものがいた  
人が全てを捨て復讐の道に走った事により、悪となった。

人が仲間を集め、日々戦いを挑むものたちがいた  
人は彼らが悪の組織と名乗るから、彼らを悪という。

大勢の人の命を救う、1人の少女の命を救う、自分という大切に尊く、かけがえのない存在を救う、これらに大差などあるのだろうか。

「うああ、ああ、ああ」

「おぼおぼはあ」

「くらあええ」

「ぐえおあが」

「はっー」「やっー！」

「ガハッ」

赤毛の戦士たちは全力で戦った。

自分の持てる全ての力を余すことなく使っていた。

しかし、なのに、でも

「よっ、はっ、ほっ、」

拳が一発胴に入っただけで、前線で戦っていた兵士たちと同じ末路を辿った。唯一違うと点を挙げるとすれば

「ちくしよおおお、テメエ顔覚えたからなあ!!? 次会ったら絶ってエぶつつぶす」

「くやしいい」

「ムカつく」

「今のナシナシナシナシ!!? 全力じゃなかった!」

「もつかいしようぶしろ!」

「ふざけるんじゃないのだ!!? ファナリス兵団がこんな簡単に負けていいはずがないのだ!!?」

殴られても意識を無くさず、空高く飛びながらも恨み言を言えるくらいだろう。

もう一度問おう

ヒーローとはなんだろう

正義の味方とはなんだろう

勇者とは英雄とはなんだろう

一夜明け、マグノシユタツトから黒い影がいくつか南の空へと飛び立った。

黒い影が向かった先は『強く強大な国でも』『魔導師の国』でもないこの世界で『最も広く広大な国』の兵士たちのもと

そこで黒い影は暴虐の限りを尽くそうとしたが

「胃が痛い中、わざわざ（足労ありがとうございませよおっと）」

何匹かが紫色の何かに蝕まれ、再生することもなく、その姿を消した。

一方その頃マグノシユタツトでは  
「よいしょっと」

1人の男が地面から湧き出す、巨大な黒い影の源泉に足を運び、飛び出してきたそれらを全て吹き飛ばしていた。

「くっ、もう魔力がなくなったのか」

「ガツ、あつ脚が」

「魔装が、もうとけちまうっ!!?」

1時間ほど時計の針は進み、西方の空　そこに1つの穴が空いた。

厚く黒い雲の中から空く穴は、そこだけ別の次元であるかのように思わせるほど黒く、闇に包まれていた。

その穴から今この地に悪意の化身が降り立とうとしていた。

彼の手は触れたもののすべてから命の素を奪いとる。

人を、鳥を、獣を、蟲を、魚を、草を、木を、森を、山を、川を、滝を、谷を、丘を、湖を、海を、空を、音を、火を、水を、雷を、風を、力を、命を、奪いとる。

悪意の化身はこの地に降り立つ為の楔をこの地に打ち付けた。

自分と似通った性質を持つもの

数多の手を駆使し、この世の全てを奪いとるもの。

それは依り代、悪意の化身がこの地に落とした悪意の子。

『ああつ、なんとも嘆かわしいことよ!!?その程度の力では「依り代」は倒せるわけがないもの…』

それらに明確な答えなどない  
あるはずもない

ましてや誰かが知る由もない

「!おいあんた、あんたは下がってろ…!!?」

「、なっ!?!あんた!死ぬ気☒」

「…おじさん!無茶だ!!?」

だがしかし

『なっ！「依り代」が☒』

『まっ、まさか…』

『「アルマトラン」の時でさえ72人がかりだったものをたった一人で…』

幾人もの王が、炎を、空間を、圧力を、暴風を、水を、操り立ち向かい

幾万の命を奪い　　なおかつこの世界に生命の存続を許そうとしない存在を



たった一人で屠った男は

「あんたいつたい」

『あいつはいつたい』

「おじさんはいつたい」

この時ばかりは、

「おれか？おれはヒーローをやっているものだ」

紛う事なき、  
ヒーローだった

ご注文はうさぎですか？

## 兎小屋

B級ヒーローは仕事がありません。

正確に言えば、ヒーロー協会から直々に頼まれる仕事はありません。

理由は簡単だ、例えば怪人が現れたとしよう。

怪人は人の体を簡単に切り裂くことのできる爪を持ち、空を自由に飛べる翼を持つ。人の数倍から数百倍、あるいは数万倍に至る膂力を持ち、並みの刃物を突き通さない硬い皮膚を持っている。

これに対してヒーロー協会が出す答えはこれだ

S級ヒーロー、1人で大丈夫。

A級ヒーロー、とりあえず、いちばん近くにいる人、行って。

B級ヒーロー、チーム組んで倒して。ムリだったら時間稼ぎよろしくね。

C級ヒーロー、論外。

S級ヒーローの仕事は単純明快だ

怪人が出現したら現場へ行けばいい。

そこで怪人を倒す。ただそれだけだ。

それに、災害レベル鬼や竜の出現時にはヒーロー協会から直々に依頼が来る。

A級ヒーローの仕事はまだ分かりやすい

怪人が出現したら現地へ向かい、怪人の災害レベルと自分との力量、現場へ集まった他のヒーローの力量、現場の地形、その他複雑に絡み合ったものを考慮し怪人を倒せそうであれば倒す。

また倒せないにしても他のヒーローが来るまでの時間稼ぎや周囲の人が逃げるための時間稼ぎ、また会話などの時間稼ぎをしつつ、次に戦うヒーローの為に怪人の情報を引き出すのだ。

格上の怪人を倒す事でA級上位を目指そうとする者も多く、そういった意識の高いA級ヒーローにはS級ヒーローに頼むまでもないレベルの依頼がヒーロー協会から優先的に依頼されることがある。

それに、ヒーロー協会のイメージアップのため、各方面からのイベントやテレビ、雑誌等の出演取材依頼がヒーロー協会を通してくるからだ。

C級ヒーローの仕事はS級ヒーローより難しいがA級よりは簡単だ

週に一度のヒーロー活動を行う。

ただそれだけ。

C級ヒーローは怪人と戦うのに相応しい隠れた才能を持つもの、ある特定の環境下においてのみ、C級の範囲を超えA級、あるいはS級並みの力を発揮できるものもいる。

しかしその才能を発揮したとしても、よくて災害レベル虎までにしか通用しない事が多く、特殊な環境下過ぎてそろわない事もある。

もちろんその中でもごくごく少数のヒーローは災害レベル虎以上の怪人にも対応ができるが、その人材はここでいうC級ヒーローの部類には入らないバランスブレイカーであり、その事に関しての説明はここでは割愛させてもらう。

つまり、九割九分が一般ピーポとなんの変わりもない人間が締めるC級にヒーロー協会が直々に頼むような依頼はまずないのだ。

偶に頼まれるものと言えば、S級やA級がめんどくさがってやらない調査報告くらいだ。

C級は各々が自分に適したヒーロー活動を行い、その存在価値を高めればいいのだ。

それに比べてB級は、一番と言っているほどめんどくさい。

B級はA級よりも下だがC級よりも上、ちょうど真ん中なのだ。

ヒーローの殆どがS級はバケモノであり別格であり、下手すれば怪人と同等の力を持つと認めているので、ここではB級ヒーローをヒーロー協会の間中とする。

B級は何をするのか、この部分が複雑だ。

怪人退治？

B級上位ランカーである黒服集団を見てほしい

B級一位かつA級にいても十分に通用する超能力者を筆頭に常に複数人で行動している。この事からB級は怪人退治に複数人で立ち向かわないと行けないのが見てわかる。

週一のヒーロー活動？

とあるB級上位のヒーローを見てほしい。

彼はC級1位になった時、週一の活動のノルマから解放されたことを少しばかり喜んでいた。

筋トレ？

とある黒いタンクトップのヒーローを見てほしい

常にタンクトップを着ていて筋肉が隆起しているが、その筋肉は金属ほどの強度もなければ人間の限界を超越しているわけでもない。

存在価値を示す？

とあるハゲマントを見てほしい

ハゲている

S級ヒーローの鬼サイボーグの金魚の糞をして順位を上げているといわれている、あとハゲてる。

つまりだ、B級ヒーローの殆どはただ少し強い人間が少しすごい武器を持っていたり、少し凄い特技があったり、少し武器の扱いが上手かったりするだけなのだ。

そんなのが怪人退治に出かけたらどうなるか、もちろん少しは役にたつだろう。数人であればA級がくるまでの時間稼ぎぐらいには。

1人で行けば、下手をすれば死ぬ。

S級ヒーローのようにヒーロー協会に特別待遇をしてもらえないわけでもない。



A級ヒーローのようにしょっちゅうテレビやラジオに出演できるわけでもない。

C級ヒーローのようなヒーロー活動ではランキングが下がってしまうし、そもそも来るかもしれない依頼すら来なくなってしまう。

ではどうすればいいのか。

殉職者率No. 1のB級ヒーローは

パイナツプルの格好をした服を作りそれをコスチュームとして名前を売るか、怪人が出現した場所に行き市民の避難誘導をするか、何人かの同じレベルのヒーローで集まってパトロールに出るか、いざという時のために機械の体のメンテナンスをするか、

ヒーロー協会、幹部に呼び出されて、お使いに似たメンドクサイ私用に付き合わされた時、後々のことを考えしっかりと受けるかだ。

とあるカフェ

「いらつしやいませ、何名様でしょうか」

「後で2人来るんで、6人で、席お願いします」

店内に入ってきたのは年ごろ三十代前半といった所で少し背の高い男、背が高いだけで全体的に肉はあまりついていない中性的、悪くいえば痩せ型で不健康そうであった。

しかし遠目から見てもわかる、もちもち頬は、十代の少女を思わせるほどのハリとツヤを持ち肌に気を使っている事が一目瞭然だった。

男は店内を見渡しその内装を確認する。

少し強いコーヒー豆の香り、店の奥からする胃袋を直接刺激する美味しそうなパンの匂い。

窓の外から入ってくる白い光と電球の淡いオレンジ色の光が店内の明るさをちやうどいい感じの環境を作り出し、所々に置かれた観葉植物は青々として、よく手入れをされているのがわかる。

壁に飾られている風景画も、どこで描かれた物かは分からないが美しく、目を楽しま

せてくれる。

カウンターの奥にある棚にはいくつものコーヒー豆が種類ごとに容器に保存され、シンプルなデザインのコーヒークップがいくつも置かれていた。左奥の方の棚にはお酒のボトルがいくつも置いてあり、男のアイリッシュコーヒーが飲めるかもしれないという期待が高まった。

「わかりました、それではお席へ案内させていただきます」

「あつ、はいありがとうございます。おい行くぞ」

店に足を入れただけでこの店に魅了されてしまった男は店員さんの声で我に返り、あわてて外にいる3人を呼ぶ。

「ザギ」「ア、ヴィセドナカデイボルザアギガイドウ」「シャシャシユブリョファ・レデオ  
デエグルンベリヤフオンフォ」

男に続いて店の中に入ってきたのもこれまた3人の男だった

濃い紫色の髪をしたツインテールの店員は3人が店内に入ったのを確認し、男たちを空いている席に案内した。

一方カウンター席では

「だから言ったんだよ、ぼくはね、鯿は好きだけどミキサーにかけて原型がとどめてないほどにしたのは食べたくないって。そしたらその店員さんがね、『お客さんこれは鯿は鯿でも、DHA、EPA、ビタミンAやビタミンE、ビタミンD、たんぱく質、脂質、カルシウム、ビタミンB2が通常の鯿の10倍含まれている美食鯿です』って言うんだよ。ぼくは信じられなかったんだよ、あの一尾17350円的美食鯿をミキサーにかけるってことが、あつ、でもその食べ方が美食鯿を美味しく食べる方法であるなら店員さんの好意は嬉しいものなんだけど、僕はさ、やつぱりそのまま食べたいわけなんだよ……ねえ?きいてる?」

「うん、きいてるよ、7つ集めると、どんな願いでも叶うオレンジに輝くセリ科の植物を育てて集めるんでしょ。g2にキングを」

白黒の小柄な男性は隣に座っている大柄な真つ白な男性に問いかけてみるが、真つ白な男の気は目の前にあるチェス盤とカウンターの向こう側にいる、少女の頭の上に乗った白い巨大なまんじゅうの様なものに向いていた。

「c6にビシヨップ、チエック」

男の声に反応して自動で動くチエスのキング、その動きが止まった瞬間、白い大柄な男性の声でも白黒の男性の声でもない声、少女の頭の上から聞こえその声に反応した駒が動き、大柄な男性をさらに追い詰めた。

「あ、アアアアツ!!?」

「……話し聞いてないでしょ。まあいいや、笹子さんカフェモカお代わり」

「すいません、うちにはカフェモカはないです」

「……え?…ああああア!!? ツつつい癖で!!」

大柄な男性は何とか自分のキングを逃がそうとするが、とうとう追い込まれ始め絶叫をもらした。

白黒の小柄な男性はいつも通っているカフェのつもりで注文をしたのだが、目の前の少女の困った顔を見て、ここがいつものカフェではない事を思い出し絶叫した。

「ほ。ポーンをe4へ」

「ふーむ、h1にクイーン、チエック」

「gg3にキング」

「g1にルーク、チェックメイトじゃ」

少女の頭の上ののっている毛玉は遂に追い詰めたとばかりにドヤ顔をし、それと対照的に真っ白な大柄な男性の方はチェックメイトになりながらもまだ何とか現状を脱出できる方法はないかと頭をフル回転させていた。

そして何か思いついたのか目をキラーンと光らせた。

「……………、すいません、パンケーキ4つ、あとケーキのお代わり2つ」

「かしこまりました、少々お待ちください」

少女はその注文を受け棚にある注文票へ注文を書き込む。

棚は少女の背後にあるので、少女が注文票へ注文を書こうとすると少女は180度回転することになる。少女の頭の上ののっている白い毛玉も必然的に180度回転することとなり…

「ちよつと待てチn、『はーくしよん(棒)』あああああああ!!?、」

「あー、くしゃみでチェス盤がー。これは最初からやり直さないとだなあー(棒)」

白い毛玉が大柄な男性の策に気づくには遅く、音がした方を向き、少女の頭から飛び降りた毛玉を待っていたのは盤から全ての駒が落とされた3時間の結晶だったものだ。

「きみはほんと負けず嫌いだね」

「そんなことないよ、いまのはたまたまだよ、たまたま」

「たまたまで駒全部チェス盤から押し出す奴があるかあ！」

白い毛玉は怒りを表現したいのかポヨンポヨンと跳ねながら口をあんどぐりと開け目を吊り上げた、しかしまんまるデフォルメのそれはおこっていると理解していても可愛かった。

水色の髪の少女はそのやりとりを見てくすりと笑う。

「そういえば、こんど僕のカフェで採れたての新鮮夏野菜を使った新メニューを出そうと思うんだけど何かいいアイデアないかな？」

「急に話を変えるね、そうだね…：やつぱりトマトと茄子を使った夏野菜パスタなんていいんじゃない？」

「定番ですね」「定番じゃな」「定番だね」

「君たち、ぼくに對して少し辛辣じゃないかな？」

水色の髪の少女、白い巨大な大福、質問してきた当の本人にそれぞれ、そう言われ、「そういう君たちは何かいいアイデアあるの？」から話が続き、少女を除く3人(?)の新メニューの企画会はこれから一波乱起きるまで続いた。

3人(?)から少し距離を置いた水色の髪の少女は注文票を確認し、先ほどの4人の男性を案内し戻ってきた少女にできたてのアイスとホットのココアを1つずつ渡す。

「リゼさん、あの窓際の席の方々の注文です」

「あの白いワンピースの女の子と白いマントの男の席だな？」

「はい、よろしく願います」

2つのココアを受け取った少女はそれらをお盆にのせ、窓際にいる男と少女のいる席へ足を運んだ。





「おじちゃんがあの時すっかりと捕まえていれば、今ごろ　ゴット・シグマはお家に帰れたのに」

そう言いって手元にある白い兎の写真を悲しそうに見つめるのは今回の依頼主の孫娘である。

サイタマは数週間前の猫探しの事件同様、ヒーロー協会幹部に呼び出された。今度こそ怪物退治だろうと思っていたのだが、今度は兎を探して欲しいというものだった。

今回は前回の猫探しの一件よりも少し楽になるはずだった。

なんと飼い主である少女は兎がゲージから脱走しても直ぐに捕まえられるように首輪に発信機を着けたのだ。

しかしその発信機は半径100メートル以内に対象が居ないとレーダーに映らない（ここではドラゴンボールレーダーの劣化版を想像して欲しい）そのため自分の足で探さないといけないのだ。

最初は車で探せばいいと思ったらしいが、どうやらこの兎は狭いところが好きらしく、レーダー反応がある場所はことごとく路地裏で車での追跡は無理だそうだ。

それに彼女両親は仕事で忙しく途中までは手伝ってくれた彼女の祖父の部下も最近増え続ける怪人事件の後処理の仕事があり、手が空いていないという。

そこで、手の空いているB級のサイタマに白羽の矢が立ったのだ。

そしてサイタマは兎を見つけた。

路地裏の換気扇の下、白いモフモフした何か氣息を潜めていた。

少女はサイタマに息を挟めるように人差し指をたて口にそつと当てる。そつと近づいて換気扇の下に手を伸ばし兎に触りそうになると

少女の上に巨大な影がかかる。

身の丈3メートルの一つ目小僧のような青い肌の筋肉質の怪人。

「つーかーまーえーぐぼらっぼおおおおおおおッ」

異様に発達したその巨大な右手は少女の体をすっぽりと覆うほどのサイズがあった。

しかしサイタマの強烈な一撃によりその手は吹き飛ばされ、怪人は葬られた。

そして

「キヤー」

怪人の出現により恐怖で少女が叫び

それに怯えた兎が逃げ

「ウサギガニゲテル！」

どこからともなく都会から田舎に越してきて数週間しか経っていないような少女の  
ような声が聞こえて

レーダーから反応が消え、また探す事になる。

『 やった！兎 を見つけた。』

あつ！野生の怪人 が現れた！

いけ、サイタマ！

少女は、叫んだ！

サイタマの攻撃

やった！野生の怪人を倒した！

さんねん、兎は逃げてしまった。』

このやり取りを20回ほど繰り返した。

追いかけては見つけ怪人が現れ、兎が逃げる。

そしてあてもなく探し続ける。

延々と続くこの作業、見つけては息を潜め、邪魔な奴が現れ、そして兎は逃げる。

そして数十分前、遂に兎を追い詰めた。

路地裏に逃げ込み換気扇の下に隠れた兎を今度こそ逃さないように周囲を確認する。近くに來ていた怪人をサイタマが音を立てず早々に倒し、兎が逃げても直ぐに追えるように路地の奥がどこに繋がっているのか確かめた。

幸いな事にサイタマが路地の奥である右に曲がる場所を確かめたところ路地の先を右に曲がった所に道はなく行き止まりで真っ白な壁しかなかった。

念には念をいれ、サイタマは奥、少女は手前から少しずつ近づき、挟み撃ちにする。そつと換気扇の下に手を伸ばす少女。すうすうと寝息を立てている兎には逃げる様子は一切ない。

音を立てないように慎重に慎重に少女は身を屈み手を伸ばす…

「へっくしゅん」

くしゃみが一発

飛び起き逃走する兎。

兎はそのまま顔に手を当てているサイタマの股下を通り抜け、路地裏を駆け抜け右に曲がる。

急いで追いかけるサイタマと少女

そしてその先に続いていたのは行き止まりではなく

木組みの家が街の至る所に建ち並び、足元の全てが石畳に覆われた

人口よりも兎が多い街だった。



ここは木組みの家が建ち並ぶ石畳みの街にある喫茶店、ラビットハウス

お昼を過ぎ、昼下がりの午後といった時間帯

土曜日でこの時間なら、いつもはもう少し人がいてもいいのだが、今日は先程きた4人客（後で2人来るらしい）を含め9人しかいなかった。しかもそのうちの7人は男だ。

その中の1人にとってもなく怪しい奴がいた。

入り口に一番近い窓際の2人用の席

チノより少し小さい白いドレスのようなワンピースを着た少女、それと一緒に座っているのはスキンヘッドの男。

白くてムダに長いマントと真つ赤な手袋をした全身黄色の男だ。  
見るからにして怪しい。

父親おやじの知り合いでもここまで怪しい奴は見たことがなかった。

「おまたせいたしました、アイスココアとホットココアです」

怪しいこの男の事を少し考えながら、少女の方にアイスココア、男の方にホットココアを置く。

男と一瞬でも目があい、うっすらと男から懐かしいような、臭いが漂ってきた。

魚の生臭さと血の臭いを足して二で割ったような臭い。

何処かで嗅いだことのある臭い。

その時脳裏に何かが浮かんできた。

魚のような生臭さ・血・少女



そう、あれは昔私かまだ幼かった頃。

親父の友人の漁師が家へ遊びにきた時。そうだ、あの時これに似た臭いを嗅いだなあ。そう、あの日は、親父の友達が鮪の粹のいいのを空輸してくれて。親父との久々の再会を祝して、その鮪を生きたまま解体してくれたんだっけな。その時の鮪を解体するところを直で見せて貰った時に、たしかこんな感じの臭いがしたっけなあ、なつかしいな。たしか、あの時食べた鮪は今まで食べた中で一番うまかったかな。

サイタマにこべりついた魚型の怪人の臭いで、リゼは幼いころのよかった記憶を思い出し、久しぶりに鮪の寿司を食べたくなった。

そんな中、目の前に置かれたホットココアを見ながら

(アイスココア頼んだの俺、なんだけど)

サイタマはそんな事を思っていた。

一方そのころ

「いやあああああああああああああああああー」

とある金髪の癖つ毛の少女は街のどこかで兎に追われていた。

「なんで、こーなるよ!?」

うすい青色をした首輪をつけた兎は、左足の付け根に真つ白な体毛の中には少し黒い

